

神の捕喰は程々に

4416

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

“オリ主として出たかった

反省はしている”

作者こと 4416を中心に（というわけではないが） 日常的か

非日常的な生活を送る物語

“ 多分 オリ主は自分だけだと思う”

ギャグ多め シリアス控えめ

時系列は マガツキウビ討伐後

以上

“ いや もっと説明することあるでしょうに

例えば 自分の設定とか 神機とk（ry

適当に追記

たぶん25話目『神霊現象』からRB 農業のアレの後の時系列になつとります

## 目次

自演パライ	1
キグルミ2号	7
神蝕皇ノ憂鬱	11
聖なる探索 性格の章	14
黒いきつね	20
戦鬼憤怒	28
極東の獅子	31
唯一の天敵	37
金よりエリナ	44
ニンジャすれいやあ	51
賭博捕喰録ペイジ	55
ピンクの悪魔と紅白の人間	64
募る おもい	68
神をも恐れぬ星の英雄	73
神をも恐れぬ星の英雄 弐	79
極東山里戦争	84
副人公	88
没ネタ集	93
避暑地を求めて3000fc	100
狂騒のグルメ	105
グボログボロ黄金代表 魚淵ドログ	111
隊長の日常	118
赤と白になるアホ緑	124

愛は目で見えるもの

133

ここからRB編

神霊現象

139

グボログボロ神属代表 魚淵ドログ

156

喰べる！GE お料理ナビ

178

神罰者

209

## 自演パリエ

いつものように アラガミを倒しつつ いつものように生活をす  
る

いつしかアナグラでは それが日常となっている  
しかし 非日常な出来事が起こることも少なくない  
それは アラガミによつて起こるとは限らない…

「ロビー」

ナナ「ねえ ギル〜」

ギル「なんだ？」

ナナ「隊長がね 訓練室で何かしてるんだけど ギルは何か知らない？」

ギル「何をしてるんだ…？」

ナナ「んーとね 銃で撃つて 剣に切り替えて ぱりんぐあつぱー  
？.をしてるー」

ギル「…あの隊長のことだ 遊んでるんじゃないのか」

ナナ「んー でも すごい真剣な顔してたよ

たぶん まだ訓練室にいると思うから 見に行こーよ」

ギル「別に構わないが…」

ナナ ギル 訓練室へ

「訓練室」

4 4 1 6 「ふんっ…うぐっ！」

ガシヤン

4 4 1 6 「もう少し奥…かな」

ドン

ガシヤン

4 4 1 6 「はあっ！……うげっ！」

ギル「…ナナの言う通りだな」

ナナ「でしよー？あれってなににしてるの？」

ギル「さあな…見当もつかない…」

ナナ「ハルオミさんなら分かるかなー？」

ギル「ハルさんが…？」

ナナ「ほらー バスターブレード使ってるから」

ギル「…ダメ元で聞いてみるか」

ナナ ギル ラウンジへ

「ラウンジ」

ハルオミ「ブラッドの隊長さんが 銃撃とパリングアツパーを繰り返してる？」

ナナ「うんー」

ギル「バスターブレードを使ってるハルさんなら 何か分かるかと思ってる…」

ハルオミ「うーん 俺はパリングアツパーは殆どしないからなあ

隊長さんのしようとしては 俺も分からないな

ナナ「これじゃあ ソーマさんに聞いても分からないかなー」

ギル「……………」

4 4 1 6 「おー いたいた」

ナナ「あ！隊長！」

4 4 1 6 「赤サソリと戦車<sup>ボルグ・カムラン 墮天 クアドリガ</sup>を倒しに行くんだけどさ 一緒に行か

ねーか？」

ナナ「いいよー」

ギル「俺は別の任務がある」

4 4 1 6 「ハルさんもどうっすか？」

ハルオミ「そうだな… ギルの代わりに行こうかな」

ギル「ハルさん…」

ハルオミ「ハハハッ 冗談だよ

でも 隊長さんの任務には行くけどな」

4 4 1 6 「いよしっ じゃあ 早速行くぞ」

セイコウスルカナ」

ナナ「ん？どーしたの 隊長」

4 4 1 6 「いや 何でもない」

ハルオミ「んじゃ 行きますか」

ギル（本人に直接聞いた方が良かったんじゃあ…）

4 4 1 6 高難度 難易度9 「キャットウオーク」を受注

「蒼氷の峡谷」

ハルオミ「隊長さん それは 氷結槌イーガーかい？」

4 4 1 6 「∠（。∩。）／」

ハルオミ「？」

4 4 1 6 「も、もちろんイーガーさ…ハハ」

（どうしよう… これのためだけに造ったなんて言えない…  
！）

※実話です

（いや…自分の本命は イーガーではない…！）

クアドリガクオオオオオオオン！

クアドリガが4 4 1 6を捕捉した

4 4 1 6 「もう戦車来たの!? まだ雑魚片付けてないんだけど！」

クアドリガくシニイソギヤロウガイルトキイテ

4 4 1 6 「仕方ない…！アレを使わざるを得ないか…」

ナナ「隊長ー！はやくー！」

4 4 1 6 「え？」

ハルオミ「周りの敵は倒しておいたぞ」

4 4 1 6 「えー…」

ナナとハルオミは 既に付近の小型アラガミを殲滅していた  
4416「…まあ アレは実践で使えないと意味ないし…好都合と  
いうことで…」

ナナ「隊長ー！あぶなーい！」

4416「ふえ？」

ヒバリ『遠距離攻撃、来ます！』

ズドドーン

4416「ぬわーっ!!」

クアドリガのミサイルをモロに食らった4416

4416 激情し クアドリガをCCのみで討伐

弱点に当たったのは五回ほどだが…

4416「ハア…後は…ハア…赤サソリのみ…」

4416が所持していた回復アイテムは ほとんど使ってしまった

た

回復球しか持って行かなかったのは やはりマズかっただろう

ナナ「隊長 だいじょうぶ？」

ハルオミ「なにもムリすることあねえんだぜ？」

4416「自分は…やらなければいけないことがある…！」

だから ムリしてでも…自分は…！」

ナナ「おー 隊長 かつこいい！」

ハルオミ(わざわざ難易度の高いミッションに行く必要はなさそう  
だけどなあ

でも 言っちゃ悪いから黙っとくか)

ボルグカムラン墮天と交戦開始  
から数分後

ボルグくアッアッ アアアアッ！

4416「よし ダウンとった！」

4416 神機を剣から銃形態へと変える



そして バレットを発射した

そのバレットは 銃口から少しずれた位置に 球を撃ち出す 少し変わったバレットだった

ハルオミ「球…？ 機雷か？」

再び 剣状態に変える

4 4 1 6 「ラストリベンジャーの弱点は ガード判定の短さとガードしないと発動しない点…」

熟練した者でないと 使いこなせない上 ダウン中は 無意味に等しい…

しかし！それらを覆すバレットを 試行錯誤の末 完成させた…！」

突然 ラストリベンジャーについて語り始めた

4 4 1 6 「この球でラストリベンジャーを強制的に発動させる！

食らえ！ラストリベ あ 球消えた…」

スカッ

ヒバリ『アラガミの活性化を確認』

4 4 1 6 「んなアホな」

ボルグ<サボテンニシテヤル

4 4 1 6 「ぬわーっ!!熱っ！」

結局 CCを主体にボルグカムラン墮天を撃破

ヒバリ『オラクル反応の消滅を確認

帰還ポイントを送信します』

4 4 1 6 「」

4 1 6 高難度のミッションでなくても良かったと気が付き 呆然とする

ナナは その姿を見て 疲れているのだと解釈した

ナナ「隊長ー おでんパン食べるー？」

4 4 1 6 「」

(俺の苦勞はいつたい…)

ハルオミ「まあ 隊長さん そんな落ち込むなよ

帰ったら一杯やろうぜ な？」

4 4 1 6 「」

――翌日

〔訓練室〕

4 4 1 6 「出来たああああ!!」

アナグラ内に響き渡るほどの大声をあげる4 4 1 6

しかし 訓練室は防音仕様なので その声を聞いた者は近くに  
いる人ぐらいだろう

4 4 1 6 「うえほっ!げふおっ!…」

慣れない大声を出したため むせてしまった

4 4 1 6 「よーし さっそくテストだ!

サルコンゴウあたりでも行くか」

4 4 1 6 通常 難易度2 「邂逅」を受注

〔黎明の亡都〕

4 4 1 6 「アカーン!すばしっこくて当たらん!

ダウンとれねー!」

案の定 ラストリベンジャーを当てられずにいた

オウガくウシロガガラアキダゼ

4 4 1 6 「ぬわーっ!!」

――終――

## キグルミ2号

「ラウンジ」

4416「……………」

4416はなぜか プリティアニマルを着て クマの被り物をしている

キグルミ「……………」

そして キグルミと向き合っている

4416「……………」

キグルミ「……………」

ほぼ同時のタイミングで 右手を前に突き出し 拳(?)を合わせていた

4416「……………」

キグルミ「……………」

偶然なのか 必然なのか 同じ行動をとったことに 両者ともに左腕でガッツポーズをした

端から見れば 謎の光景である

コウタ「…なんだアレ」

フラン「キグルミですね」

コウタ「いや それは分かっているんだけどさあ…」

エミール「言葉を交わさずとも 意志が通じ合う…！」

素晴らしいことではないか！」

4416「ところで サリエル 堕天ヶボロ・ケボロ 毒女と 魚 を倒しに行くんだけど キグル

ミも行くかい？」

コウタ「あ 喋った」

キグルミ「……………」コクン

4416「よし！」

キグルミ「……………」

今度は 互いの右腕をくむような行動をした

コウタ「事前に打ち合わせでもしてるんじゃないか…？」

タイミングが合いすぎてるし…」

エミール「人間は 絆が深ければ深いほど 息が合うのだという…  
そう…あの二人のように…!」

カノン「あの…教官先生…ですか?」

4416 「よーっす カノン  
どした?」

カノン「そのクマのきぐるみ 可愛いですね」

4416 「可愛い?」

カノン「はい そのクマの無表情が 逆に可愛いというか…」

4416 「カツコイイの間違いじゃないのか?」

カノン「え?」

コウタ「え?」

フラン「……………」

エミール「ほう…」

4416 「いいか クマはな かつて自然で生活する動物の中でも  
危険視されていたほどの動物だぞ

アラガミには及ばないかもしれないが 人間にとっては十分  
脅威的だったと記されている…」

コウタ「な なんか語り始めたぞ…」

4416 「クマは 人間を超える体躯で 走ったり泳いだりするだ  
けでなく 木に登ることも出来たという ハイスペックな動物だぞ

それを可愛いというのは 筋違いじゃないのか?」

カノン「はあ…」

コウタ「あまりの熱弁に ポカンとしてるし…」

4416 「まあ それは置いといて カノンも一緒にミッションに  
行くか?」

カノン「あ はい お供させていただきます!」

4416 「いや そんなかしこまらなくてもいいよ」

4 4 1 6 通常 難易度7 「地火帝国の魔女」を受注

「煉獄の地下街」

4 4 1 6 「あつつううううう!!」

グボロくギャオオオオ!!

4 4 1 6 グボロ・グボロに捕捉される

キグルミ「……………」

カノン「大丈夫ですか!？」

4 4 1 6 「暑い…!暑い…!熱がこもる!」

カノン「今すぐ冷やします!」

4 4 1 6 「ああ頼むううう…え」

カノンの方を見ると 銃口がこちらに向けられていた

ドオン!

4 4 1 6 「ぬわーっ!!」

氷属性の放射バレットを 躊躇うことなく撃ち出された

4 4 1 6 「痛あい!なんで放射使ったの!？」

カノン「冷やしてほしいって 言っただよね?」

4 4 1 6 「いや 俺は暑いつて言っただk」

カノン「言っただよね?」

4 4 1 6 「…ハイ…イイマシタ…」

ヒバリ『遠距離攻撃、来ます!』

ドバババー

4 4 1 6 「ぬわーっ!!」

サリエル墮くナニコレ…

ヒバリ『最後のアラガミの撃破を確認

お疲れ様です』

4 4 1 6 「」

途中 何度も遠距離攻撃と猛毒の鱗粉とカノンの誤射を食らいま

くつた4416

カノン「私　今回は誤射が少なかった気がします」

4416「」

キグルミ「……………」サスサス

そつと背中をさするキグルミ

4416「…キグルミ…どうやら自分は…キグルミにはなれないよ  
うだ…」

キグルミ「……………」

4416「…すまん」

キグルミ「……………」グツ

4416「…そうか…そうだな」

カノン「？」

あの時以降　プリティアニマルは　部屋のインテリアにしたとか  
してないとか

ー終ー

## 神蝕皇ノ憂鬱

ここは居心地がいい

つい最近になって出来た場所だから 他のヤツらもすぐには来ないはずだ

今ここにいる者は 自分も含めて三体だ

自分達は 同種だ

基本的に 同種を喰らうことはあまり無い

だが 同種だからという理由で群れることも あまり無い

単に 捕喰するためには手段を選ばないだけだ

群れで行動すれば 強敵の捕喰ポイントを横取りできる

あわよくば その強敵を喰らうことも可能だ

だから 群れで行動する

しかし 一見 合理的に思えるが 一つの欠点がある

それは 分け合わなければならぬことだ

つまり 自分の取り分が減るわけだ

人間は 自分達は何でも喰らうと思っっている

それはあながち間違いではないが 万人が無類に喰らいまくるわけではない

自分達にも 偏喰傾向はあるのだ

例えば 人間が呼ぶ「デミウルゴス」というヤツらは 建造物を好んで捕喰するという

自分達も例外ではない

自分達は 人間から「スサノオ」と呼ばれているらしい

そんな自分達は 人間が持つ武器「神機」を好んで捕喰する

「神機」さえ捕喰出来ればいいのだが 生憎そうはいかない

どうやら「神機」は 人間が自分達に対抗出来る武器の一つらしい  
いざ戦闘となれば 捕喰行為自体難しい

だから仕方なく 他の物でも喰らっている

そうするしかないのだ

自分は一度 単騎で人間に挑んだことがある  
緑髪の間が一体だけ

これなら自分だけでも喰らえると思った

しかし そう簡単にはいかなかった

鋭い一撃が身体を貫くも 対抗して自分も攻撃する

人間の攻撃は隙が大きく 広範囲の攻撃なら当たる程度だった

やたらと「ぬわーっ!!」と叫んでいたが 何度攻撃しても倒れな  
かった

自分の身が危うくなれば 戦線離脱して捕喰に向かった

そんな攻防戦が30分以上たった頃 体力も限界に近付き 諦め  
かけていた

しかし人間は 急にどこかへ去っていった

まるで 消えたかのように…

自分は 神機を喰らえなかったことよりも 命があった安堵感の  
方が強かった

それ以来 群れで様々な神機使いと相手してきたが あの人間は  
見えない

別のヤツらに喰われたか それとも まだ生きているか…

どちらにせよ 自分はあの人間に二度と会いたくない

数ヶ月前のことだが 生きているなら 前より強くなっているこ  
とは確かだろう

人間とはそういう生物だ

噂で耳にしたが「ルフス・カリギュラ」というヤツと「マルドウー  
ク」と呼ばれているヤツが 同じ人間に二度挑んで 二度目にやられ  
たそうだ

人間を軽視すれば 自分の身を滅ぼしかねない…

あの時に得た教訓だ

どうやら 自分達の存在を嗅ぎつけて 人間がここに来たらしい

同種の一体が様子を見に行った

危うくなれば すぐに引き返すように言っておいたから 無茶は



しないはずだ

近くで戦闘音が聞こえる

その音に混じって 同種の叫び声も聞こえる…

これはまずいのでは…

2, 3分たった頃 ピタリと音が止んだ

もしや やられてしまったのか…?

確認するべく 残りの同種と共に 様子を見に行く

そこから遠目で確認できたのは 四体の人間

その中に 緑髪の人間を発見した

まさかと思い よく見ると 悪い予感的中した

あの時の人間だ…

アイツはダメだ…

同種を止めようとした時には もう戦場に降り立っていた…

4 4 1 6 「荒魂の城跡 おいしいれす (^ p ^)」

┌終┐

## 聖なる探索 性格の章

「ラウンジ」

ラウンジの奥の席に座っているハルオミと4416

普段 おちやらけている二人が いつになく真剣な表情をしていた…

ハルオミ「俺たちは ゴール地点はスタート地点だということを発見して スタート地点へと帰ってきた

それで 俺たちの探索は終わった…」

4416「……………」

ハルオミ「だが 探索が終わったにも関わらず この結論に納得がいかない…

その気持ちは 徐々に強まっていくばかり…」

4416「……………」

ハルオミ「そしてある日 俺は気付いたんだ…

気付いた時に 今までの自分が恥ずかしく思えてきた…」

4416「それは…いつたい…」

ハルオミは 少しの間目を閉じてから 口を開いた

ハルオミ「…思い返すと 俺たちは様々なものを追い求めた

ニーハイ… 低露出… 生足… そして 胸…」

4416「はい… でも…これらのどこに恥じることが…?」

ハルオミ「俺は 隠されているのがいいだの 隠さない方がいいだのと言っていた…

だが どっちにしる俺は 目に見えるものしか見ていなかった…!」

憤りにも似たその一言から 4416は少しばかり戸惑う

4416「目に…見えるもの…?」

ハッ…!? まさか…!?」

ハルオミ「そのままさかだ…!」

俺たちは 人として最も重要な…

性格を考えていなかったんだ!!」

♪(例のBGM スタート)

4 4 1 6 「ああ…過去の自分を殴りたい…!」

ハルオミ 「俺もできることなら 過去に戻りたい…!」

しかし それができない今 俺たちにできることは一つ

…

前を向いて 歩くしかない…!」

4 4 1 6 「後ろを向いている暇は無い…!」

ハルオミ 「ああ その通りだ!」

4 4 1 6 「ハルさん 突然ですが 自分の不躰な願いを 聞いてく

れませんか?」

突如 立ち上がる4 4 1 6

ハルオミ 「ん? 何だ?」

4 4 1 6 「今回のモデル探しは 自分に任せてもらえないでしょう  
か?」

ハルオミ 「お前が…?」

4 4 1 6 「自分は ハルさんと共に歩いていた気になっていました

しかし自分はただ ハルさんについていただけに過ぎませ

ん…

ですから 今度は肩を並べて歩んでいきたいのです…!」

ハルオミ 「…お前も言うようになったな

よし!モデル探しはお前に任せよう!」

4 4 1 6 「ありがとうございます!

この4 4 1 6 全力で勤しむ所存でございます!」

ハルオミ 「そんな固くならなくてもいいんだぜ

俺たちは…相棒だろ?」

4 4 1 6 「ハルさん…!」

二人の絆が より一層に深まったのであった…

アリサ 「公共の場であんなことを言うなんて…ドン引きです…!」

ソーマ「好きにさせてやれ…」

興味が無さそうに その一言を放ったソーマに対してリンドウは  
リンドウ「なんとというか あれだな

なんか 楽しそうだな」

アリサ「リンドウさん!？」

興味津々であった…

――二十分後

4 4 1 6 「今回 自分がチョイスしたのは 王道でもある『ツンデレ』」

最初はツンツンとした態度を見せるが 次第にデレていくというもの…」

ハルオミ「それが 本来のツンデレ…」

4 4 1 6 「はい… ある時期に ツンデレとはツンとデレを持った性格 と認識されていました」

ハルオミ「世間は恐ろしいよなあ…」

過半数の意見が正統化され そして それに流される…」

4 4 1 6 「同感です…」

さて 本題に戻りましょう

今回のモデルは 極東支部第一部隊所属 エリナ・デアII  
フォーゲルヴァイデです!」

エリナ「うう…フルネームで呼ばれると 恥ずかしいなあ…」

4 4 1 6 (赤らめた顔もイイネ!)

心の中で親指を立てる4 4 1 6

ハルオミ「隊長さん 早速ミッションに行くとしますかあ」

4 4 1 6 「そうっすね」

4 4 1 6 通常 難易度9 「ザ・スカルフフェイス」を受注

「贖罪の街」

ハルオミ「しつつかし 隊長さん

神機からやる気が痛いほど感じるね」

4416「ええ エリナにカツコ悪い所は見せられませんしね」

(この時のために 穿槍リトクリーヴを引っ張り出してきた…)

意地でもノーダメージで勝たなければ…！)

エリナ「ねえ 先輩」

4416「ん？何？」

エリナ「ハルオミさんがいるのは分かるけど…

なんでエミールまで…？」

4416「別にいいじゃん

1人でも多い方がいいし」

(エリナのツンはエミールにしか見せないし…)

エリナ「まあ 先輩がそう言うなら…」

エミール「そう心配するな エリナよ

僕は足を引っ張るつもりは毛頭ない」

エリナ「そういうこと言ってるんじゃないの！」

4416「(・▽・)ニヤニヤ」

フラン『中型種が作戦エリアに侵入しました

侵入地点の情報を送ります』

4416「よし そろそろ行くか」

30秒後

フラン『感応種の侵入を確認！

侵入ポイントの情報を送ります』

4416「来た来た」

スパルタカス<リヨクハツウ！ヨクモドウホウヲ！

突然 怒るスパルタカス

4416「え？なんかいきなり活性化した!？」

ラージャ<バカヤロウ ニゲルゾ！ヨニンアイテジャブガワルイ

！

好機とみてか 捕喰に向かうヤクシャ・ラージャ

4416 「ちよつと！どこいくねーん！」

バイク<トツゲキ

ヤクシャ・ラージャに気を取られた4416の背後から 突進を繰

り出すドレッドバイク

4416 「ぬわーっ!!」

スパルタカス<リヨクハツウウ!!

両腕を広げ 急接近するスパルタカス

エミール「のわああ!!」

巻き添えを食らったエミール

戦場は混沌と化していた…

三分後

スパルタカス<コノウラミ…ハラサデオクベキカ…

フラン『目標の沈黙を確認

…早い さすがです』

4416 「」

結局 ノーダメージでなくなった4416だった…

ハルオミ「今回は…あー…不測の自体が起こったからな…

あれは仕方ない」

4416 「」

ハルオミ「しっかし いきなり怒ったのはなんだったんだろうな」

4416 「」

(なんで ドレッドバイク 虫ごときの攻撃で吹っ飛んだんだ?)

『おおげさ』なんて発動してねーのに…)

エリナ「先輩！帰ろっ♪」

4416 「」

(…ま いっか)

エリナ「…先輩？」

ハルオミ「今はそつとしておいてやってくれ」

エミール「忌まわしきアラガミめ…!

友を精神的に追いやるとは!

4416「

「終」

## 黒いきつね

「サカキ博士の研究室」

室内には ハルオミ、エミール、ギル、そして 4416がいた  
四人とも サカキ博士に呼び出されて ここにいる  
サカキ「忙しいところ 急に呼び出してすまない」

キミ達に 手伝ってもらいたいことがあるんだ」

4416「ウロツオロス師範の討伐スか？

二・三分で討つてきますよ」

4416は やたら自信有りげに言った

サカキ「いや 今回は別の依頼だ」

4416「まさかウロツオロス師範代とか アマテラスてんてるとかじゃないスよね？

ヤツらとはあんまり接触したくないンスけど」

サカキ「安心したまえ」

それらとは別のアラガミだ」

ギル（師範とか てんてるとか 何のことを言っているんだ…？）

サカキ「キミ達には あるアラガミの素材を持ってきてもらいたい

その素材が 竜帝金糸と禁王高純油だ

各二つずつ お願いするよ」

4416「カリギユラ皇帝とテスカトリポカ二面ボスか

皇帝はいいけど 二面がなあ…」

ハルオミ「んじゃ 二手に別れて行くつてのはどうだ？」

効率化のためか 提案を出してきたハルオミ

4416「あー」

ハルオミ「俺はギルと お前はエミールと てな感じでいいか？」

4416「いいスよ」

エミール「サカキ博士 1つお聞きしたいことが」

場の空気などお構いなしに エミールはサカキ博士に質問  
し出した



サカキ「ん？なんだい？」

エミール「いったい どんな研究をされるのでしょうか？」

4416 「あー 確かに気になる

大概の研究はソーマさんがやってるし」

サカキ「そのことについては 追々話すでしょう

今は素材を集めてきてほしい」

4416 「アツハイ」

4416 通常 難易度10 「インフェリス」を受注

4416 「オラソ&アルバレで行こ」

「鉄塔の森」

4416 「ザコは無限湧きだからなあ

皇帝メインで片付けるぞ」

エミール「了解した」

炎メイデン<ダレガザコヤネン！ イテマウゾ！

炎テイル<ヤンノカ ワレエ？ヤツタンデコラア！

カリギユラ<オチツケ

炎属性であるためか やたらと熱くなる小型アラガミ達：

三分後

ヒバリ『アラガミの結合崩壊を確認』

4416 「いよし ブースター壊したった」

カリギユラ<ブルルアアアアア!!

4416 「まあ 怒るわな」

炎メイデン<イテマウゾ！

横槍（物理）を入れるコクーンメイデン墮天

4416 「ぬわーっ!!」

炎テイル<ヤツタンデ コラア！

横槍（物理）を入れるヴァジュラテイル

エミール「のうわああ!!」  
カリギュラくオマエラ オチツケエエ!!  
冷やしたいのか熱くなりたいのかわからないカリギュラ

三分後

ヒバリ『目標のアラガミは全て撃破しました』

4416「よし 喰うぞ」

炎テイルくシャー!

案の定 捕喰の邪魔をしてくる

4416「ぬわーっ!!」

エミール「アラガミめ!卑怯な真似を…!」

炎メイデンくラア!

エミール「のうわああ!!」

「サカキ博士の研究室」

4416「まあ なんとかゲットしました…」

ハルオミ「お疲れさん

こつちも今し方戻ってきたところだ」

サカキ「ご苦労様

さて 私は作業を始めるとしよう

それまでの間 キミ達はゆつくり休んでくれたまえ」

4416「ダクソして寝よ」

エミール「精一杯動き回った後の紅茶も 悪くない…」

ハルオミ「さーて 一杯やるとしますかねえ」

ギル(ダクソ…?)

各々 自由に動いていった…

十二時間後

「自室」

4416 「zzz」

爆睡中の4416

「zzz」

<タイチヨーサーン

「zzz」

<タイチヨーサーン

「zzz」

<ハイルゾー

「zzz」

ハルオミ「おーい 起きろー」

「zzz」

ハルオミ「エリナちゃんが待つてるぞ」

4416 「なに!？」ガバツ

ハルオミ「よし 起きたな

もう出来たんだとよ」

4416 「エリナは？」

ハルオミ「ありや お前を起こすためのウソだ

スマンな」

4416 「」ボフツ

ハルオミ「あー 悪かった 俺が悪かったから

ふて寝すんなって」

(ここまでダメージがデカいとはな…)

「サカキ博士の (ry)」

サカキ「研究の成果の前に まずは 話を聞いてほしい」

4416 「アツハイ」

サカキ「まだオラクル細胞が発生していなかった頃の世界には

レーションとは違うコンセプトの保存食があったという

その中でも人気を博していたのが 即席麺と言われる物らしい

即席麺とは お湯と付属のスープを入れて 待つだけできるという物だ

簡単に美味しく出来る上に 保存性もある そんな夢の食べ物を実現出来ればと思ったワケだ

4416 「それがアラガミと何の関係が……？」

サカキ「キミ達は 戦闘中に回復する時 どんな手段を用いる？」

4416 「捕喰時体力回復のスキル有りの捕喰」

ギル「回復錠を飲む」

ハルオミ「回復柱を使うかね」

エミール「無論 回復弾を（ry

4416 「ロングのBAの吸命刃もアリだな」

サカキ「それら全ては オラクル細胞によって瞬時に効果が出る

偏食因子を組み込んだゴッドイーターだからこそ成せる業だ」

4416 「んで オラクル細胞と即席麺と 何の関係が？」

サカキ「私が研究していたのは 出撃前に食すことで 身体能力を一時的に向上させる糧食を研究していたんだ

四方八方 あらゆる情報を集めたところ 麺類は 乾燥させると長く保存が効く上 お湯で戻すだけだから時間も取らないと

いう

まさに 私の研究にうってつけの食べ物だろう？」

4416 「いいんじゃないかな」

サカキ「そして まだ試作段階ではあるが 出来たのがこれだ」  
スツ

サカキ博士は 紙と金属箔のふたで閉じられた 白いどんぶりを出した

4416 「どんぶり？うわ 軽っ！」

ハルオミ「お湯を入れるだけで出来るのか」

なんで普及してないんだろうな」

4 4 1 6 「というか なんで黒ギツネマガツキユウビの絵が…」

サカキ「どうやら 即席麺の一種で『赤いき〇ね』というものがあつたそうだ

それに因んで その絵を印刷してみたんだ」

4 4 1 6 「へー」

エミール「早速 食べてみようではないか」

ギル「サカキ博士は食べないんですか？」

サカキ「私が言うのもなんだが 作った本人だと 過大評価をしてしまう恐れがあるのでね

まずは キミ達の意見を参考に 微調整を行うつもりだ」

4 4 1 6 「アツハイ」

ハルオミ「それじゃ お湯をもらってきますかね」

「ラウンジ」

4 4 1 6 「ムツミちゃん…がいない」

エミール「なんと…これでは…」

4 4 1 6 「まあ でも お湯ぐらいなら使ってもいいっしょ」

躊躇なく ふたを剥がして ふたをゴミ箱に捨てた  
そして 説明も見ずに目分量でお湯を注いでいく

4 4 1 6 「お湯を入れたら…なんだっけ？」

ギル「フタを閉じて五分待つ…じゃなかったか？」

4 4 1 6 「フタね フタ

…フタ？フタなんてねーぞ？」

ギル「さつき剥がしたやつがフタだ」

4 4 1 6 「えー捨てちまったよー

まあ いいや この皿借りよ」

食器棚から皿を取り出し 裏返してふたをした

4 4 1 6 「んで 五分

キッチンタイマーも借りよ」  
ハルオミ「待ち遠しいなあ」

五分後

4416「…んできさ こつちは脳筋で黒鉄だからさ 雷ショーター  
なんか勝てるワケが……」

ピピピピピ

キッチンタイマーの音が鳴った

4416「お 五分たった」

エミール「では 早速いただきますとしよう」

ふたを取り 皆同時に食べ始めた

ズルルツ

モグモグ…

ハルオミ「こ…これは…」

エミール「なんという…」

ギル「予想を…裏切る…」

4416「不味さ…!」

バタンツ

顔面蒼白になりながら 気絶した四人

十数分後 ラウンジに戻ってきたムツミが 現場を見て騒然とし  
たという

「病室」

4416「………う」

コウタ「お 気がついたか」

4416「ここは…」

コウタ「病室だよ」

ムツミちゃんが 四人が倒れてるのを見て 皆を呼んだん

だ」

4 4 1 6 「…自分は確か うどんを食ってて…」

コウタ「そのうどんなんだけどさ アレって 何なの？

見たこともないし…」

4 4 1 6 「あのうどんは サカキ博士が作った試作品でさ…

なんというか 不快な甘酸っぱさというか…

とても食えるような代物じゃない…」

コウタ（サカキ博士が作ったて…ダメじゃん…）

4 4 1 6 「微調整どころか 大幅な修正が必要だ と報告しようか

ね」

コウタ（初恋ジュースの悪夢が…再来する…!）

コウタを中心とした 反黒いきつね組合により 黒いきつねの製

品化は凍結したのだとか

―終―

## 戦鬼憤怒

ここ最近 オレ達 スパルタカスの個体数が減少している  
そしてなぜか それに平行して ヤクシヤ・ラー ज्याの個体数も  
減っている

ヤクシヤ・ラー ज्याはともかく ただでさえ少ないオレ達が減少し  
ているというのは 由々しき事態だ

ホントかどうかは分からないが 急激に数が減ると それに対応  
しようと変異して 新種が生み出されるとか…

オレ達の元となったハンニバルというヤツが変異して 素早く動  
けるようになったとか…

そんなことはどうでもいい

問題は 減少している原因だ

同胞の話によると とあるゴツドイーターを中心に オレ達を狩  
り回っているらしい

理由は不明

そのリーダー格のゴツドイーターは ズバ抜けて強いらしく  
さつきも言った新種のハンニバルを 1人で倒したとか…

何にせよ ヤツを潰さない限り オレ達の減少は止まらない…！

今日は 木造の建築物付近で ゴツドイーターを殺くつた  
まさか オレ達がここへ来るとは思わなかっただろう

もとより オレ達がここに滅多に来ないこともあるがな

オレは ついさつき喰ったヤツが 例のゴツドイーターだと思っ  
たが 同胞によると コイツは違うらしい

ヤツは 緑色の髪の毛の男で 黒い槍を使うらしい

そして また オレ達を倒し回っている…

…いいだろう

ヤツがその気なら オレ達から出向いてやる…！



部下の数があれば 勝利はこちらのものだからな  
許しを乞う暇すら与えてやらねえ…！  
もつとも そんなことしたって許さねえがな！

教会という建物の付近が オレ達の狩場  
小型の野郎共も 腐るほどいる  
にも関わらず

オレの同胞が殺された…

…許さねえ

許さねえ…！

ヤツらはどこに行った!?

…いた！

緑髪…！

コロシテヤル…!!

…と言いたいが 単騎で挑むのはさすがに無理がある  
まずは戦力を集めねえと…

緑髪…

次に来た時が お前の命日だ…！

仲間と仲良く死にに來な！

…來たな

緑髪に黒い槍…間違いない…！

まずは様子見だ

おい お前

「うい」

先に行け

「え？」

いいから早く行け！

「ははいー」

さて ヤツらの実力は…

30秒後

そろそろやってやろうか…

緑髪ウ…!

『お 来た来た』

緑髪ウ！よくも同胞をオ!!

『え？なんかいきなり怒った!?!』

「バカヤロウ逃げるぞ！四人相手じゃ分が悪い！」

情けねえ野郎だ

しかし 逃げようと構わねえがな

『ぬわーっ!!』

遊んでんじゃねえぞ！緑髪ウウウ!!

そこの金髪 ジャマなんだよ！

『のうわああ!!』

三分後

チクシヨウ…！なんてザマだ…!

1人も殺れなかった…!

オレは…ヤツを倒すまでは…

呪つテ デも… コ ロシ テヤ ル…

4416「スパルタカスタカシ君の素材は 極密度複合コアの素材に便利だから  
なあ

エリナにカツコ悪いとこ見せてしまったけど…  
±0ってことで…良くないな…うん…

―終―

## 極東の獅子

かつて極東に 強力な新型神機使いがいたという  
その人物は 極東支部第一部隊に入隊してから わずか数ヶ月で  
第一部隊の隊長に任命された  
また エイジス計画を陰に 秘密裏に進められていたアーク計画  
を阻止した人物でもある

噂では 第一部隊前隊長のアラガミ化をも阻止したとか…  
伝説と言われてもおかしくない そんな人物は今 独立支援部隊  
クレイドルに所属し 世界中を回っている  
本人曰く 自身の力と仲間の力、これらが合わされば 人類の希望  
となる と言い クレイドルに所属したのだとか

ある時 誰かが彼を こう言った

極東の獅子だ と

フェンリル  
雄大な姿と強者の力からか 彼は極東の獅子と云われていた  
狼から産まれた獅子

彼は 自分が獅子であることは自覚していないが 人類の希望の  
1つであるということは 疑わなかった  
今日も何処かで 未来の為に アラガミ やいば 獲物を牙で裂いているだろう……

「ラウンジ」

リンドウ「コウタの前の隊長なんだけどさ

アイツ 俺達がブラッドアーツを使えるのを知ってから  
か ちよつとムキになつちまつててな」

4416 「ふうん」

リンドウ「自分だつて使えるーの一点張りで ちつとも話を聞い  
てくれないんだ」

4416 (リンドウさんも 話聞かないじゃん…)

リンドウ「まあ 正直なところ お手上げ状態でな

でも ブラッドアーツを覚えてくれた大先生を知ってるって言ったら 話がしたいって言ってるな」

4416 「いや ちよつと待って」

大先生って何？」

リンドウ 「たぶん もうすぐ来るんじゃないか？」

アイツ めでたい色してるから すぐわかると思うんだけどなあ」

4416 「めでたい色？めでった色じゃなくて？」

リンドウ 「おう めでたい色だ」

そうだなあ 例えるなら…」

??? 「リンドウ殿 何をなされている」

リンドウ 「おお ちようど良いところに来てくれた」

だいたいこんな感じの見た目でなく 背丈も同じぐらいだな」

4416 （…本人じゃね？）

??? 「リンドウ殿？」

リンドウ 「喋り方もこんな感じで…て 何だお前か どうりで似てると思ったワケだ」

??? 「一体 何を？」

リンドウ 「あー コイツが前話してた 例の大先生だ」

4416 「いや だから待って」

??? 「なるほど 貴公が…」

4416 「き きこう？」

イチカ 「お初にお目にかかる

独立支援部隊クレイドル所属 白匙しろさきイチカと申す」

4416 「あ ご丁寧にどうも

ブラッドの隊長の4416です」

リンドウ 「そういや サカキ博士に呼ばれてたんだった

んじや 後は頑張れよ」

4416 「いや 待って

どこ行くねーん」

イチカ「早速だが ブラッドアーツの伝授を頼む」

4 4 1 6 「：とりあえず 実戦で教えよ……」

4 4 1 6 通常 難易度8 「雷氷瀑布」を受注

「蒼氷の峡谷」

4 4 1 6 「バスターブレードかあ」

(しかも剛鋸アダムブレイク……)

イチカ「貴公はチャージスピアか」

(穿槍リトクリーヴとはな……)

4 4 1 6 「えーつと……ブラッドアーツを教えるつつつても 手取り  
足取り教えるんじゃなくて……

自分の血の力の『喚起』で 隠れた力を覚醒させる……みたいな  
？

まあ 気がついたら覚えてるってワケよ」

イチカ「：実際に戦う方が早いと？」

4 4 1 6 「ま そんな感じかな

どんなブラッドアーツを覚えるかは 覚えるまで分からない  
けど」

イチカ「なるほど……

そうと分かれば アラガミを討伐するのみだ」

4 4 1 6 「んじゃ 動きのノロい石仮面デミウルゴスから」

イチカ「了解」

デミウルゴスクムダムダムダムダムダムダア!!

4 4 1 6 「よーし 喰うぞ」

バクンツ

4 4 1 6 「濃縮 受け取れー」

イチカ「すまない」

4 4 1 6 「も1個いくぞー」

イチカ「感謝する」

4 4 1 6 「ラストお」

イチカ「ツ…ハ…！」

4 4 1 6 「ん？」

イチカ「ツハハアアア!! 切り刻んでやるぜエエ!!」

4 4 1 6 「!?!」

イチカ「うらアア!!」

デミウルゴス<ウゲエツ!

イチカ「その仮面 叩き割ってやんよオオ!!」

デミウルゴス<クウア!

4 4 1 6 「……………」

40秒後

イチカ「さあ 次の討伐対象に向かおう」

4 4 1 6 「ワカリマシタ」

イチカ「？」

4 4 1 6 (いくらなんでも倒すの速すぎ…)

逃げた方がいいぞ ヴァジュラ 虎…)

ヴァジュラ<ブエツクシエイ!

約二分後

4 4 1 6 「」

(自分 何もしてないのに… もう終わった…)

素でも充分強いじゃん…)

イチカ「…妙だ」

4 4 1 6 「な 何が？」

イチカ「力を溜める際 バーストレベル3の時は 本来よりも長く

チャージが続いた

だが その時以外は 通常のチャージだった…

心なしか チャージ中に疲れやすくなったような…」

4 4 1 6 「…マサカ……」

イチカ「ソーマのブラッドアーツに似ているが 発動条件が異なる…」

4 4 1 6 「それ CCジ・エンドですよん…」

イチカ「ほう…それはいったい…？」

4 4 1 6 「CCジ・エンドはだな…」

青年説明中…

イチカ「なるほど…そういうことか

披露する機会は少なそうだな」

4 4 1 6 「威力はとんでもないけどな」

(とというか いきなりCCジ・エンドを覚えるのもとんでもないけど)

イチカ「何はともあれ ブラッドアーツの伝授 感謝いたす」

4 4 1 6 「いやあ 自分は特に何も…」

「ラウンジ」

4 4 1 6 「ムツミちやーん オムライス1つ」

ムツミ「はーい♪」

4 4 1 6 「あー 疲れたー

んな動いてないけど」

リンドウ「よーつす 隊長さん

隣 いいか？」

4 4 1 6 「ええ いいツスよ」

リンドウ「ずいぶん早かったな

んで どうだった？」

4 4 1 6 「そりやあ 一発で卒業ですよ

ムチャクチャ強すぎませんか？あの人」

リンドウ「まあ アイツはな 暫定だけど極東支部で一番の実力者だからな

『極東の獅子』なんて云われてるしなあ」

4 4 1 6 「はい!？」

リンドウ「ペーペーの新入りだったヤツが 今では極東支部最強の  
ゴツドイーターか…」

人生 何が起るかわかったモンじゃないな!」

4 4 1 6 「いやいやいやちよつと待って下さい!

なんでその最強さんを 自分に押し付けたんスか!」

リンドウ「まあ なんとというか…

お前さんなら何とかなるだろうって 信じたからだな」

4 4 1 6 「……………」

そういえば あの人の バーストレベル3になったら 性格が  
変わったんスけど」

リンドウ「それが獅子と云われる理由だ

眠れる獅子が目を覚ましたような…そんな感じだったろ  
?」

4 4 1 6 「そんな感じですけど…

強すぎるでしょうに…」

リンドウ「まあな…

でも そんなアイツでも 感応種には手も足も出なかつ

たけどな

さすがのアイツもムリだったようだな…」

4 4 1 6 「感応種は仕方ないスね」

ムツミ「はい オムライスお待ちどおさま♪」

4 4 1 6 「ありがとう ムツミちゃん

じゃ いただきまーす」

リンドウ「俺はそろそろ行くわ

遅刻したら お疲れ様 アリサが怖えからなく」  
4 4 1 6 「もづかえしやまえーす」

ー終ー



## 唯一の天敵

「ラウンジ」

いつもなら賑やかなラウンジ

しかし 今日には少しばかり雰囲気がい

そしてなぜか ラウンジにはシエル ナナ カノンの三人しかい  
ない

というのも 暗い雰囲気を感じた男性陣が

雰囲気に耐えきれず  
気を利かせてロビー

に出たからだが…

なぜ こんなことになったのか？

事の発端は シエルだった…

シエル「すみません カノンさん

お忙しいところ ご相談に乗って頂いて…」

カノン「い いえ そんな…

ところで ご相談というのは？」

シエル「はい… 相談と言つていいのかは分かりませんが…

先日 隊長に 日頃の感謝を込めて ケーキを焼いたので  
すが…」

シエル「隊長 少しよろしいでしょうか？」

4 4 1 6 「ん？なに？」

シエル「あの…これ…

チーズケーキを焼いてみたので よかつたら…」

4 4 1 6 「ゴメン いらぬや」

シエル「…え？」

4 4 1 6 「作ってくれたんはいいけど 自分はいらぬや」

シエル「…とということがありまして……」

カノン「はぁ……」

ナナ「隊長はねー 普段はたよりないけど ホントは優しいんだよ

だから シエルちゃんかね 困ってるの」

カノン「確かに なぜでしょうね……？」

私の場合は 喜んで食べてくれましたけど……」

カノン「あのっ 教官先生！」

4416 「なんぞ？」

カノン「よかったら これ どうぞ！」

4416 「お うまそだなく」

カノン「初めてパウンドケーキに挑戦してみたので お口に合うか

どうか……」

4416 「実 食 ツ !!」パクツ

モグモグ……

4416 「美味いッ!!」

カノン「本当ですか!？」

4416 「うん ホントだよ」

カノン「良かった」

あのっ 好きなだけ食べて下さい！」

4416 「おー いいのか？」

じゃ 遠慮なく……」パクモグパクモグ

カノン「…と 作った分を全部食べてくれましたよ

シエル「………」

ナナ「そういえば 私もねー……」

ナナ「隊長ー」

4 4 1 6 「んー?」

ナナ「はい どうぞ♪」

4 4 1 6 「…ナニコレ?」

ナナ「んーとね ヘルシーなクッキーを作ろうと思つてね

たしか ピーマンとニンジンとトマトとー…

あとはー…忘れた!」

4 4 1 6 「……………」

ナナ「それでね 見た目もカラフルにしようと いろんな着色料を入れてみたんだ♪」

4 4 1 6 「つまり…このクソミドリは ピーマンではないと…?」

ナナ「んー 適当に混ぜてみたから 私もわかんない」

4 4 1 6 「……………」

ナナ「さささ 一口パクツと♪」

4 4 1 6 「…… 実 食 ツ !!」パクツ

サクサク…

4 4 1 6 「これカボチャだわ」

ナナ「カボチャ?カボチャなんて使つたっけ?」

4 4 1 6 「え?」

ナナ「…てことがあつたよ」

カノン「それ 大丈夫なのですか…?」

ナナ「うん

その後ミツシヨンに言つたけど 何もなかったよ」

シエル(あの時 最終リーグ状態になつていたのは そのクッキーが原因でしたか…)

カノン「しかし どうして私やナナさんは良くて シエルさんはダメだったのでしょうか」

一方 男性陣は…

「4416の部屋」

コウタ「りんご」

ハルオミ「ご……ご……ゴツサム」

ギル「ゴツサム……？」

ハルオミ「ワインの一種だよ」

ギル「む……む……虫……」

リンドウ「衝撃波！」

4416「ハットリくん

……現象」

コウタ「おい 勝手に言葉作るなよ！」

4416「造語じゃねーよ！」

ちゃんとあるんだぞ！ハットリくん現象！」

コウタ「ふうん？どんな現象なんだ？」

4416「ふうん→ふうん→ぶふうん→ふうん→ てのがハットリ

くん現象だ！」

コウタ「わかんねえよ！」

ギル「しかし 暇だからって なんでしりとりなんだ……？」

場面は戻り ラウンジへ

シエル「私のケーキを食べなかったのは なぜなのでしょう……」

カノン「あの 一緒に作りましょう！」

三人で作れば 教官先生も食べてくれるはずです！」

ナナ「おー！それ 面白そうだね♪」

シエル「カノンさん……！」

ありがとうございます……！」

ナナ「さっそく作ろーよ！」

カノン「はい では……」

ムツミ「道具ならかしてあげるよ〜」  
ナナ「ムツミちゃん ありがとうね〜♪」  
カノン「では 材料を持ってきますので ナナさんとシエルさんは  
用意を…」

シエル「はい 分かりました」

ナナ「はーい♪」

男性陣の様子は…

「4416の部屋」

コウタ「ほいつ」ハート3

ハルオミ「ほれっ 縛りだ」ハート4

ギル「……………」ハート6

リンドウ「8切りだ！」ハート8

4416「(。D。)」

リンドウ「7渡しだ！受け取れ！」スペ・ハート・ダイヤ7

4416「(。D。)」↑ダイヤ3 スペ・クロ4

大富豪を楽しんでいた…

数時間後……

カノン「できましたね…！」

ナナ「美味しそう！」

シエル「また…チーズケーキですけどね…」

カノン「早速持っていきましょう」

シエル「はい…！」

「4416の部屋」

コウタ「それっ」赤5

ハルオミ「こんなのはどうだい？」赤スキップ  
ギル「ハルさん……」

リンドウ「ほらよつと」赤9

4416「つしやあ！ラスト一枚だア！」緑・青9

コウタ「はいUNO言つてなくいい!!」

4416「ぬわーっ!!しまったー!!」

ナナ「楽しそうだね〜」

カノン「入り込む余地が……」

シエル「ありませんね……」

4416「ん？どしたの？UNOやりたいのか？」

カノン「あ いえ！そういうつもりでは……」

シエル「あの 今度はしっかり作つてきました……！

どうぞ……!」

4416「おお！うまそだね！

んで コレは何？」

シエル「あ はい チーズケーキです……」

4416「……アー」

シエル「……？」

4416「チーズなあ……大の苦手なんだがなあ……」

シエル「!？」

4416「まあ 皆食つてくれるっしよ

ありがとな！」

シエル「……チーズが ダメだったのですね……」

カノン「なんだか 意外ですな……」

ナナ「私もUNOやる〜!」

4416「ハルさん 1人追加ツス

あと コレ シエルが作つたらしいぞ」

コウタ「おお！」

ハルオミ「酒の肴に良さそうだな」

リンドウ「同感だ」

ギル「飲み過ぎないで下さいよ…」

ナナ「ねえねえ 私も食べていい?」

4416「自分の食っていいよ」

ナナ「やったー♪」

—ΩND—

## 金よりエリナ

4416の日常は 大きく分けて2パターンある

その1

「極密度複合コアの素材が…」

「よし 狩りに行こう」

「タアアアカアシイクウウん!!」

『え ちよ やめ』

「スサノオ中二病オオオ!!」

『ぐっ…ぐあアアア!!』

「ヴァーナスVVA?なにそれ おいしいの?」

『ひどい… いくらコストが低くなったからって…』

その2

「金がねえ…」

「よし 狩りに行こう」

「オラ!アラガミ糸よこせ!」

『アベシ!』

「中二病オオオ!!」

『くっ…!またか…!ぐおオオオ!!』

「ダボロ・ダボロ黄金金 魚?いや 走り回るの面倒だし」

『い 今なら高純度金が付いてくるよ!』

「よし 殴ろう」

『へぶっ!!』

今日は そのどちらでもなかった

いつものことだが…

「ロビー」

ギル「まったく…隊長のヤツ どこに居るんだ…」



フラン「ブラッドの隊長をお探しですか？」

ギル「ああ そうだ」

フラン「隊長なら つい先程 エリナさんと一緒に外出しに行きましたよ」

ギル「外出？こんな時にのんきにデートかよ…」

フラン「ええ… 羨ましい限りですね」

ギル「…アンタ 意外とそんなこと考えるんだな…」

フラン「これでも 乙女ですので

ちなみに さっきの発言は失礼ですよ？」

ギル「ああ…そのことは謝る…」

フラン「隊長に用事があるのでしたら あなたの分の外出届も出しておきますよ？」

ギル「いや 急ぎの用じやないんでな

帰ってくるまで待っているさ」

「外部居住区」

エリナ「ねえ先輩 ホントに良いの？」

4 4 1 6 「ああ もちろんだ！」

エリナの欲しい物は何でも買ってやるさ！

懐の余裕もあるしな！」

エリナ「さっすが先輩♪」

4 4 1 6 (ああ〜いいねえ〜この笑顔…！)

この至福… まるでデートのようだ！)

――

エリナ「先輩！ここが前言った 可愛い雑貨屋さん！」

4 4 1 6 「ほお〜ここが例の…」

エリナ「早く行こ♪」グイッ

4 4 1 6 「ぬわっ!!そんな急がなくても…」

店主「いらっしやい」

エリナ「あー！これカワイイ！

これもカワイイ！」

4 4 1 6 (エリナが一番可愛いよ…と言うのは止めとこ)

エリナ「ねえ先輩！どっちがいいと思う？」

4 4 1 6 「はっはっは 迷うこたあねえんだぞ

両方買ってやるさ！」

エリナ「いいの!? やったー！」

4 4 1 6 (くううく たまらん！

この笑顔のためなら この程度の出費なんざ…)

店主「お嬢ちゃん カワイイね

いくつなんだい？」

4 4 1 6 「！」

グイッ

4 4 1 6 「なあにオレのエリナに手エ出そうとしてんだコラ」

店主「え いやあ… そんなつもりじゃ…」

エリナ「先輩 どうしたの？」

4 4 1 6 「いや 気にしないでいいぞ！」

店主と話してる間 好きな物選んどいていいぞ！」

エリナ「はあい♪」

4 4 1 6 「……………」

店主「あ あの… 離して…くれませんか…」

4 4 1 6 「…フン」バツ

店主「げほっ…えほっ…」

4 4 1 6 「今度ゲスな目で見てみる

骨のカケラも残らねエと思え… いいな？」

店主「は はい…」

ー

店主「ま 毎度…ありがとう…ゴザイマス…」

4 4 1 6 「はっはっは なぜかやすかったなー」

エリナ「なんで棒読みなの？」

4 4 1 6 「気のせい 気のせい」

エリナ「そう…?」

それはそれで ホントにいいの? 荷物まで持って貰って…」  
4 4 1 6 「いってことよ!

他にも欲しい物があるなら ドンドン買ってやるぞ!」

エリナ「ふふつ ありがと♪」

4 4 1 6 (イヤツフウウウ!!  
最っ高だねエエ!!)

ー

エリナ「うーん…」

どつちが似合うかなあ…」

4 4 1 6 「ナニコノヨロイカツケエ

タイヨウマジカツケエ」

エリナ「先輩!どつちが似合うと思う?」

4 4 1 6 「試着してみたら?」

エリナ「そうしよっかな」

エリナ「どう…かな…」

ちよつと子どもっぽいかな…?」

4 4 1 6 (…一見 普通の服装に見えるが 言い換えるならば エ  
リナと服装との間に違和感が無いということ…!)

黄緑色のノースリーブの下に 水色を基調とした長袖シャツ  
…

そして デニムのショートパンツと白のニーソックス…

この組み合わせから生まれる絶対領域が眩しい…!

しかし 今一つ足りない気がする… 何が足りない…?)

考察開始から終了まで わずか1秒

4 4 1 6 「……………」

エリナ「先輩…?」

4 4 1 6 「…袖を2, 3回捲ってみてくれ」

エリナ「え?こう…?」クルクル

4 4 1 6 「それだ!その状態が一番輝いている!」

エリナ「…変じゃない？」

4 4 1 6 「問題ない！むしろベストだ！」

エリナ「あの もう1つあるんだけど…」

4 4 1 6 「両方買ってやるさ！」

さあ 試着してみてくれ！」

――

店員「ありがとうございます

またのご来店を」

エリナ「ずいぶん高かったけど 大丈夫？」

4 4 1 6 「心配は無用！

まだまだ余裕はある

遠慮することはないんだぞ」

エリナ「先輩…ムリしないでね？」

4 4 1 6 「大丈夫 大丈夫」

4 4 1 6 (予算の1／3使っちゃってるけど どうでもいいや

エリナの笑顔は 自分が守る…！)

―数時間後―

エリナ「もうこんな時間

そろそろ帰らないと」

4 4 1 6 「よし 帰るか」

エリナ「ゴメンね 先輩

買い物に付き合っただけで…」

4 4 1 6 「いやいや 自分から誘ったんだ

エリナが謝ることはないさ」

エリナ「……………」

4 4 1 6 「どした？」

エリナ「手 つないでいい？」

4 4 1 6 「え いや 自分 両手ふさがってるんだけど…」

エリナ「だったら 私も持つからさ」

4 4 1 6 「いやいや 女の子にそんなことさせるワケには…」

エリナ「もう！先輩は頑張りすぎなの！たまには私に頼ってよ！

それに…！手…つなぎたいし…」

4 4 1 6 「…そうか ゴメンな

ほれ これ 持ってくれ」

エリナ「うん…

先輩…」スツ

4 4 1 6 「……………」ギユツ

エリナ「えへへ…先輩の手 あったかい…♪」

4 4 1 6 (今 手エつないでるよな!?)

しっかり握ってるよな!?

これぞまさに 青天の霹靂…

いや…千載一遇の機会…!

乙女座の自分は センチメンタリズムな運命を感じ (r y

「エリナの部屋」

4 4 1 6 「こちら辺に置いていいか？」

エリナ「うん そのあたりで

先輩 今日はありがと♪」

4 4 1 6 「いやあ 礼を言うなら自分の方だよ

充実した一日が送れたからな」

エリナ「…先輩」

4 4 1 6 「ん？」

エリナ「…やっぱ何でもない！

また 明日ね♪」

4 4 1 6 「おー じゃあな」

「ラウンジ」

4 4 1 6 「…残り三桁か

明日 コクレンメイデン墮天 燃や しでも狩りに行く…

ギル「やつと帰ってきたか…」

4 4 1 6 「ん ギル?どしたの?」

ギル「どうしたもこうしたも 貸した物を返してもらいにきただけだ」

4 4 1 6 「ん?なんか借りたつけ?」

ギル「借りたる 二日前に

A チケットプラチナ3枚」

4 4 1 6 「……あ!」

ギル「さあ 返せ

先に言つとくが お前から二日後に返すと言ったんだからな」

4 4 1 6 「………」

ギル「………」

4 4 1 6 「…ゴールドで勘弁……」

ギル「プラチナを返せ」

―終―

## ニンジャすれいやあ

ラウンジに 1人の人物が入ってきた

その人物は 少なくともアナグラにいる者は見たことがない人だった

黒い衣装を纏い 顔を覆っているため かろうじて見える素肌といえば 目と手ぐらい

彼は 俗に云う「忍者」であった

瞬く間に 忍者がいるという情報がアナグラ内に伝わった

そして ラウンジに駆けつけたのは

外国人勢だった：

4 4 1 6 (まさか忍者の正体が自分だとは思わないだろうなあ

んで 自分の読み通り 外人勢が食らいついてきたな)

エミール「ほう…これがニンジャ…！」

やはり 極東にはニンジャがいるのだ…！」

4 4 1 6 (「ニンジャ」じゃなくて「忍者」な)

シエル「腕輪がある ということは…神機使いですね」

4 4 1 6 (ブラッドだとバレないように 赤く塗ってきて正解だったな)

エリナ「この人 ホントにニンジャなの？」

コスプレとかじゃないの？」

ギル「そーいや 隊長がコスプレ好きだったな…」

4 4 1 6 (この二人 スピアの如くなかなか鋭い…！

さすがスピアの使い手…！)

エミール「何を言うか！

目の前にいるのは まさしくニンジャだ…！」

4 4 1 6 (だから「ニンジャ」じゃない

「忍者」だ)

アリサ「あの…ニンジャって どういったモノなんですか？」

4416 (端的に言うよ スパイだね)

エミール「僕が説明しよう

ニンジャとは 闇に生きる者…

超人的な身体能力に 忍術を使いこなすという…」

4416 (いや それ アニメとかの設定じゃね?)

ナ○トとか ハツ○りくんとかの)

エミール「強靱に鍛え上げられた肉体は 空高く跳躍することも  
水面を走ることにも可能にする

まさに 超人そのものだ」

4416 (道具を使えば 可能といえば可能なんだけどな)

エミール「さらに 壁や天井を歩いたり 自らの姿を消すこともで  
きるうえ 自在に炎を操ることができる「火遁」も使いこなすのだ!」

4416 (なんか…誇張してね?)

エミール「また ニンジャは道具も使いこなす

クナイ スリケン マキビシ…

…この他にもたくさんある!」

4416 (スリケンって言ったぞ スリケンて

あと さっきの三つしか知らねーのかよ)

エミール「これで分かっただろう?

ニンジャとは どういう者か…」

4416 (「ニンジャ」と「忍者」は別物だぞ)

リンドウ「どうした?皆集まって

なんか面白いモンでも…:」

4416 (:ん?)

リンドウ「アイエエエ!?ニンジャ!?ニンジャナンデ!」

4416 (リ リンドウさん!?)

あんた 名前からして極東出身じゃあ…)

リンドウ「ニンジャってホントにいるんだなあ

初めて見たぜ」

4416 (まあ 見ることは殆ど無いでしょうね…)

リンドウ「ニンジャってアレだろ



妖精さんみたいに 魔法を使うんだろ？」

4416 (なにサラツと中の人ネタ言ってるの!?)

エミール「魔法ではない

忍術だ」

リンドウ「まあ そんな細かいこと気にすんなって」

4416 (細かい...?)

エミール「リンドウ殿にとっては細かいことかもしれない...

しかし! ニンジャにとって 魔法と忍術は 似て非なる

ものだ!」

4416 (魔法つつつても いろいろあるけどな

呪術だとか奇跡だとか闇術だとか...)

その後十分ほど エミールのニンジャに関する講習が続いた:

エミール「...と ニンジャに関する僕の知識は これが全てだ」

4416 (殆ど脱線してたけどな

なんで イチカさんニンジャ説が浮上したかも気になるし

あの人 ニンジャっていうより バーサーカーじゃん...)

エリナ「あのさ もし エミールの話がホントなら この人はなん  
でここにいるの?」

4416 (闇に潜んでとか言ってたな 確か)

エミール「そ...それはだな...

...こ このアナグラに 何か重大な何かが迫っているこ  
とを伝えに来たのだ!」

4416 (そ...ッ そうきたかア...ッ)

エミール「1人では到底立ち向かうことすら困難なため 我々に協  
力を求めてきたのだ!」

リンドウ「そうなのか!? だったら力を貸してやろうじゃねえか!」

アリサ「リンドウさんがそういうなら 仕方ありませんね」

ギル「ニンジャの戦闘ってのに 少し興味はあるが...」

シエル「現代の戦闘術とどう違うのか 気になりますね」

4 4 1 6 (え? な なに? この団結力!?)

皆の絆の強さが裏目に出るとは…)

エミール「さあ! 共に力を合わせて 迫り来る脅威を討ち倒そうではないか!」

エリナ「なんでエミールが仕切ってるのよ!」

4 4 1 6 (: 誰か助けて)

## 賭博捕喰録ページ

クレイドルの男性陣+αが ラウンジのテーブルに集まっている  
これが女性陣なら 甘いガールズトークをしてもおかしくな  
いが 男性陣となると なんと暑苦しいこと

4 4 1 6 「ぬっころされてエカ」

「ラウンジ」

4 4 1 6 「ここに 3つのサイコロと どんぶりがあります

このどんぶりに サイコロを落とします

たったこれだけ」

コウタ「それだけ？」

4 4 1 6 「んだ

んで 出た目の組み合わせによって 勝敗が決まるって寸法  
だ

例えば…」

カランカラン

4 4 1 6 「目が3, 3, 5のように 2つの数字が揃った場合は

仲間外れの5が出目になる

んで もし 3, 3, 3と ゾロ目になった場合は 三倍勝ち

となる

今回使う役と配当は これを参考にしてくれ」

ゾロ目 (ピンゾロ) ↓五倍勝ち

ゾロ目 (1以外) ↓三倍勝ち (優劣は6<2)

シゴロ (4, 5, 6) ↓二倍勝ち

3, 3, 4 6, 6, 2等↓等倍勝ち (優劣は6<1)

目無し↓等倍負け

ヒフミ (1, 2, 3) ↓二倍負け

シヨンベン (サイが井から落ちる) ↓強制負け

4 4 1 6 「んで ルールは」

親の回数は一回

シヨンベン、ヒフミの役が出ない限り 三回まで振り直せる  
ただし 最後に振った役で勝負する

親の目がシヨンベン以外の時は 子も振る

親 二倍勝ち×子 二倍負け等の場合は 乗算する

賭け金の最低額は1000fc 最高額の上限なし

4416 「と 少し特殊だけど これで」

(実は全部把握していないなんて 言えない…)

リンドウ 「質問 いいか？」

4416 「どぞ」

リンドウ 「ビールの配給チケットは賭け金代わりに」

4416 「なりません」

リンドウ 「そんな固いこと言うなって

ほら ソーマからもビシツと言ってやってくれ！」

ソーマ 「……………」

4416 「とにかく 賭け金はfcだけツスから

…で 他に質問は？」

イチカ 「公の場で賭博など しても良いのか？」

4416 「まあ 遊びの一環ってことで」

チンチロリン 開始

親 4416

4416 「賭け額を決めてくれ」

※以降 fcは省略して表示します

コウタ 2000

リンドウ 5000

ソーマ 1000

イチカ 1500

4416 「よーし 振るぞ」

2, 4, 5 役なし

4 4 1 6 「ぐぬぬ もう一回」

2, 2, 6 出目 6

4 4 1 6 「まあ これでいいや

次 コウタから順番に」

コウタ「いいの出てくれよ」

1, 2, 6 役なし

コウタ「もういつちよ！」

4, 4, 2 出目 2

コウタ「うう…まだだ！」

3, 3, 5 出目 5

コウタ「くそーっ！」—2000

リンドウ「惜しかったなあ

よおし やってやるぞ」

1, 2, 3 ヒフミ

リンドウ「だああ！やっちゃまったあ！」—10000

ソーマ「……………」

2, 2, 3 出目 3

ソーマ「俺はもういい」—1000

イチカ「手加減無しで挑ませてもらう」

1, 4, 5 役なし

イチカ「……………」

1, 1, 5 出目 5

イチカ「最後に掛ける！」

4, 4, 1 出目 1

イチカ「この程度では…」—1500

4 4 1 6 「Yeah! 1人勝ちだ！」+14500

親 コウタ

4 4 1 6 3000

リンドウ 2000

ソーマ 1000

イチカ 2500

コウタ「まず 俺からか」

1, 4, 5 役なし

コウタ「いいの出てくれ！」

3, 5, 6 役なし

コウタ「頼む！」

4, 4, 6 出目 6

コウタ「お！キタか!？」

4 4 1 6 「まだわからんさ」

3, 3, 3 ゾロ目

4 4 1 6 「あらあ？悪いねえ

また勝っちゃったわねえ」 +9000

コウタ「くっ…ムカつく…」

リンドウ「負け分を取り返すぞ！」

6, 6, 2 出目 2

リンドウ「もう一回！」

2, 2, 3 出目 3

リンドウ「うおおお！」

3, 3, 4 出目 4

リンドウ「チクショウ…」 | 2000

ソーマ「仕事をサボったツケがきたと思え」

2, 2, 4 出目 4

ソーマ「もういい…」 | 1000

イチカ「ソーマ殿 楽しめとは言わないが せめて最後までやり遂  
げてほしい」

1, 1, 4 出目 4

イチカ「ブラッドの隊長殿がこうして 交流を兼ねた娯楽を提案し  
てくれた手前」

2, 3, 6 役なし

イチカ「無下にするのも失礼というもの」

3, 3, 4 出目 4

イチカ「快く受け入れることこそが 友好をより深めることだろう」—2500

コウタ(カツコいいこと言ってるけど 負けてるんだよな…)—3500

親 リンドウ

4 4 1 6 6 0 0 0

コウタ 1 0 0 0

ソーマ 2 0 0 0

イチカ 4 0 0 0

リンドウ「よおし オジサン 本気出しちゃうぞ」

3, 3, 2 出目 2

リンドウ「まだ本気は出してないから」

3, 3, 1 出目 1

リンドウ「次 本気出すからな！」

2, 4, 6 役なし

リンドウ「……………」

4 4 1 6 (…気まずい)

1, 4, 6 役なし

4 4 1 6 (ここで止めるのも不自然だし…)

4, 4, 6 出目 6

4 4 1 6 (…皆に任せよう) +6000

コウタ(おいおい この空気どうするんだよ…)

5, 5, 1 出目 1

コウタ(どうしようか… もう一回やってみるか…)

2, 3, 5 役なし

コウタ(三回目…)

2, 5, 6 役なし

コウタ(良かった…のか…?) ±0

ソーマ「……………」

4, 4, 1 出目 1

ソーマ「……………」

2, 4, 5 役なし

ソーマ「……………」

1, 2, 5 役なし

ソーマ「……………」±0

イチカ「初めにも言ったが 相手が誰であろうとも 容赦はしない」

1, 3, 6 役なし

イチカ「例え 窮地に追いやられていてもだ」

1, 1, 6 出目 6

イチカ「生憎 茶番は苦手だ」+4000

リンドウ「……………」—10000

親 ソーマ

4 4 1 6 5 0 0 0

コウタ 3 0 0 0

リンドウ 1 0 0 0

イチカ 5 0 0 0

ソーマ「手加減する理由はない…」

4, 4, 4 ゴロ目

4 4 1 6 「こりや勝てねえ」

1, 5, 6 役なし

4 4 1 6 「だが 自分は諦めん！」

1, 3, 4 役なし

4 4 1 6 「諦めない限り 負けることは無い！」

2, 2, 1 出目 1

4 4 1 6 「…って誰かが言ってた……………」—15000



コウタ「やべえよ これ…」

5, 5, 1 出目 1

コウタ「勝てるのかよ…」

2, 3, 6 役なし

コウタ「二倍負けだけは…!」

6, 6, 5 出目 5

コウタ「…う」—9000

リンドウ「ここからが本番だああああ!」

5, 5, 5 ゾロ目

リンドウ「キタああああ!!」+3000

イチカ「強大な敵を目の前にして 背を向ける訳にはいかない」

1, 1, 5 出目 5

イチカ「例え 理不尽であろうとも…!」

2, 4, 5 役なし

イチカ「負けを認めない限り 敗北は来ない…」

1, 3, 4 役なし

イチカ「勝利へと近づいたための糧として…!」—15000

ソーマ「負けは負けだ…」+36000

親 イチカ

4 4 1 6 2 0 0 0 0

コウタ 2 0 0 0

リンドウ 3 0 0 0

ソーマ 2 0 0 0

4 4 1 6 「ドーンと張ったった

これで勝ったら…ウへへへ」

イチカ「それはこちらの台詞でもある」

1, 1, 1 ピンゾロ

4 4 1 6 「!?

いや まだ負けが確定したワケじゃない…!

1 / 2 1 6 の確率で引き分けになる…！」

1, 2, 3 ヒフミ

4 4 1 6 「 | 2 0 0 0 0 0

コウタ「お おう…お気の毒に…」

2, 3, 4 役なし

コウタ「どうせ負けるなら 最後まで振るか…」

1, 3, 6 役なし

コウタ「これで終わり…か」

1, 3, 5 役なし

コウタ「なかなか痛いな…」 | 1 0 0 0 0 0

リンドウ「ピンゾロがなんだってんだあ！

俺だってピンゾロ出してやる！」

シヨンベン

リンドウ「 | 1 5 0 0 0 0

ソーマ「流石に勝てないが…最後までやってやる」

4, 4, 3 出目 3

1, 1, 2 出目 2

2, 2, 3 出目 3

ソーマ「… | 1 0 0 0 0 0

イチカ「ここまでとはな…」 + 2 3 5 0 0 0

チンチロリン 終了

累計

4 4 1 6 | 1 8 5 5 0 0

コウタ | 2 4 5 0 0

リンドウ | 3 4 0 0 0

ソーマ + 2 4 0 0 0

イチカ + 2 2 0 0 0 0

4 4 1 6 「

リンドウ「」

コウタ「あの二人が心配だ…」

ソーマ「放っておけ」

明日にでも忘れるだろ…」

コウタ「だといいいんだけどな…」

イチカ「少々やりすぎてしまったか…？」

「終」

## ピンクの悪魔と紅白の人間

「エイジス」

カノン「このままだとアナタ 穴だらけになっちゃうよオ!!」

4 4 1 6 「自分まで穴だらけになってしま ぬわーっ!!」

ウロヴオロス<ナニコノコ コワイ

イチカ「真ツツ二つにしてやらア!!」

4 4 1 6 「あ あり!?!いつの間にバーストレベル3に!?!」

※ジュリウスのリンクサポートデバイスの効果

カノン「くらえ!!」

4 4 1 6 「ぬわーっ!!」

「ラウンジ」

4 4 1 6 「モウマヂムリイ…ダクソシテネヨ…」

ギル「だったら 自室に戻ればいいだろう…」

4 4 1 6 「ふて寝はあまりしたくないな」

生活リズム崩れるし〜」

ギル「…意外と几帳面なんだな」

4 4 1 6 「いんや 一種のこだわりだ

一度決めたら 飽きるまで貫き通す…

スピア使いならではの生き方だ」

ギル「……………」

4 4 1 6 「いや しかし このカウンター席はいいな」

椅子の高さとテーブルの高さとのバランスがなんとも絶妙…

疲れた時に体を預けるように倒すと 一風変わった解放感が

クセになる…」

ギル「あなたは評論家か何かか…」

4 4 1 6 「ここまでクセになるのは そうそう無いぞ〜

さすが アットホームな雰囲気なだけあって 凄くくつろぎやすい…

二〇リもビックリな居心地の良さだ」

ギル「ここで寝るなよ…」

4416「ん 大丈夫だ

この後 用事あるし

まあ 用事つつつても 大したモンじゃないけど」

ギル「そうか…」

―五分後―

「神機保管庫」

4416「リツカちゃんリツカちゃん

聞きたいがあるんだけど」

リツカ「ん？なに？」

4416「神機との適合率が高いとき 第二の人格がうまれるこ

とってあり得る？」

リツカ「…え？」

4416「いや ほらさ カノンって戦闘中にだけ 態度や言動が

豹変するじゃん？

それって 神機と何か関係あるかなあつて思ったんだけど

それにしては皆は普通だなあとと思ったんよ」

リツカ「……………」

4416「…ん？どしたの？」

リツカ「…あ ゴメン

いいよ 続けて」

4416「…んで 豹変するつつつたら イチカさんも当てはまる

し 少し調べてみたら あの二人 神機との適合率がかなり高いと

いう

こりや 自分の内にある フなんとかム脳が感化されてだ

神機の適合率が高いと もう一つの人格が形成される可能性がある という結論に至ったワケよ」

リツカ「……………」

4416 「まあ さすがに発想がブツ飛びすぎて…」

リツカ「いや 一応その考えは 本当にあるんだよ」

4416 「へ？」

リツカ「カノンさんや イチカさんだけでなく 他にも似たような事例はあるんだ

でも それを立証するとなると 不可能に近いんだよね

機械工学や生物学ならともかく 人間の精神となると 話

は別だから

それに 大した影響もないから その問題は片隅に置かれてるんだ」

4416 (カノンの誤射で ミッションに支障が出まくってるんですがそれは)

リツカ「君も言ってたけど 戦闘中にのみ性格が変わるのは 体内の偏食因子が活性化して変わる というのが 今のところ有力かな」

4416 「なるほどね…」

リツカ「…今更だけど 珍しいね」

4416 「ん？なにが？」

リツカ「君がこんなにも難しいことを考えてることが ね」

4416 「…自分はアホとして見られていたのか……………」

リツカ「ゴメンゴメン そういう意味で言ったんじゃなくて

んー なんとというか… 博識だなーって」

4416 「いやいやそこまで凄くないよ」(ニヘラニヘラ

リツカ (意外と分かりやすいね…)

4416 「…あれ？ということは…」

リツカ「どうしたの？」

4416 「……………ああ

カノンの誤射はどうしようもないのか…」

リツカ「…ふふっ

頑張ってね♪ 教官先生”

—終—

募る おもい

「ラウンジ」

エリナ「……はあ」

ラウンジの目立たない所で ため息をつくエリナ

エリナ「……どうしようかな」

4 4 1 6 「よーっす エリナ」

エリナ「せ 先輩!？」

4 4 1 6 「どした? そんな隅っこの方にいて

何か面白いモンでもあるのか?」

エリナ「え……えつと……」

な 何でもないから!

そう言うと 逃げるようにラウンジから出ていった

4 4 1 6 「……なんか 悪いことしちまったかな……?」

ハルオミ「おいおい 今のは0点だな」

4 4 1 6 「ハルさん? 0点で どういう……」

……てか 見てたんスか?」

ハルオミ「おうよ しかと見させてもらったぜ

あの年齢ぐらいには 多感な時期 つまり 思春期が来

るからな

エリナちゃんみたいな子だと 尚更分かりやすい」

4 4 1 6 「思春期……ですか……」

ハルオミ「まあ 個人差はあるだろうけど 大抵はあんな風に 好きな人に対してつつけんどんにしたり 人には話せない悩みを抱えていたりする」

4 4 1 6 「なるほ……ど……?!？」

この時 4 4 1 6 に電流が走る

4 4 1 6 「つまり……エリナは……自分に……」



ハルオミ「…察しがいいな」

4 4 1 6 「自分にすら話せない悩みを抱えていると!?!」

ハルオミ（おっと そうきたか…）

4 4 1 6 「こうしてはおれん…!」

後輩の悩み 自分が解決することと見たり!

いざ馳せ参ず!」

ハルオミ（口調が変わる程とは よつぽど気合いが入ってるな）

4 4 1 6 「…とは言ったものの どこにいるのやら…:」

「エリナの部屋」

エリナ「…:はあ

私のバカ…:」

コンコンコン

エリナ「!」

4 4 1 6 『エリナー 開けておくれー

開けなくてもいいけどー』

エリナ「…:」

4 4 1 6 『どした?返事してくれー』

エリナ「…:」

4 4 1 6 『応答してくれ!スーク!

ス〇エエエク!!』

エリナ「…うるさいよ 先輩…:」

4 4 1 6 『スママセン』

エリナ「…何の用?」

4 4 1 6 『あー イエテイコンゴウ墮天の素材が欲しいからさ ミッション行く

んだけどさ エリナも行く?』

エリナ「…:」

4 4 1 6 『強要はしないし ムリに付き合う必要もないし…

ただ 人数がいたほうが良いってワケでだ』

エリナ「…行く」

4 4 1 6 『おお そうか

んじや ゲート前で待ってるから

準備は急がなくてもいいぞ』

エリナ「うん……」

↓通常 難易度9 『魔氷騎行』↓

「鉄塔の森」

4 4 1 6 「ちよつと待って ナニコレ

なんか初っ端からリーク状態になってる

しかもヤバフェイタルリークい方」

シエル「今すぐ回復弾を…」

4 4 1 6 「いや いいよ 近接特化の装備だし

このミツシヨンの為に 真竜熱角槍を引っ張り出してきたよ

うなモンだし」

シエル「………」

4 4 1 6 「んじや 行くぞ

シエル エリナ」

シエル「はい」

エリナ「…うん」

コウタ「俺もいるぞ」

コンゴウ墮くイバラキ！イバラキ！

4 4 1 6 「ヤッフウウ！

ヤッフウウ！

ヤヤヤヤッフウウ!!」

コウタ「妙に声が高いような…」

コンゴウ墮くギャウ！

4 4 1 6 「おっおっおっおっお (ゝωゝ)」

コウタ「今度は低く…」

「いったい何なんだ？」

コンゴウ墮くイバラキ！イバラキ！

コンゴウ墮天 標的をエリナに変更して 氷塊を発射した

エリナ「……………」

4416 「エリナあ！避けるお！」

エリナ「…え？」

4416 「トウウ！ぬわーっ!!」

シエル「隊長！大丈夫ですか!？」

4416 「だ 大丈夫だ…」

エリナ「先輩…」

4416 「謝罪は後だ！

目の前の敵に集中するんだ！」

エリナ「…ごめんなさい」

コンゴウ墮くイバラキ！イバラキ！

―三分後

4416 「ちくしよー…目当ての物が採れなかった…

きつと石仮面デミウルゴスの仕業に違いない！

今度という今度は許さないぞ！」

コウタ「キチ○イ」

4416 「」

シエル「エリナさん どうしたのですか？」

エリナ「うん…ちよつと…」

デミウルゴス<WRYYYYY!!

4416 「ぬああああ あ ちよつと待つて

強制解放剤モシヤリ…と

ぬあああああ!!」

コウタ「もうあいつ1人でいいんじゃないか」

シエル「せめて 援護射撃ぐらいは…」

4 4 1 6 「干渉 手助け 一切無用！」

あ 濃縮は渡してくれ」

―三分後

4 4 1 6 「いやはや 死ぬかと思った」

コウタ「いや 一方的にリンチしてたじゃん

全部位も崩壊させてるし…」

4 4 1 6 「真竜熱角槍じゃなければ 即死だった…」

エリナ「……………」

4 4 1 6 「エリナ どしたんだ？

らしくないぞ？」

エリナ「…別に」

4 4 1 6 「なんか悩み事でもあるのか？

自分でよけりや 聞いてあげ

フラン『帰投の準備が完了しました

早急に帰投してください』

4 4 1 6 「あー はいよ」

エリナ「…バカ……………」

4 4 1 6 「ん？」

エリナ「…何でもない 早く帰ろ……………」

4 4 1 6 「んだな」

エリナ（体重が増えたなんて 絶対に言えないよ…

先輩のアホう……………」

あんなにお菓子をくれた先輩が悪いんだから…）」

―終―

## 神をも恐れぬ星の英雄

ここ数日に渡り 未知のアラガミと思われる生命体が 周辺のアラガミを捕喰しているという

ある者の証言は ザイゴートに手足が生えたような姿と

ある者は グボロ・グボロを丸飲みにしたと

ある者は 空を飛んで逃げられたと

いずれにせよ 不確定な情報ばかりで 噂が流布しているだけかもしれない

しかし アラガミの個体数が不自然に減っているのは 紛れもない事実だった

その原因となる未知のアラガミが 本当に存在するのだろうか  
……

### 「サカキ博士の研究室」

ソーマ「…という訳だ

未知のアラガミとなると 調査する必要がある

…協力してくれるか？」

4416 「ええ もちろん 手伝いますよ

…んで どこに出るんすか？」

ソーマ「目撃情報を集めて ヤツの行動範囲・パターンを調べてみたところ 次に出るのは この二ヶ所のどちらかになる…」

4416 「廃寺と空母…すか」

ソーマ「ヤツは常に独りで行動している…

また 情報が正しければ キュウビと同じ 動物的行動を取る

恐らくヤツも レトロオラクル細胞で構成された 外界のアラガミだ…」

4416 「強いんすかね」

ソーマ「グボロ・グボロを丸飲みにするくらいだ

かなり巨大なアラガミだろう…」

4416「んー？自分が聞いた噂じゃあ かなり小さいと聞いたん  
スけど？」

ソーマ「：状況に応じて伸縮する可能性がある

今までの常識は通用しないことも有り得る…」

4416「んー そういうモンなんスカね

んで ニヶ所ということは どうするんスカ？

ソーマ「廃寺の方は 俺とお前とアリサ

空母は リンドウとイチカで それぞれ見張る

周辺のアラガミを掃討した後 ポイントにアラガミの死骸  
を置いて待ち伏せする策だ」

4416「：そんなのが通用するんスカ？」

ソーマ「他の策が無い以上 これに賭けるしかない…」

4416「：やるしかないスカ」

(装備はどうしようかな…)

「鎮魂の廃寺」

シユウくヤメテクダサイ シンデシマイマス

4416「ヘッドお！」

シユウくビューティフオウ…

4416「シユウ神属には スナイパーが有効さね

あ セクメトは帰ってください」

アリサ「ある程度は片付けましたね」

ソーマ「頃合だな…シユウを置いて隠れるぞ」

リンドウ『あー こちらリンドウ

今から作戦を開始する

…これでいいのか？』

ソーマ「ああ こっちも始める…」

―五分後

4 4 1 6 「パンうめえ」

アリサ「ちよつと 集中してくださいよ」

4 4 1 6 「パンうめえ」

ソーマ「静かにしろ…」

アリサ「ご ごめんなさい…」

4 4 1 6 「パンうめ…え…!?!」

アリサ「どうしました?」

4 4 1 6 「なんだ?あのピンクボール…」

転がって いや…歩いて…こつちに向かつてる…!?!」

ソーマ「アイツが未知のアラガミか…?」

とてもそうには見えんが…」

アリサ「でも 小さくて ちよつと可愛いですね…」

ソーマ「どつちにしろ 気を抜くな…」

シユウを捕喰したところを叩く…いいな?」

リンドウ『あー こちらリンドウ

異常なーし

そつちはなんかあったか?』

ソーマ「ああ ちよつど見つけたところだ…」

リンドウ『マジか!?!

どこだ!?!どこにいるんだ!?!』

ソーマ「D地点だ…」

まだヤツとは接触していない…

慎重に行く」

リンドウ『りよーかい

じゃ そつちに向かうから 踏ん張れよ』

ソーマ「……………」

アリサ「なかなか捕喰しませんね…」

4 4 1 6 「パンうめえ」

??? 「……………」プイ

ソーマ「…シユウに興味を示さない…か

なら ヤツが後ろを向いた瞬間に…っ!？」

アリサ「こ こっちに向かつてる!？」

4 4 1 6 「パンうめえ」

ソーマ「マズい…!」

4 4 1 6 「何を言うか!このパンはうめえぞ!

???' 「…ポヨ?」

ソーマ(バレてしまった…か…!)

アリサ(か…可愛い…!)

4 4 1 6 「パンうめえ」

???' 「ポヨ…イ!」スウウウウウ

ソーマ「な…!？」

アリサ「風!？」

4 4 1 6 「あーっ!!パンがあ!!」

パクンツ

???' 「ポヨ ポヨ…イ!」ピョンピョン

4 4 1 6 「マンマミーア…」

???' 「ポヨ?」

アリサ「可愛い…!」

ソーマ「…コイツが本当に 未知のアラガミなのか…?」

アリサ「この子 名前はなんでしょうか」

カービィ「ポヨ

カービィ「カービィ!」

アリサ「カービィ…可愛い名前ですね♪」

カービィ「ポヨ…イ」

ソーマ「…」

リンドウ「おーい どうした?」

イチカ「例のアラガミはどこに?」

アリサ「この子ですよ

カービィ「この子です♪」

カービィ「ポヨ…イ!カービィ!」



リンドウ「あれま 随分とちっこいアラガミだなあ」  
イチカ「…ブラッドの隊長殿はどうされた？

落ち込んでいるようだが…」

ソーマ「ソイツにパンを食われたからだ…」

4416「ああ…でも 仕方ない…」

イチカ「……………」

ソーマ「……………」

4416「乾パン開けるしかねーや」

カービィ「ポヨ！」

4416「ダメだ！この乾パンは自分のだぞ！

お前はパン食ったろ！」

アリサ「いいじゃないですか 乾パンの1つくらい

あげればいいでしょう」

4416「そうやって甘やかすから どんどんつけあがるんだ

ちよつと厳しい方がしつかり育て

スウウウウウ

4416「あゝあゝあゝあゝあゝつ!!乾パゝあゝあゝあゝあゝ

ン!!」

パクンッ

4416「」

リンドウ「こりやちよつとかわいそうだな(笑)」

ソーマ「危機意識を持っていないからこうなる…」

イチカ「しかし 乾パンを丸飲みとは…」

アリサ「この子 連れて帰りましょうよ」

ソーマ「本気で言ってるのか？」

アリサ「こうやって接するあたり 私達に害はなさそうですし」

リンドウ「まあ いいんじゃないか？」

イチカ(いつぞやのシオ殿と似た光景であるな…)

4416「」

ソーマ「…まあ いい

とにかく コイツを詳しく調べるがあることには変わりな



# 神をも恐れぬ星の英雄 弐

前回の

あらすじ三行

アラガミ 激減

原因 調査

まさかの カービィ

以上

4 4 1 6 「粗すぎだろ…」

「ラウンジ」

カービィ「ポヨォーイ！」プニプニ

ナナ「プニプニしてて ふしぎな感じだねー」

シエル「ええ 確かに不思議な手触りです…」

柔らかくも 芯のあるような…」

エリナ「こんなになっちやいのに アラガミを食べるの？

ちよつと信じられないなあ」

主に 女性陣に人気であったカービィ

4 4 1 6 「…妬ましい妬ましい妬ましい…」パールパールパール

…

ギル「どうした 隊長…」

ドス黒いオーラが溢れ出てるぞ」

4 4 1 6 「…人の食料を横取りしたというのに ヤツはなぜ 平然  
といられるんだ…?!」パールパール…

ギル「まだ根に持つてるのか…」

4 4 1 6 「拳げ句 皆にちやほやされて…」

妬まずにはいられない!!」パールパール…

ギル「…」

4 4 1 6 「4 4 1 6 は激怒した」

必ず かの暴飲暴食な玉を取り除かねばならぬと決意した」  
ギル（さすがに付き合っつてられねえ…）

4 4 1 6 「…妬ましい…」 パルパル…

―五分後

4 4 1 6 「…腹減ったなあ…」

…ヤツがちやほやされているスキに…！！」

4 4 1 6 ラウンジから退場

カービィ「ポヨオ…」 グウゝ

ナナ「おなか減ったの？」

シエル「困りましたね…」

何を食べるんでしょうか…？」

エリナ「一緒にいた先輩に聞いてみようよ」

「4 4 1 6 の部屋」

4 4 1 6 「今のうちに食つとかねーと…」

さすがにこれは食われちやいかん…！！」

カザゴソ

4 4 1 6 「とある支部で 期間限定 数量限定 おまけに高額で販売されているレーシヨン『うなぎめし』！」

あの時は 偶然買えたから良かったけど 次はいつ買えるか…」

ガサゴソ

4 4 1 6 「乾パン 食パン カレーパンなんざ それなりに出回っているのに対して うなぎめしは年に数えるほどしかない…！！」

ちよつと調べてみたら うなぎっていう魚は もともと数が多くなかつたらしいし」

ガサゴソ

4 4 1 6 「あつた…!」

パキッ

4 4 1 6 「では いただきます」

コンコンコン

エリナ『せんぱーい』

4 4 1 6 「ん? エリナか? どした?」

エリナ『ちよつと聞きたいことがあつて…』

4 4 1 6 「あーはいはい」

(うなぎめしは 〃ここに置いといて…と)

4 4 1 6 「聞きたいことつて…」

なぜにナナとシエルまでいるし」

ナナ「あのねー カービイのことなんだけど」

4 4 1 6 「な!?!」

ならん! ヤツをここに近付けるでない!

神聖なる食に 踏み入れるべき存在ではない!!」

シエル「ど どうしたのですか?」

なにか 問題でも…?」

4 4 1 6 「ヤツは!?! カービイは!?!」

ここにいるのか!?!」

エリナ「カービイならここに…あれ?

さつきまでここにいたハズ…」

4 4 1 6 「ま まさか…!?!」

カービイ「ポヨーイ!」 パクンッ

4 4 1 6 「」

カービイ「ポヨ ポヨーイ!」

4 4 1 6 「…うゝあゝあゝあゝ…」

エリナ「…先輩? どうしたの?」

4 4 1 6 「おゝおゝおゝおゝ…うゝなゝぎゝめゝしゝいゝ…」

カービイ「ポヨ」 トテテテ

ナナ「あつ! どどこ行くのー? 迷子になるよー」

4 4 1 6 「 $\exists \Delta ? \ominus \Phi \& \Psi \lambda \# \text{Я} \dots$ 」  
シエル「……………」

同日 21:00

「ラウンジ」

4 4 1 6 「こんなの 絶対おかしいツスよおお…」

うなぎめし  
アレを買うために どれだけの大金をはたいたか…」

ハルオミ「それで泣いてるのか…」

まあ 気持ちは分からなくもない」

4 4 1 6 「なんで…なんで自分だけ…こんな目に…」

ハルオミ「お前みたいなヤツでも そうなっちゃうんだな…」

4 4 1 6 「だって 限定品スよ!?!」

次はいつ買えるか分かんないツスよ!?!」

ハルオミ「まあ 一旦落ち着け

ほれ 俺のロマネ・コンティ分けてやるから

しかも 当たり年のだぞ」

4 4 1 6 「いや いいス… 酒の味 分かんないスから…」

ハルオミ「そうか… 高級品なのにな…」

リンドウ「このツマミ うんめーや」

4 4 1 6 「まあ 万人受けする物は 無いかもしれないスね…」

自分にとっては高級品であるうなぎめしは ヤツからしたら

ただの飯に過ぎないのかもしれない…」

ハルオミ「輝く宝石も そこの石ころも 価値を見出さなければ

同じ『石』だからな」

リンドウ「こいつも旨えや」

4 4 1 6 「スミマセン ハルさん…」

自分の愚痴を聞いてくれて…」

ハルオミ「いいってことよ

なにより 俺から誘ったんだし

それに 溜め込んでばっかじゃ体に毒だしな」

リンドウ 「ビールだけじゃ物足りねえなあ」

4 4 1 6 「ありがとうございます」

少し 気が楽になりますた…」

ハルオミ 「なにかあったら また相談に来いよ」

4 4 1 6 「出来れば 相談に来る必要がなけりゃいいんすけどね」

ハルオミ 「…それもそうだな」

リンドウ 「ビールの配給チケット まだあったっけなあ…」

4 4 1 6 「…てかりンドウさん

まだ呑むんすか？」

「終」

## 極東山里戦争

ここ最近 目立った被害状況も無く 暇を持て余している神機使  
い  
いつもは和気あいあいと楽しんでいる筈が 今日には喧騒な雰囲気  
に満ち溢れていた  
事の発端は ある一つの菓子からだった…

ー五分前

「ラウンジ」

4 4 1 6 「あー 小腹すいたー」

コウタ「そーだなー」

4 4 1 6 「自分 ほとんどの食料が あのピンクの悪魔の胃袋に直  
行していったからなー」

コウタ「そーだなー」

4 4 1 6 「唯一残ったのが焼き芋寿司で…

せめて食ってくれよ 後味悪いじゃねえか…」

コウタ「そーだなー」

4 4 1 6 「さつきから返事が適當すぎるだろ」

コウタ「そーだなー」

4 4 1 6 「そういえばさ バガラリーのアナザーストーリー見た  
？」

コウタ「見た見た！やっぱサイコーだよな！

いつも見るバガラリーとは違う観点で見れるしさあ！

なんといつても凄かったのが…」

4 4 1 6 (コイツ…)

ナナ「ねえねえ 何の話してるの？」



4 4 1 6 「聞かない方がいいぞ

ヤツは一度語り出すと ノンストップで一時間は喋り続ける  
からな」

ナナ「？」

4 4 1 6 「ところでナナ

左手のそれは何だ？」

ナナ「ん？コレ？

た○のこの里だよ」

4 4 1 6 「ウーン…タケノコカア…」

ナナ「隊長も食べる？」

4 4 1 6 「き○この山のがいいんだが…

まあ たけのこでもいいや」

コウタ「おい ちよつと待て」

4 4 1 6 「んあ？」

ナナ「ん？」

コウタ「きのこがいい…だと？」

4 4 1 6 「…貴様 もしや…」

たけのこ派か!？」

コウタ「そういうお前はきのこ派…」

ナナ「え？え？」

4 4 1 6 「認めん…断じて認めんぞ！

たけのこなんぞ キのこの二番煎じにすぎぬ！」

コウタ「そうとは限らねえだろ！

たけのこが先にあつたかもしれねえじゃねえか！」

4 4 1 6 「仮にそうだとしても たけのこはきのこに到底及ぶまい

…

幅広い層から支持されているのだからなあ！」

コウタ「たけのこのの方が人気だということを知らんのか？」

4 4 1 6 「あんな数値上のデータを信じられるなあ たけのこの連

中は頭がお花畑だなあ！

いや たけのこ畑かあ？」

コウタ「どつちにしろ　きのこの方が人気だという根拠は無いぞ」  
4416「ぐっ…！」

コウタ「それに　売上はたけのこが勝ってるし」

4416「…それだよ」

コウタ「ん？」

4416「…たけのこの連中は　口を開けば売上売上…！」

そんなに金が大事か!?

たけのこ共は守銭奴の集まりか!?

コウタ「なんだその言い草は！」

負け惜しみなんて見苦しいぞ！」

4416「負け惜しみ…？」

そういうお前らはいつから勝った気でいるんだ？」

コウタ「なに？」

4416「第一たけのこなんて食べたモンじゃねーよ

パッサパサなのか湿気ってるのかわかんねーし　表面の大半

がチョコで　手が汚れるし…」

コウタ「そういうきのこだって　ビスケットの部分が折れてること

があるし　チョコとビスケットに一体感がねえじゃんかよ！」

4416「なにい!？」

コウタ「そもそも先だとか後だとか関係無く　人気なものは人気な

んだよ！」

現実を受け入れろ！」

4416「おいおい　その台詞は二番煎じの常套句だ

それに　人気だからって優位に立つのはおかしいだろう」

コウタ「んだとお！」グッ

4416「なんやワレ！」

やんのかコラ！」グッ

リンドウ「おっす

どうした？ケンカなんかして」

4416「あ　リンドウさん！」

リンドウさんはきのこ派スよね!？」

コウタ「いいや たけのこ派だ!」

リンドウ「いったい 何の話なんだ？」

ま それはおいといて お前ら コレ食うか?」

4416 「いや おいといてって 今重要な…」

そ それは!？」

コウタ「ブラックサンダー!？」

リンドウ「欲しいか?」

二人「いただきます!」

二人の間でのきのこたけのこ戦争は ブラックサンダーによって  
終結した

ちなみにリンドウは すぎのこ村派だとかなんとか…

ナナ「私1人でたけのこの里 食べちゃったけど 良かったのかな  
…?」

「終」

## 副人公

「アナグラ ロビー」

ギル「隊長が首を痛めた？」

シエル「はい…」

音楽に合わせて首を動かしていたら 首を痛めたと…」

ナナ「聴いた感じ メタルっぽい音楽だったよー」

ギル「まったく あのバカは…」

ナナ「無意識ってコワイねー」

ギル「？」

シエル「？」

ナナ「ん？」

ギル「…で 完治までにどれくらい掛かるんだ？」

シエル「隊長は 1日もあれば大丈夫と…」

ギル「それはいくら何でも短くないか？」

偏喰因子の恩恵があるとはいえ…」

シエル「私もそう思ったのですが トマトがあるから問題ないと言っていました」

ギル「トマト？」

ナナ「あの『M』の字があるトマトのことかな？」

シエル「そこまでは聞いていないので 私にも詳しくは…」

ギル「仮に その例のトマトだとしたら なんて隊長が持つてるんだ」

シエル「それは…」

ハルオミ「説明しよう！」

ギル「ハ、ハルさん!？」

ハルオミ「アイツはカービィに ほとんどの食料を食われてしまっ

た

しかしカービイは ブラッドの隊長さんのことを 食べ物してくれる優しい人と思ったのか クレヨンで隊長さんらしき似顔絵を描いた絵と共にトマトを置いて どこかへ行ったそうだ」

ギル「……………」

シエル「……………」

ナナ「？」

ハルオミ「ん？どした？」

ギル「ハルさん…その円い枠は何ですか…？」

ハルオミ「コレか？」

マンガとかでよくあるだろ

補足のためにこうやって解説してくれるアレだよ」

ナナ「でもコレって 小説だよね？」メタア

ハルオミ「それは言わない約束だぜ？」

ギル（いったい 何のことなんだ？）

ハルオミ「まあ 俺もそのトマトについては詳しく知らないからなあ

なんでも HPが全回復する とか言ってたな」

シエル「HP？」

ナナ「HPっていうのは ヒットポイントの略で その人の生命力みたいなものだよ」メタア

ハルオミ「おっと それ以上はいけないぜ」

シエル「……………」

ギル「…しかし本当に1日で復帰できるかは怪しいな」

ナナ「んー そういう時は ギルが隊長の代わりをすればいいんじゃない？」

ギル「冗談はよせ…」

俺は隊長なんてガラじゃない」

ハルオミ「だったら俺がやろう

似ている所は沢山あるだろう？

髪の色といい 目の付け所といい」

ギル「ハルさん…」

同時刻

「ラウンジ」

コウタ「止めとけ

今日だけは絶対止めておけ」

エリナ「どうしてですか!？」

エミール「どうした？」

「いったい何があったのだ？」

コウタ「いやあ 何があったというか…」

エリナが ブラッドの隊長の見舞いに行くって言うてるん

だけど…」

エミール「別に問題は無いのでは？」

コウタ「いや それが…なんというか…」

エリナ「行っても良いでしょう！

なんで止めるんですか!？」

コウタ「…わかった 理由を教えてやる」

エリナ「……………」

コウタ「俺も アイツの見舞いに行こうと思って 病室に行ったん

だけど 居なくてさ

…いや これは関係ないな

……………んで サカキ博士に聞いたら 自室で療養してるって

聞いて アイツの部屋の前まで行ったんだよ」

エリナ「…で 何かあったの？」

コウタ「……………」

エリナ「……………」

エミール「…………？」

コウタ「…部屋の中から よくわからない言葉を連呼してたんだ

……………」

エリナ「…え？」

コウタ「さすがに俺もビツクリしたよ…

…それで ちよつと録音してみたんだけど 再生するのが怖くてな……」

エリナ「……………」

エミール「その例の言葉 もし宜しければ 聴かせてほしい」

コウタ「ほ 本気か!? エミール!?

エリナ「…私も聴いてみたい」

コウタ「…お前らがそう言うのなら……

途中で 止めてとか言うなよ」スツ

エリナ「わかってますよ…」

エミール「……………」

カチツ

『オツオオオツオ オツオオオツオ

オツオオオツオ オツオオオツオ

モウサイケツカンガイツパイツマツテルトコロ ワーキー!!

モウサイケツカンガイツパイツマツテルトコロ ワーキー!!

ノーカン! ノーカン! ノーカン! ノーカン! ハイッ!

ノーカン! ノーカン! ノーカン! ノーカン!

オラ コンナムライヤダア

オラ コンナムライヤダア

バヨエーン バヨエーン

バヨエーン バヨエーン』

コウタ「……………」

エリナ「……………」

エミール「……………」

コウタ「…な?」

エリナ「…うん」

エミール「つまり…どういうことだ?」

同時刻

「アナグラ ロビー」

ギル「今回のミッションは 隊長がいなくても何とかなるだろう  
シエル「隊長が苦手とする セクメトですけど…」

ナナ「私なら大丈夫だよ」

ギル「こんな時 隊長ならどうするだろうな…」

CC・ブレイカーデゴリオシテヤル

ギル「…まさかな」

シエル「プリティヴィ・マータも要注意ですね…」

ナナ「はい」

バレットノギジュツリヨクハ セカイイチイイ!!

ギル（…幻聴…だよな？）

ー終ー



## 没ネタ集

《冷やしカレー 始めました》

4 4 1 6 「冷やしカレーウマー」

ナナ「おでんパンにも合うよー」

4 4 1 6 「いや これにはオニギリ（豚ヒレ&チキン南蛮）が一番だ！」

ハルオミ「∴しつかし なぜ冷やしカレーにハマったんだ？」

4 4 1 6 「ん？ああ リツカちゃんが薦めてきたから」

ー二日前

リツカ「お疲れさま♪」

4 4 1 6 「あ どもども」

リツカ「いつも大変だね

忙しくても 少しは休まないと」

4 4 1 6 「そうは言ってもなあ∴」

（欲しい素材が出ないんだもの∴）

リツカ「身体が資本なんだから 無茶はダメっ」

4 4 1 6 「∴はい」

リツカ「わかってくれたなら∴

はい♪」スツ

4 4 1 6 「冷やしカレー∴？」

リツカ「カレーは嫌い？」

4 4 1 6 「いやいや むしろ好物だよ」

リツカ「だったら気に入ると思うよ♪」

4 4 1 6 「リツカちゃんが薦めるんだから 旨いに違いない∴

飲まずにはいられないッ！」グビゾツ

4 4 1 6 「あれ以来 ハマっちゃって」

《隊長の威厳》

4 4 1 6 「私が隊長です」

ギル「絶対に許さない」

4 4 1 6 「」

《ゴミ収集者》

4 4 1 6 「オラクル氷石とオラクル輝石を求めて 黎明の亡都へ

単身で来た その理由とは!？」

ハンニバル<ナニツテンダコイツ

イエン・ツイー<ハラヘツタチョー

4 4 1 6 「とりあえず止まりやがれ!

食らえっ! チェイントリガー!」

※ただの麻痺属性のバレット

ハンニバル<チェイントリガー(キリッ

ダツテオwww

イエン・ツイー<ホアキーン!?

ウゴケナイツイー!

4 4 1 6 「さて 今の内に回収回収つと…」

・燃えないゴミ

4 4 1 6 「……え？」

ハンニバル<モwエwナwイwゴwミw

イエン・ツイー<オタカラホーイ!

4 4 1 6 「ぬわーっ!!」

《GOD DIGGER》

4 4 1 6 「リツカちゃん リツカちゃん」

リツカ「ん？」

4416 「こういう神機 作れるかな？」ピラッ

リツカ「これって…つるはし？」

4416 「んだ

何でも 昔は岩を掘るために つるはしを使って掘ってたみたいでさ

これを神機に応用すれば ピンポイントで堅い部位も砕けるんじゃないかなって思ってた

リツカ「なるほどねえ」

4416 「ブーストハンマーなら 形状も似てるし…」

リツカ「悪くない案だけど…この形状だと ブースト機構は積みないよ？」

4416 「」

### 《ゴルゴ16》

シエル「あの…少し よろしいでしょうか？」

4416 「ん？なに？」

シエル「私 今まで様々なバレットを作ってきましたが どれもイマイチで…

その…ブラッドバレットの性質を利用しようとしても 上手くないのです…」

4416 「スナイパーのバレットはなあ…なんというか…なあ…

消費OPが多いからなあ」

シエル「…あの もしよろしければ 君の作ったバレットを譲っていただけたら…」

4416 「ん？いいよ

いいんだけど 自分のは効率度外視というか 局所的というか…」

シエル「それでもかまいません

参考にできるだけでも充分ですから…」

4 4 1 6 「んじや ちよつと待つとくれ」ヨイシヨ  
シエル「助かります…」

4 4 1 6 「トリガーハッピーがあつてこそそのモノばかりだな…コレ  
……」

### 《泣き下戸》

4 4 1 6 「ウワアアアウウア!!」  
リンドウ「おお落ち着け!!」

ほら 水飲め!水!

ハルオミ「まさか下戸とはねえ」

ギル「こんな隊長…初めて見たな…」

4 4 1 6 「誰が倒してもオンナジやオンナジや思でエ!

ンハツハツハツハアアアン!!」

リンドウ「誰か薬持つてきてくれえ」

ハルオミ「こつそり酒にすり替えなきやよかつた…」

ギル「たつた一杯でここまで酔うとも思わなかつたな

せいぜい呂律が回らなくなる程度かと思つたが…」

4 4 1 6 「アラガミ問題はア…グズツ…我が地域のみンハツハツ  
ハツハア!

我が地域のみならずウウ!!キョクトウ…世界中の問題やない  
ですかあ…!!」

リンドウ「わかつた!わかつたから!

とりあえず水飲め!な!」

ハルオミ「とうるか 何に対して叫んでるんだろ…?」

ギル「さあ…検討もつきませんよ…」

4 4 1 6 「アゝアゝアウ!アナゝダにはわからないでしょうねエ  
!!」

### 《えりにゃ》

エリナ「せんばあい…」ギョツ

4 4 1 6 「!？」

エリナ「ねえ…なでなでしてえ…」

4 4 1 6 「あ…え…な…なに…コレ…？」

新手の…イタズラ…なのか…？」

エリナ「はやくう…」

4 4 1 6 「ガチデレとは…これ如何に…？」

エリナ「…どうしたの…？」

4 4 1 6 「そ　そりゃコツチの台詞…」

エリナ「…せんばあい…」

4 4 1 6 「わあーっ!!顔が近い!!顔が近い!!」

ガバツ

4 4 1 6 「…夢…オチ…かよ…」

ベタすぎる…

……あんなの俺のエリナじゃない…」

### 《さよなら初恋ジュース》

コウタ「…というわけで　初恋ジュースに代わって　自販機に入れる飲み物を決めていきたいんだ」

ナナ「初恋ジュース…飲みたかったなあ」

コウタ「やめとけ…飲まない方が身のためだ…」

ナナ「ぷう」

コウタ「話を戻すけど　今の候補は…

G G レモン、綾鳶、銀の微糖、コーンポタージュの4つだ」

ナナ「私はコーンポタージュかな」

コウタ「俺はG G レモンだな

…皆にアンケートでもとった方がいいかな…？」

ナナ「いいんじゃない？」

4416 「銀の微糖一択

異論は認める」

ギル「認めるのかよ…

…俺も銀の微糖で」

シエル「綾鳶…で」

リンドウ「おう 自販機の飲み物か？

俺は何でもいいぞ」

ソーマ「銀の微糖…」

アリサ「この中なら綾鳶…ですかね」

イチカ「コーンポタージュに1つ」

ハルオミ「コーンポタージュだなあ

アレ最高なんだよな」

カノン「私もコーンポタージュです」

エリナ「私はGGレモン！」

エミール「綾鳶は確か 極東伝統の飲み物の1つ…

ならば僕は 綾鳶を選ぶまで！」

サカキ「私は何でもかまわない

君たちで自由に選ぶといい」

ヒバリ「そうですね…銀の微糖は飲んでみたいですね」

フラン「コーンポタージュで構いません」

リツカ「んー GGレモンかな」

その他いろいろ割愛…

コウタ「うーん…どれも人気だなあ」

ナナ「一番はコーンポタージュだけど 他のも大差ないね」

コウタ「まあ でも コンポタが一番人気だし…

…仕方ないか」

「新たにコーンポタージュが購入できるようになりました」  
4416 「なにこのウインドウ」

「終」

## 避暑地を求めて3000fc

4416は極度の暑がり

六月初旬あたりから 暑い暑いと喚き出す

…まあ その暑苦<sup>モノク</sup>し<sup>ロテイ</sup>そう<sup>ガイ</sup>な服を着ているからではあるが……

「4416の部屋」

4416「……あつい」パタパタ

うちわくもつと熱くなれよお!!

4416「…幻聴まで聞こえてきた……

こりや本格的にヤバいな…」パタパタ

うちわくん?暑くなつてきたね…?

4416「…こんな時にクーラーと扇風機と冷風機が壊れるとか

……

…同時に稼働させたのが原因か…?」パタパタ

うちわくおいちよつと待て

俺の言ってることなに馬耳東風してんだ!?

そのキミだよ そのキミ!!

4416「…なんだ この某テニスプレイヤーの如く熱いうちわは

……」パタパタ

うちわく馬耳東風っていうのは ウマの耳をつけたら 東から風

が ふうくく……

なワケねえだろうおええ!!

4416「…ダメだ はやく どこかに ひなん しないと……」

ポイツ

「ラウンジ」



4 4 1 6 「…まだ暑い……」

ハルオミ 「逆に考えるんだ」

4 4 1 6 「…へ？」

ハルオミ 「暑くてもいいさ と……！」

4 4 1 6 「……ないわー」

ハルオミ 「隊長さんよー 暑いなんて言ったら 余計に暑くなるぞー」

4 4 1 6 「……じゃあ 寒いと言えば 寒くなる……？」

ハルオミ 「そ そりゃあ もちろん……」

寒くなる……さ」

4 4 1 6 「…男に二言は……？」

ハルオミ 「……」

4 4 1 6 「……」 ドドドドド

ハルオミ 「…まいったな……」

4 4 1 6 「……暑い……」

地獄之釜茹也……」

ハルオミ 「こりゃ かなり重症だな……」

……しっかし この気温は24度だというのに そんなに暑いかな？」

4 4 1 6 「……」 プルプル

ハルオミ 「…ん？」

4 4 1 6 「おれは しようきに もどった！」

ハルオミ 「ど……どうした？」

4 4 1 6 「こんな暑いなら寒いところに行けばいいじゃねーか!!」

有言実行！ 求むは一桁！」 ドタドタ

ハルオミ 「……」

4 4 1 6 通常 難易度8 『雷氷瀑布』を受注

「蒼氷の峡谷」

4416 「あー なんて勢いだけで来ちまったんだー？」

こんなことなら扇風機だけでも修理すりやよかったー」

デミウルゴス<コノアホガア!!

4416 「雪溶けてるじゃねーか

全然寒くねーよ

少し暑ちーよ」

デミウルゴス<ヒンジャク ヒンジャクウ!

4416 「とつとと終わらせて帰るーよ」

デミウルゴス<WRYYYY!!

4416 「てえゐ!!」

ー三分後

ヴアジュラ<ア：アリノママ イマオコツタコトヲハナスゼ!

「オレハ モノヲクツテイタトオモツタラ イツノマニカク

ワレテイタ」

ナ：ナニライツテイルノカ ワカラネートオモウガ オレ

モナニヲサレタノカ ワカラナカツタ：

アタマガドウニカナリソウダツタ：

フイウチダトカ オオガタアラガミダトカ ソンナチャチ

ナモンジャア ダンジテネエ

モツト オソロシイモノノヘンリンヲ アジワツタゼ：

4416 「なんかスツゴイぶつぶつ呟いてるように鳴いてるんだけど

コレ 倒しても呪われたりしない？」

「4416の部屋」

4416 「なんだよこの暑さー

室温がとんでもないことになってらあ

温度36度 湿度70%とか なんて部屋だー」

うちわくあつついよねえく…

4 4 1 6 「早いとこ扇風機直さないと…

というワケで頼んます リツカちゃん」

リツカ「確かに機器は取り扱ってるけど…

あくまで神機に関連するモノがメインで…」

4 4 1 6 「オネガイシマス このとーり」ドゲザア

リツカ「…まあ 一応やってみるよ」

うちわくありがとう！

4 4 1 6 「!？」

カチャカチャ

4 4 1 6 「……………」ジー

リツカ「どうしたの？」カチャカチャ

4 4 1 6 「あ いや 何も…」

リツカ「そう…？」カチャカチャ

ネジネジ

4 4 1 6 「……………」ゴクツ…」ジー

リツカ「…何かヘンなこと考えてない？」

4 4 1 6 「え!?!いや!?!な 何もやましいことなんて考えてないよ!?!

あ ほら!暑いっしょ!?!扇いであげるよ!!」バタバタ

うちわく涼しくなりたい?涼しくなりたい?

すぐやっちやうから!いい?

リツカ「…ホントかな……………」ネジネジ

4 4 1 6 「じ 自分が変なコト考えるヤツに見えるかい?…」バタバタ

バタ

うちわくねえねえ?君んちってどんな家?ん?

ちゃんと 言葉よ!

リツカ「そうだねえ…

見えなくもない かな」

4 4 1 6 「」パタパタ

リツカ「あれー?

風が弱くなったぞー」

うちわくおいちよつと待て

俺の言ってることなに馬耳東風してんだ!?

結局 扇風機は直らなかつたとか

4 4 1 6 「まあ でも いいモン見れたし…ウエヒヒ」

ー終ー

## 狂騒のグルメ

「ラウンジ」

コウタ「ムツミちやーん

いつもの頼むよ」

4416「自分は酔豚で」

ムツミ「はーい♪」

コウタ「酔豚て…」

白米が無いとキツそうな注文である

4416「自分がなに頼んだっていいじゃないか」

コウタ「まあ なんだっていいけど…」

その雑誌はなんだ？」

コウタは手に持っている雑誌を指さす

4416「ん？これ？」

月刊エイト知らないのか？」

コウタ「いや…初めて聞いた…」

4416「簡単に言うと 世界中のゴッドイーターの特集がメインでな

今月の表紙を飾ってるのは…チーブンさんだな」

表紙の人物は 眼力が鋭く 貫禄のある人に見える

コウタ「誰？」

4416「おいおい チーブンさんも知らねえのかよ

チーブンさんは ロシア支部内で最強のゴッドイーターでな

旧型神機のスナイパーでありながら トップクラスの戦績を

残してる すんごい人だぞ」

コウタ「おおう…」

…で なんでそれ持ってるんだ？」

4416「いやあ いつか自分の名前が載るんじゃないかと思つて

毎月チエックしてるんだよ」

まさかの自分の名声の確認である

コウタ「……………」

4416 「というのは冗談だ

単に面白いから購読してるだけだよ」

コウタ「ふくん…」

会話は途切れ 独り静かに雑誌を読み始める

気がつく と 一緒に見ている二人だった…

4416 「Mr. ハット 相変わらず凄えな」

コウタ「なんかいろいろと黒いな…」

Mr. ハットと言われている人物は 黒のシルクハットに黒のスーツと 確かに黒い

4416 「シヨート&アサルトの神機使いで 返り血を一滴も浴びず 且つ服装も乱れない上 自慢のシルクハットも綺麗なままという

エミール顔負けの紳士的な戦い方が注目されてんだ」

コウタ「てか なんで本名じゃないんだ？」

4416 「さあ？」

コウタ「知らないのかよ…」

4416 「一度だけ本名が載ってたような

…何だったっけ……………」

コウタ「…ん？あれ？いつのまに料理が…？」

気がつく と 二人が注文した料理が置いてあった

ムツミ「雑誌にすごい集中してたから 話しかけるタイミングが掴めなくて…」

コウタ「いいよいよ 気にしなくて」

4416 「ほうほう これは旨そ…う…かな？」

あるものに目が止まり 声が途切れる

ムツミ「ん？」

コウタ「どした？」

4 4 1 6 「なんなんだ これはアアア!？」

急に声を荒げて騒ぎ出した

ムツミ「えっ!？」

私 ちがうもの作っちゃった!？」

コウタ「いや どうみても酔豚だよな」

しっかりと確認するが どこからどうみても酔豚である  
が

4 4 1 6 「パイナップル入ってるじゃねエかアアア!!」

コウタ「…え？」

4 4 1 6 「なんで酔豚にパイナップルが入ってるんだア!？」

というか なぜ酔豚にパイナップルを入れるんだア!？」

コウタ「おい 落ち着け！」

パイナップル1つでこの騒ぎ

ムツミ「えつと…あの…

ご…ごめん…なさい…」

思わず泣いてしまうムツミ

4 4 1 6 「あ いや 謝ってほしいわけじゃ…

あの…泣かないで？」

ムツミ「…ぐすつ…」

4 4 1 6 (あくやちちまったよ…)

コウタ「…どうすんだ この空気…」

↓

4 4 1 6 「ムツミちゃん

唐揚げ 三人前よろしく」

ムツミ「はい♪」

酔豚にパイナップル事件のことは すっかり忘れていようだ

両者共に

ナナ「まだかなく まだかなく」

4 4 1 6 「頼んでから10秒も経ってねーぞ…」

ナナ「おなかペコペコだよ」

4 4 1 6 「自前のおでんパンはどした」

ナナ「もう食べちゃった」

4 4 1 6 「お前はゴム人間か」

なにかと危なそうなたツツコミである

ナナ「ごむ人間？」

4 4 1 6 「…まあ なんだっていいや

トイレ行ってくる」

ナナ「はいはい」

―五分後

4 4 1 6 「やっぱり昨日の牛丼がダメだったか…？」

いや 今朝食った焼きそばパンか…？」

ナナ「遅いよー」

待ちきれなかったから ちよつと食べちゃったよ」

4 4 1 6 「スマンすまん

ベストだかバツドだか 腹痛がきてな」

ナナ「早くしないと 全部食べちゃうよ」

4 4 1 6 「あー はいはい

それにしても よくそれだけの食欲が…」

唐揚げがのっている皿の隅に 小さくなったレモンがあった

4 4 1 6 「…ナナ 唐揚げにレモンかけたか？」

ナナ「うん」

4 4 1 6 「全てにか…？」

ナナ「そだよー」

4 4 1 6 「……」プルプル

ナナ「ん？どうしたの？」

4 4 1 6 「ンなぜだアアア!？」

やはり急に叫び出す



ナナ「ふえ？」

4 4 1 6 「唐揚げにレモンをかけること自体はどうでもいい……！」

しかアしッ！全ての唐揚げにかけることは許さんッ！」

ナナ「……………」

突然の暴論に絶句するナナ

4 4 1 6 「なぜ唐揚げにレモンをかけたのか それを問いたい！」

だが 如何なる理由であれ レモンを垂らした唐揚げが元に

戻るワケがないッ！」

ただ1人 声を張り上げて長々と語る

4 4 1 6 「ならば やるべきことは1つつ!!」ビシィッ

ムツミに指を差し

4 4 1 6 「唐揚げッ！二人前ツツ!!」

↓

4 4 1 6 「ブドウはあるかい？」

ムツミ「あるよ」

4 4 1 6 「カナヅチはあるかい？」

ムツミ「ないよ」

4 4 1 6 「そうか……」

カナヅチが無いとわかると 重い足取りで去っていった  
なにかしたかったのか

↓五分後

4 4 1 6 「ブドウはあるかい？」

ムツミ「あるよ」

4 4 1 6 「木の板はあるかい？」

ムツミ「まな板なら……」

4 4 1 6 「まな板……ゴクッ……」

まな板と聞いて 生唾を飲み込む

そういう意味じゃない

ー五分後

4 4 1 6 「ブドウはあるかい？」

ムツミ「もう！さっきからなんですか！

ブドウをどうしたいんですか!？」

4 4 1 6 「……………」

ムツミ「……………」

沈黙がしばらくの間 続く

そして 4 4 1 6 が口を開いた

4 4 1 6 「ナシを1つ」

グボログボロ黄金代表 魚淵ドログ

「ラウンジ」

4 4 1 6 「ほい マテ茶」

ギル「……………」

唐突にペットボトルを渡されて 反応に困る

4 4 1 6 「飲んでみたらさ 焼き芋の皮みたいな味でさ

コレ お茶って言えるのかと思ってな」

ギル「…俺にどうしろと」

4 4 1 6 「ま 飲んでみ

大丈夫だ 未開封のだから」

ギル「そういうことじゃなくてだ…」

4 4 1 6 「んじゃ」

強引に手渡し 自室へと帰る

ギル「……………」

仕方なく 一口飲むことに

ギル「…ハア」

どのような心境なのかは 当人しか知らないだろう

「4 4 1 6 の部屋」

4 4 1 6 「普通のコーラよりも ZEROの方が美味しいと思うのは  
自分だけかな…」

そう呟き コーンポタージュの缶を開ける

4 4 1 6 「そのの皆！コーラ飲めよと思っただろ!？」

うちわくそんなワケないじゃん！

4 4 1 6 「まあ それはいいや」

コーンポタージュをグビりと飲む

4 4 1 6 「うま…うま…」シヤキシヤキ

コーンを噛んでから飲み込み また一口 口に含む

4 4 1 6 「うん…旨すぎる…!!」

いつの間にか 眼帯とバンドナを身につけていた

4 4 1 6 「もつと食わせろ！」

うちわくお米食べる！

4 4 1 6 「米？」

…あ！米と言ったら…

そう言うのと すぐさま外へと飛び出していった

―五分後

4 4 1 6 「この塩にぎり シンプルな割に旨いんだよなあ

…印刷されてるイラストの女の子は誰だか知らんが…

1つのおにぎり(塩)を持って 部屋に戻ってきた

そして ベッドに座り おにぎりの封を開ける

4 4 1 6 (これ なぜに『イタダキマス!』を推してるんだろ

カタカナじゃないとダメなのか?)

そう思いつつも イタダキマスと言ってから食べ始めた

4 4 1 6 「んま…んま…」モグモグ

あつという間に平らげて そのままベッドで横になった

4 4 1 6 「はあああ…」

溜め息混じりに声を出し 全身の力を抜いた

4 4 1 6 「…ねむ…」

うちわくいい夢を見よう…

気がつくと 目を閉じて眠っていた…

↓

4 4 1 6 「Z z z …」

??? 「…おい」

4 4 1 6 「Z z z :」

??? 「:おい!」

誰かが呼び掛けているが 一向に起きない

??? 「起きんかあ!」

4 4 1 6 「うえい!」

慌てて飛び起きる

:が そこは自分の部屋ではなかった

4 4 1 6 「:え?どこ?」

辺りを見回すも もやがかかっているかのようにハッキリしない

??? 「やつと起きたか

ここはお前さんの夢ん中の一部や」

喋る人物(?)の方を向くと グボログボロ黄金がいた

4 4 1 6 「え?なんで喋って:え?え?どうなってんだ!」

??? 「まあ 驚くのも無理はあらへんな

みんな大体そんな感じや」

4 4 1 6 「:そうかこれはゆめだ」

??? 「夢ん中や言うとするやろ!」

4 4 1 6 「てか 誰?」

ドログ「ああ 紹介遅れてゴメンや

グボログボロ黄金代表の魚淵うおぶちドログつちゅーモンや」

4 4 1 6 「代表?」

いや それよりも名はともかく 姓まであるのかよ」

ドログ「あ?この名前はテキトーにつけたんや

名無しの代表つちゅーのもパツとしいひんやん?」

4 4 1 6 「まあそうだけど:」

何の代表なんだ?」

ドログ「そや!そのことなんやけど:」

4 4 1 6 「うん」

ドログ「お前さん:何体狩ったんや?」

4 4 1 6 「:へ?」

ドログ「だから 何体グボログボロ黄金ワイらを狩ったんやって訊いてんねん」

4416 「えーつと…300ぐらい…？」

ドログ「ハッキリせえや」

4416 「確認しようにもできねーよ」

ドログ「ハア…じゃあ それでええわ

んで なんでそんなに狩ったんや？」

4416 「遊ぶ金欲しさでつい…」

ドログ「なんでそこはハッキリ言うねん！

犯罪の動機みたいなのとるやん！」

4416 「まあ 遊ぶ金欲しさは理由の一割程度だけだな」

ドログ「ん？じゃあ 残りの九割は何や？」

4416 「神機の強化費用に三割

食物関連に五割

その他に一割だな」

ドログ「なんやねん！食物関連て！

グルメか！」

4416 「お！正解！

正解者に10ポイント！」

ドログ「ツシヤー！どんなもんや！

つて クイズ番組ちやうねん！！」

4416 「えー？『ちえぐい』つークイズ番組知らんの？」

ドログ「あー それきいたことあるわ

人気番組の…て ちやうちやう！

世間話しにきたんちやねん！」

4416 「いやー どんどんノつてくれるから面白くて…」

ドログ「ハア…お前さんみたいなヤツ 初めてや…

ごつつう疲れるわ…」

4416 「話は確か…なんで狩ったのか だったな」

ドログ「そや

んで まあいろいろと…」

4416 「まあ 自分たち 食を生業としてつからな  
食に拘るのは当然つてワケよ」

ドログ「いや それはワイアラガミらを喰うんが仕事やろ？

それとこれとはちやうやん」

4416「そこに気付くとは…やはり天才か」

ドログ「そんな褒めても何も出えへんっちゅーねん

つてなに言わせんねん！」

4416「ノリツツコミ パないな」

ドログ「ハア…ハア…もうそれはええねん…

話戻すで」

4416「アツハイ」

ドログ「お前さん…ちよつと狩りすぎとちやうか？」

4416「……………」

ドログ「金になるヤツはそこらにおるのに グボログボロ黄金ワイらをピンポイン

トで狩るっちゅーのは ちと理不尽やと思わんか？」

4416「……………」

ドログ「希少な鉱石なんて グボロ黄金ワイらにはわからんねん

ただでさえ弱いっちゅーのに そんなんで狩られまくる

グボロ黄金ワイらの気持ち 考えたことあるか？」

4416「……………」

ドログ「ちなみにお前さんだけやないで

他のヤツらもアホみたいに狩ってんねん」

4416「……………」

ドログ「せやから こうやって夢ん中の一部を借りてや 一人一人

に言うてんねん

どうなつとんのかはワイにもようわからんけど 気付いた

らできるようになってん」

4416「……………」

ドログ「さつきからずーっと黙つとるけど なんか言うたらどう

や」

4416「…ここまで言わせといてなんだけど

自分 グボロ黄金金魚はここ数ヶ月狩ってないんだけど…」

ドログ「んなモン関係あらへん！」

狩ったつちゅー事実にはかわりないやろ！」

4 4 1 6 「あー そりやそうだな」

ドログ「開き直るん早っ！」

4 4 1 6 「でも 希少な素材持つてるのと 豆腐フィジカルだから  
狩られやすいのも事実じゃん？」

ドログ「せやけどなあ…」

てか豆腐フィジカルてなんや！

初めて聞いたわ！」

4 4 1 6 「物理的に脆いやツを豆腐フィジカルって言わね？」

ドログ「普通 紙防御とちやうんか!？」

4 4 1 6 「そうとも言う」

ドログ「…ハア…アカンわ…」

身が持たんわ…」

4 4 1 6 「魚だけにか」ドヤツ

ドログ「もうええつちゅーねん！」

4 4 1 6 「いや お前の場合はカマボコかな」

ドログ「ホンマええ加減にしいや！

いてまうぞ！」

4 4 1 6 「ほう？ いいぞ やってみ」

ドログ「言つとくけど ワイが本気出したらな お前さんなんて2  
秒でケリがつくわ」

4 4 1 6 「なるほど 2秒でお前の返り血を浴びるのか…」

ドログ「ちやうわ！ お前さんをケチョンケチョンにできるんや！

ムダに長く生きてへんからな！」

4 4 1 6 「生き延びた の間違いだろ」

ドログ「このガキ…！」

4 4 1 6 「来いよべ〇ツト

砲塔なんて捨ててかかってこい」

ドログ「誰がベネツ〇やねん！」

砲塔は捨てられへんわ！」

4 4 1 6 「ノリが悪くなってきたな」



ドログ「そう何度も付き合うてられへんねん！

ええ加減にせえや！」

4 4 1 6 「どうも ありがとうございましてー」

ドログ「漫才やないねんツ！

もう帰るわ！」

4 4 1 6 「また来いよー」

ドログ「二度と来おへんわ！」

↓

4 4 1 6 「…ん？」ムクツ

気だるそうに上体を起こす

辺りをゆつくり見回し 自室であることを確認する

4 4 1 6 「…変な夢だったな

やたらとハッキリ覚えてるし…」

しばしの間 考え込むも

4 4 1 6 「ま どうでもいつか」

考えるのをやめた

## 隊長の日常

### 《槍乱節》 ソラン

4 4 1 6 「槍ってさ いろいろ便利だよな」

ギル 「ああ…そう…：…だな…」

「いろいろ」に対して どういう解釈をすればいいか  
そう言いたげな顔をするギル

4 4 1 6 「突いたり斬ったりブン回したりとか

あと 投げるっつーこともできるし」

ギル 「いや 投げたりはしないだろ…」

4 4 1 6 「ノンノン 甘いね

槍というのは 一見 長い棒に刃をつけただけのように見えるが 意外と奥が深い武器なのさ」

ギル 「……………」

4 4 1 6 「槍が誕生したのは遙か昔 なんと旧石器時代といわれる頃だという

その頃から投げ槍として使用していたとか」

槍について語り出す4 4 1 6

4 4 1 6 「まあ 形によっては投げに適合してないのもあるだろうけど…

…：…神機のはどうだろう？」

ギル 「さあな…」

4 4 1 6 「こりゃあ確認せずにはいられん！

さっそく検証に行くぞ！」

4 4 1 6 「魔女で試すんじやなかった」

ギル 「おい どうするんだ

突き刺さったままになってるじやねえか」

サリエル<ウゴゴゴゴ>…

《ディフェンダー》

4 4 1 6 「バスターブレードって 刀身そのものでガードできそう  
スよね」

ハルオミ「ハンターじゃあるまいし 盾があるんだから意味無いだ  
ろ〜」

4 4 1 6 「ハルさん 男たるものロマンを求めなきや 男が廃ると  
いうものでスよ」

ハルオミ「なるほど ロマンか…」

なら 試してみる価値はあるな」

4 4 1 6 「その意気スよ」

ハルオミ「こりやダメだわ」

4 4 1 6 「適材適所が一番スね」

ハルオミ「お前…ロマンがどうこう言ってたろ?」

4 4 1 6 「ん〜?何のことかな?」

ハルオミ「……………」

《ロングショット》

4 4 1 6 「自分 気になります!」

アリサ「な 何ですか!?

急に大声を出して…」

4 4 1 6 「インパルスエッジってあるじゃん?

あれ 銃身に依存しないのはなんでだろって思ってた

アリサ「?」

何が言いたいのかイマイチ理解できていない

4 4 1 6 「ほら ブラッドアーツのさ <sup>1E伍式・照射</sup>マスパ<sub>ってさ</sub> 銃身が

ショットガンでも問題なく撃てるじゃん」

アリサ「はあ…」

4 4 1 6 「あれ どうなってんだって思って」

アリサ「…神機のことなら 私よりも詳しい人がいるでしょう？」

4 4 1 6 「や 自分はこの疑問に該当する答えを知りたいんじゃない  
く 疑問そのものに共感してほしいだけだ

な このナゾ…わかるだろう…!？」

アリサ「……………」

アリサは答えることができなかった

### 《ちくわ部》

4 4 1 6 「もし 世界中の食糧がちくわのみになったら…」

コウタ「いきなり何を言い出すんだ」

4 4 1 6 「いやあ 可能性は0じゃないだろう」

たとえば机上の空論だとしても どこかで役立つかもしれない  
じゃん」

コウタ「……………」

4 4 1 6 「ほらほら 糖分摂って考えようか

芋けんぴ やるから…ん？」

袋から取り出したそれは 芋けんぴではなかった

4 4 1 6 「…え？」

ちくわだった

4 4 1 6 「え？ いやいや そんなまさか…」

袋の中をのぞき込み 表情が固まる

そして 無言でポケットの中を探り うま○棒を数本取り出す

4 4 1 6 「……………」ガサガサ

中はちくわだった

コウタ「…お おい……………」

4 4 1 6 「ちくわしか持ってねえ！」

### 《\*はこのなかにいる》

エミール「：コレは」

エミールの部屋の前に 大きな段ボール箱がある  
人間が1人は入るであろう

エミール「確か『カクレミノジツ』だったか…？

現代の物をも利用するとは流石 ニンジャである

…だが」

段ボール箱を見据え 指を指す

エミール「この僕の目を誤魔化すことなどできない！

そう！僕には全てお見通しき！」

段ボール箱は 微塵も動かない

エミール「：ハツタリに聞こえるかもしれないが コレがハツタリ

かどうかは すぐにわかる…！」

さあ 観念して姿を現すがいい！」

4 4 1 6 「何やってんだ」モグモグ

あんパン片手に 後ろから話し掛ける4 4 1 6

エミール「ああ 君か

見ての通り ニンジャを見つけたところだ」

4 4 1 6 「ニンジャ？どこにさ」

エミール「あの段ボール箱の中にいるのさ

『カクレミノジツ』で…」

4 4 1 6 「どっちかっていうと 傭兵だろ…」スツ

躊躇なく段ボール箱を持ち上げる

4 4 1 6 「前に使ってた段ボールが濡れて破れてしまったからなあ

丁度良かった良かった」

片手で器用に 段ボール箱を持ち去ってしまった

もちろん 段ボール箱の中には 誰もいなかった

エミール「：コレが…」

コレが『ドロン』か!？」

リンドウ「隊長さん 肉は好きか？」

4416 「肉スか？」

まあ キライではないスね」

リンドウ「そうか

昨日 ハムを貰ったんだけどさ 俺1人じゃ食いきれな

い量でな…

少し持つてつてくれないか？」

4416 「いいスよ」

リンドウ「スマンな」ドスン

リンドウが渡したものは それは

4416 「……………」

ジユラルミン製のトランクケースだった

リンドウ「結構ギツチリ詰めたからなく

肉汁が染み出てたらゴメンな」

4416 『『少し』とは何だったのか』

リンドウ「まあ細かいこたあ気にするなつて

焼き肉だと思つてモグモグ食べばいいさ」

4416 「うおオン まるで自分は人間火力発電所だ

つて何言わせるんスか」

リンドウ「んく？お前さんはどっちかつていうと『えむえむ』とか

いうヤツに近いなあ」

4416 「君が食べながらツ 君を食べたいツツ!!

つて だから何言わせるんスか！

というか自分 なんでノリツツコミするようになったんだ!？」

金色のアイツの影響であろう

### 《きのこのヤマ》

4416 「いやいやいや マジだつて！

見間違いとかなんなんじゃないつて！」

シエル「いくらなんでも それは…」

大声で騒ぎ立てる4416

ナナ「どしたのー？」

単純に話の内容が気になったナナが 2人の間に入る

4416「何度言っても信じてくれないんだよ！

珍しいヤツを見たつてのに！」

ナナ「珍しい？アバドンとか？」

4416「いや そんなんじゃない

ナナ：お前は信じるか？」

ナナ「うん」

4416「軽いな…まあ いい

自分が見たヤツ それは…」

ナナ「ワクワク」

4416「あるくキノコだ！」

ナナ「…ふえ？」

4416「いいか！ 歩く茸 じゃなく あるくキノコ だからな

！

近くに 〃あるくめ〃もいたんだ！間違いない！」

ナナ「…たいちよー…」

4416「ん？」

ナナ「それはないよ」

4416「なぜ信じなアアアア!!」

ー終ー

## 赤と白になるアホ緑

「ラウンジ」

12月24日 この日の夜はクリスマススイブ

誰かが集まれと言っていないにも関わらず 皆 ラウンジに集まっている

アナグラでは イベントがある日は特定の場所に集まるのが普通なのだろうか

4416 「メリイイクリスマアース!!」チリンチリン

サンタクロースの格好をした4416が 何の前触れもなくラウンジにやってきた

赤い帽子に赤い服を身にまとい さらに白い袋を担ぎ ハンドベルを鳴らしている

カノン「その格好 サンタクロースですね！」

とても似合ってますよ!」

ナナ「ねーねー プレゼントちよーだい!」

4416 「まあ 落ち着け OK?」

コウタ「OK!」

4416 「ぬわーっ!!」

ギル「何をやってるんだ!」

相変わらずメチャクチャだが 今日により一層 楽しそうに見えた

4416 「ぐぬぬ…まだ終わらんよ

自分だけがメインキャラクターだと思ふなよ!」

エミール「ほう…?」

4416 「カマーン!! ベイベー!!」チリンチリン

ハンドベルを鳴らしながら叫ぶと トナカイのような衣装を着たハルオミとリンドウが ソリを引いてやってきた



コウタ「ぶフオっ！」

ソーマ「……………」

シエル「フフフ…」

エリナ「…ははは……………」

皆それぞれ 違った反応を見せる

リンドウ「どうだ？ 似合ってるだろ？」

リツカ「そ そうだね…」

ハルオミ「案外悪くねーな コレ」

コウタ「マジか」

4416 「さあさあ プレゼント配布の時間だ！」

そう言うと 袋の中をガサゴソと探り 手の平に収まるほどの小さな箱を取り出した

4416 「中身は開けてからのお楽しみ！」

先着一名様！ただアし お一人様一品まで！」

小さな箱を仰ぐように掲げる

4416 「欲しいという方は ハンドを上げて意思表示をお願いします！」

ギル「競りじゃねえんだから…」

アリサ「あの…私 頂きます！」

4416 「はいイ どうぞオ！」

小さな箱を受け取り すぐさま開けて 中を確認する

中から出てきたのは パワーストーンを使用したブレスレットだった

アリサ「これは 当たり…ですか？」

4416 「さあ？」

コウタ「いや さあつて…」

プレゼント全て把握してないのか？」

4416 「いやいやいや そういう事じゃナイ

物の価値なんて人によって千差万別なりよ

スキンヘッド男がヘアゴム貰ったって嬉しくないだろうに」

シエル「深いですね…」

4416 「ま 要は相対的ってことさ

さあさ 気を取り直して 次の商品はコチラ!!」

2品目は 細長い直方体の箱

これも片手で持てる程度の大きさである

4416 「せっかくだし ヒントをやろう

これは オサレアイテムだ!」

コウタ「オシヤレアイテムか…」

4416 「オシヤレじゃない オサレだ」

コウタ「どっちも似たようなモンだろ?」

4416 「そうだな」

コウタ「そこは否定しろよ!」

二人で漫才じみたやり取りをしている間に もう1組 話し合っていた

ナナ「ほらほら 思い切って手を挙げよ? シエルちゃん」

シエル「で ですが…」

ナナ「シエルちゃんも女の子なんだからさー

恥ずかしがらないで ね?」

シエル「……………」

ナナ「そーれっ!」

シエル「あっ…!」

シエルの手首を掴み 思い切り上に伸ばすナナ

4416 「お シエルだな

さあ 受け取るが良い!」

やや強引に迫られるかたちで プレゼントを手にした

ナナ「早く早くー」

中身が気になってしょうがないナナに促され 渋々箱を開ける

シエル「これは…」

中から出てきたのは 何らかのケース

丸っこいフォルムから察するに 眼鏡のケースだと判断した

ナナ「どんなのかな?」

ケースを開け 眼鏡を取り出した  
黒い上縁 細長いレンズといった いかにも知的な人がかけそう  
な眼鏡だった

ナナ「おぉー」

シエル「あの…私 視力はそこまで悪くないのですが…」

4416 「大丈夫だ 伊達メガネだ」

ナナ「ねーねー かけてみてよ」

シエル「…はい」

さすがに断る理由が無いのか 慣れない手付きで眼鏡をかけた

シエル「どうでしょうか…?」

カノン「すごく似合ってますよ!」

ギル「メガネ一つでここまで変わるとはな」

皆に大好評である

ここまで褒められるとは思っていなかったシエルは 次第に顔が  
真っ赤になっていった

4416 「さあ お次の商品はコチラ!!」

やたらと甲高い声と共に取り出したのは 真っ白な紙と赤いリボ  
ンでラッピングされた何か

片手で持つには大きく 重いようで 袋そっちのけで両手で持つ  
ている

4416 「ヒントは…マンガだな」

コウタ「ハイハイハイハイハイ!!」ガタタツ

マンガと聞いた瞬間 思い切り手を挙げるコウタ

4416 「ハイよ」

漫画の束であろうプレゼントを受け取り 早速ラッピングを剥が  
した

コウタ「」

中身は そこそこ人気の漫画『進撃の巨神』の2巻〜11巻だった  
コウタ「おい!1巻と12巻からが無エじやねーか!」

4416 「仕方ないさ」

無いモンは無いんだ」

コウタ「…まあ 別にいいか」

ため息をついて 諦め気味に妥協する

4 4 1 6 「さあ 次はコレだ！」

取り出したプレゼントは ワインボトルのような形をしている  
もちろん ラッピングもされている

4 4 1 6 「ヒントはワイン…としか言いようがないな」

ハルオミ「なら 俺が」

4 4 1 6 「ほい」

粗雑に渡す 4 4 1 6 に対して ハルオミは慎重に受け取る

ハルオミ「なんだろうなコレ」

…お楽しみはとっておくとするか」

4 4 1 6 「期待しない方がいいですよ」

ハルオミ「さすがに過度な期待はしないさ」

4 4 1 6 「…ならば その期待をぶち壊すまで！」

ハルオミ「え？」

コウタ「『ぶち壊す』って言ったぞ 今」

一体 どのようにして 期待をどうこうするのか

4 4 1 6 「自分が用意したプレゼントの8割は たてしま 館島さんから購入

した物で——」

コウタ「誰だ 館島て」

4 4 1 6 「コウタの実家の近くにある 雑貨屋の店主だよ」

コウタ「ああ あの人か」

4 4 1 6 「…んで 残りの2割は パーティグッズで有名な『トリックスター』製の物

よ」  
…ハルさんが受け取ったそれも『トリックスター』製なんです

ハルオミ「…まさか…」

楽しみに取っておくはずのプレゼントのラッピングを 慎重に剥がしていった

中身は 至って普通のワインのように見える  
ハルオミ「：やっぱりな」

ラベルを見ると でかでかと『神殺し』と書いてある

4 4 1 6 「アルコール0%という 神をも裏切るワイン

しかし そこがいいと人気の一品！

常に品薄だから買うのに苦労したんスよ」

ハルオミ「やられたな」

4 4 1 6 「んじや次は：コレだ！」

手に持っている物は かなり小さい箱

グ○コのおまけと そう変わらないサイズである

4 4 1 6 「さあ 我こそはという方は」

エミール「僕が頂こう！」

おおげさに手を上げるエミール

4 4 1 6 「おう ここでくるか」

意外と言わんばかりの反応を見せる

エミール「：『舌切りすずめ』という 極東の昔話で学んだことだ

が

欲が大きければ痛い目にあってしまう

そう：先ほどのコウタ隊長のように」

コウタ「おい」

4 4 1 6 「うん まあ 舌切りすずめは知ってるけど…」

微妙な顔のまま プレゼントを渡す4 4 1 6

笑いを堪えているようにも見える

エミール「しかし 寡欲であれば 相応の幸福がもたらされ……」

語りながら開けた箱の中から出てきたのは

ゴキブリだった

エミール「のわああああ!？」

予想だにしない出来事であったためか 思わず放り投げてしまっ  
た

そのせいで ラウンジ内は軽いパニック状態となった  
4 4 1 6 「いやはや…予想以上の反応さね」

場違いなほど冷静に コメントを呟いたあと 微動だにしないゴキブリを拾い上げた

4 4 1 6 「静粛に 静粛に！」

これはオモチャである！」

その言葉と共に 辺りは静まり返った

4 4 1 6 「コレも『トリックスター』製だよ

第一 モノホンのゴキなんて入れるワケないじゃん」

そう言ったあと 文字にしづらい笑い声が響き渡った

4 4 1 6 「ほれ 次は投げんなよ？」

エミールにオモチャのゴキブリを差し出す

エミール「：そうか そうか きみはそんなやつなんだな」

4 4 1 6 「それ エミールや」

その後もプレゼント配布は続いた

人数分用意してあると思わせて まさか本当に人数分あったとい

う事実

4 4 1 6 曰く『クリスマスセールで安かった』らしい…

4 4 1 6 「あと 大量購入したからか 館島さんが1割安くしてく

れたのもある」

らしい…

—数時間後—

「ブラッド区画」

4 4 1 6 「今日はいつもよりはつちやけすぎたなあ」

帽子は脱ぎ サンタ服のボタンを全て外している

4 4 1 6 「ま 楽しかったからどーでもいいか」

独り言を呟きながら 自室に入ろうとした時

エリナ「せ 先輩！」

エリナが4416を呼び止めた

4416「ん？どした？」

エリナ「あのさ…先輩だけ貰ってないでしょ？」

4416「何を？」

エリナ「プレゼント…」

4416「…まあ 渡す側だし 仕方ないさ」

エリナ「…あのね」

4416「うん」

エリナ「……………」

無言のまま 手に持っていた紙袋を差し出した

4416「コレは？」

エリナ「…先輩のために マフラーを編んだの…」

4416「ほほう いいねいいねえ！」

じゃ 早速 装着 !!」キュイーン

明らかに衣類を身に付けるような音ではなかったが 普通にマフラーを身につけた

4416「…なんか妙に長くない？」

片っぱ メチャ余ったんだけど」

エリナ「うん だってこのマフラーは…」

4416と横並びになり 余ったマフラーを首に巻いた

4416「!？」

エリナ「こうするためだから」

2人で1つのマフラーを巻くかたちとなった

エリナ「このマフラー使いたかったら 私と一緒に ね…？」

4416「……………了解」

あまりの緊張で 変な返答になってしまった

4416（おいおいおい…

もしサンタが実在するんなら サンタ仕事しすぎだろ！

なんつープレゼントだ！サンタ様様じゃねーか！）

エリナ「…どうしたの？」

4416「あ いや その…」

エリナ「ん？」

4 4 1 6 「…もう少し ここのままで……」

エリナ「…いいよ♪」

4 4 1 6 (サンタ 過労死する気かいな

…いや 素直に受け取るとすつか

そう 乙女座の自分は センチメンタリズムな運命を――)

—終—



## 愛は目で見えるもの

「ラウンジ」

エリナ「……………」

エリナは カウンター席に座って 考えていた

4416が 本当に自分のことが好きなのかを

エリナ「……………どう…かな」

テーブル席に座っている4416を 横目で見る

4416 「リザイア…」

コウタ「だあー！なんで俺ばかり！」

ハルオミ「ファルコオン パアーンチ！」

カノン「穏やかじゃないですね」

四人が集まって スマ○ラをしていた

エリナ「……………」

楽しそうとは思うものの 声をかけられないでいた

エリナ「…やっぱり……………なのかな…」

「贖罪の街」

カリギュラくズニルナ！ニンゲン…ウボツ！

次々と各部位が崩壊し みるみる弱体化していくカリギュラ…

カリギュラくウボアー

謎の断末魔と共に 動かなくなった

4416 「はい 終了」

シエル「なんだか 呆気なかったですね」

エミール「つまり 我々が成長しているということだ」

エリナ「……………」

エリナは 一言も発しない

傍から見ると うわの空といった様子である

4 4 1 6 「…お そうだ」

何かを思いつき それをシエルとエミールに話す

4 4 1 6 「…とといった感じで」

エミール「なるほど… 勝利に華を飾るという訳か」

シエル「…別に 構いませんが」

4 4 1 6 「んじゃ やるぞ」

カリギュラ（故）を背に 左から エミール シエル 4 4 1 6 の

順で横に並ぶ

4 4 1 6 「エリナー 見てくりー」

エリナ「……………？」

ゆつくりと 3人の方を見るエリナ

3人は こつちを見たのを確認し

4 4 1 6 「チヨロイね！」

エミール「甘いな！」

シエル「チヨロ甘ですね」

見たことがあるようなポーズと共に 聞いたことがあるような決

めゼリフを言い放った

エリナ「……………うん」

4 4 1 6 「……………」

全くの無反応に 顔が赤くなる4 4 1 6

4 4 1 6 「…アカン 恥ずい……………」

「ラウンジ」

4 4 1 6 「ぐぬぬ…」

キグルミ「……………」

チエスをしている2人

明らかに 4 4 1 6 が劣勢である状況となっている

アリサ「さすがに ここから逆転するのは難しいでしょうね…」

4 4 1 6 「…いや 諦めたらそこで試合終了だ…！」

そうは言うも小声で 将棋なら勝てる… と呟いている

4 4 1 6 「……！そこだあ！」

大声で叫び 駒を動かした

アリサ「あつ！そこは…」

キグルミ「………」

キグルミは 五秒も経たずして 駒を動かした

アリサ「チエツクメイト…ですね…」

4 4 1 6 「……え？」

盤上の駒を 時間をかけて1つ1つ確認していく

その様子を エリナは遠くから見ている

エリナ「……やっぱり…なのかな…」

何やら悲しそうな 残念そうな顔になる

4 4 1 6 「…自分が…負けた…？」

キグルミ「………」パタパタ

喜びの感情を 体全体で表現するキグルミ

4 4 1 6 「ウゾダ ドンドコドン!!」

アリサ「ま まあ… 相手が一枚上手だったということ…」

4 4 1 6 「…ならば 将棋で勝負だ！」

「4 4 1 6 の部屋」

4 4 1 6 「…ハア…」

結局 将棋でも惨敗となり 涙の敗走以外の選択肢がなかった4

4 1 6

ベッドで横たわるその背中は 哀愁が漂っている気がしないでもない

4 4 1 6 「…誰か慰めてくれえ……」

そう言った時

エリナ「…先輩……」

エリナがやってきた

4 4 1 6 「…開いてるぞ」

エリナ「……………」

無言で入室し 4 4 1 6 の姿を見た

4 4 1 6 「…エリナあ……………」

エリナ「……………なに…?」

4 4 1 6 は 気だるそうに起き上がり エリナの前で膝で立つ姿  
勢になった

エリナ「えっ…!?!」

戸惑っていると 4 4 1 6 は 顔をうずめるように抱きついた

エリナ「せっ 先輩…!?!」

4 4 1 6 「…スマン しばらく こうさせてくれ……………」

エリナ「……………」

エリナは 特に嫌がる様子もなく ただじつと立っていた  
…そんな状態が20秒程続いた時だった

4 4 1 6 「ああ〜 心がびよんびよんするんじやあ〜」

そんな言葉が自然と出てきた

そして エリナから離れた

4 4 1 6 「いやあ いきなり抱きついたりしてスマン

あれは 一種の防衛本能が働いたというか…」

エリナ「…で いいの?」

4 4 1 6 「へ?」

エリナ「…先輩は 私なんかとで いいの…?」

4 4 1 6 「……………どゆこと?」

話がさっぱり見えてこない といった表情をしている

エリナ「…先輩は私に 良くしてくれた…」

けど それは私の勘違いなのかもしれない…」

目には少しだが 涙が溜まっている

エリナ「私の好意も もしかしたら一方的なものかもしれないし…」

ホントは すごく迷惑なんじゃないかなって…」

4 4 1 6 「……………」

エリナ「…だから 聞きたいの……」

先輩の…私に対する気持ち……」

お互い 顔を見る

4 4 1 6 は まっすぐ見ているのに対し エリナは やや俯いて  
いる

4 4 1 6 「……エリナ」

エリナ「……………」

4 4 1 6 「お前は何を言ってるんだ」

エリナ「…え……」

捉え方によっては いい方向にも悪い方向にもなりそうな言葉を  
言った

エリナ「それって……」

何かを言いかけるエリナの両肩を 優しく かつしっかりと掴ん  
だ

4 4 1 6 「一方的に好意を寄せたのは むしろ自分の方だ

迷惑だなんてとんでもない！」

エリナ「…先輩」

4 4 1 6 「俺は エリナが好きだ！大好きだ!!」

エリナ「で でも 私なんて 何の取り柄もないし…

…ム ムネだつて 大きくないし……」

4 4 1 6 「フツ… 小さい方が好みなんですね」

おまわりさん こいつです

エリナ「…ホントに 私でいいの…?」

4 4 1 6 「モチロンだ！」

エリナ「……こんな…私と……」

4 4 1 6 「ええい！しつこい！」

分ならず屋には 直接伝えるまで！」

そう言うと エリナの唇と自分の唇を合わせた

エリナ「んっ!？」

あまりにも突然すぎる出来事に 4 4 1 6 に身を委ねる流れと  
なった

4 4 1 6 「……これで わかつたろ？」

エリナ「……先輩……！」

涙がぼろぼろと流れ落ち 泣きながらぎゅっと抱きついた

4 4 1 6 「……………」

4 4 1 6 は あえて何も言わずに 背中を優しくさすった

エリナ「……ねえ 先輩……」

随分泣いたため 目が真っ赤っかになっている

4 4 1 6 「ん？」

エリナ「今日1日は 一緒に過ごしたいな……」

4 4 1 6 「……いいですとも！」

互いに 笑顔になる

その笑顔は 喜びに満ち溢れていた

4 4 1 6 「ぬっふっふ

今夜が楽しみである……！」

エリナ「……え？」

……前言撤回

4 4 1 6 の笑顔は 獲物を狙う獣を彷彿とさせる笑顔だった

エリナ「な……何を……するの……？」

4 4 1 6 「無論……ナニをするに決まってる！」

——爆——

ここからRB編  
神霊現象

——とある日の三日前

「4416の部屋」

4416 「『リヴィイを怖がらせるにはどうするか 話し合おうじゃない会 第104回』始まるぞ！」

ロミオ 「過去に103回もやったっけ？」

4416 「いんや これで4回目であゝる」

ナナ 「前は回はたしか 怖がらせる作戦を考えてたんだよね」

4416 「イエース

んで 小道具を調達してるところに隊長さんが来て……」

ナナ 「ロミオ先輩がうっかり口を滑らしちゃったんだよね」

ロミオ 「あの時は気が緩んでたから……」

4416 「そんなワケで隊長さんも強制的に参加させました」

ジュリウス 「……………」

4416 「……やっぱ怒ってます？」

ジュリウス 「いや…… こんな事をするなら 俺にも声をかけてほしかったとか

そんな事は考えてない 断じてだ」

4416 （自分から参加したかったのか）

ナナ 「ところで シエルちゃんとギルはどうするの？」

4416 「ぬっふっふ 2人はあえて参加させない

それこそがこの企画に加担すると言っても 過言ではない」

ロミオ 「企画って…… まだ大まかな部分しか出来てないんじゃない？」

4416 「まあまあ まずは話を聞こうじゃないか」

ジュリウス 「聞かせてもらおう」ズイツ

4416 「まずは第一フェイズ

仕掛け人のロミオが――」

――とある日

「アナグラ ロビー」

ロミオ「よおう リヴィ！」

若干ぎこちない歩き方で リヴィに歩み寄る

リヴィ「ん ロミオか」

ロミオ「お前も隊長に呼ばれたのか？」

リヴィ「ああ そうだ

なんでも 試したいことがあるのだとか」

ロミオ「いつもは1人であれこれやってるのになあ

昨日なんかも 訓練室で……ズルツ

階段を降りようとするも よそ見をしてたため 踏み外してしま

う

ロミオ「うわああああ!!」ガタゴトガシャーン

リヴィ「ロ ミオ!大丈夫か!」

派手に転んだロミオのもとへ駆け寄る

ロミオ「痛って……」

膝をつき頭を深く下げた状態で 後頭部をさする

リヴィ「ロミオ…… 怪我は無いか?」

ロミオ「ああ…… 俺 は 大 丈 夫 だ ぜ」ガシツ

リヴィ「えっ……」

リヴィの肩を掴み ゆっくりと顔を上げる

ロミオの顔は まるで剥きたてのゆで卵のようなのっぺらぼうになっ  
ていた

リヴィ「――」

思考が停止する

今まではどんな事が起こっても 解決するための策を考えるのを  
行動する事を止めなかった

しかし 今は『考える』ことが出来ない



理性が思考を放棄した時 働くのは

リヴィ「ひああああ!!」バシッ

感情 そして 直感

叫びながらロミオの手を払いのけ 偶然開いていたエレベーター  
へと走る

そして 無我夢中で「閉」ボタンを連打する

ロミオ「うあー…」

ロミオはゾンビのように歩くも当然間に合わず ドアは完全に閉  
じてしまった

リヴィ「ハア…ハア… 見間違い…なのか…？」

しかし 「開」ボタンを押す勇気がない

リヴィ「…とりあえず 移動しないと」カチッ

ブラッド居住区画行きのボタンを震えた手で押す

リヴィ「……………」

たった数秒が 長い時間のように思える

そんな事を考えていると ドアが開いた

4 4 1 6 「ポチツとな」ガシヤコン

リヴィ「!」ビクッ

気が緩んでいたところに 人がいることにビククリしてしまう

ちようど自動販売機で飲み物を買っていたようだ

4 4 1 6 「ん？どーした？」

リヴィ「あ… いや…」

4 4 1 6 「んー？事件のかほり…」

何かがあった… いや 何かを見てしまった… そんな顔を  
しとる」

リヴィ「…鋭いな」

4 4 1 6 「スパア使いですから」ドヤア

リヴィ「信じられないかもしれないが それでもいいなら…」

4 4 1 6 「いいぞ。」

リヴィ「…正直 私でも信じられないんだ

見間違いかもしれないが それでも…」

4 4 1 6 「やく きいてくれなくちや あどは

ついでだし ロミオも呼んでだ…」

リヴィ「！ い 今すぐに聞いてほしいんだ

今 ここで…」

4 4 1 6 「うーん たいちょうは いいぞ」

リヴィ「：ロビーでロミオが階段から落ちて

ロミオの顔を見ると 顔が…」

4 4 1 6 「ふんふん」

リヴィ「それで 慌てて逃げてしまつて…

その ロミオには 悪いことをしてしまつて…」

心の整理がついていないためか 声が震えてしまっている

4 4 1 6 「落ち着けおちつけ

深呼吸をしようか」

リヴィ「あ ああ…」

4 4 1 6 に促され ゆっくりと深呼吸をする

施設内故に あまり気の良くなるものではないが 心を落ち着か

せるには充分だった

4 4 1 6 「落ち着いたか？」

リヴィ「少しは 気が楽になつたような…」

4 4 1 6 「ちなみに リヴィが見た顔つて

こ ん な 顔 だ っ た ？」グイッ

手で顔を覆い隠したかと思えば そこにはロミオと同じ 何も無

い顔になっていた

リヴィ「」

またもや思考が停止する

リヴィ「ひやああああ!!」ダッ

脇目も振らずに走つて行く

このまま突き進んでしまえば行き止まり

その前に どこかに隠れねば と無意識に考える

リヴィ「ハッ…ハッ…ハッ…：…！」

全力で走り 偶然開いていた部屋に逃げ込む

ナナ「ありや リヴィちゃん どうしたの？」  
リヴィ「せ 説明はあとでする！」

今は… 今は匿ってくれ…！」

ナナ「いいよー」

快く了承し 扉を閉める

リヴィ「ハア…ハア…」

隊長やロミオが訪ねてきても 居留守を使ってくれ… 頼む…」

ナナ「いいけどー 何があったの？」

リヴィ「そ それは…」

<コンコン

リヴィ「!!」

咄嗟にナナの腕を引き寄せ 口を塞ぐ

ナナ「んー むぐー」

リヴィ「……………」

ひっそりと息を殺し 石像のように動かずに待つ

<コンコンコン

リヴィ（……………頼む 行ってくれ…）」

ナナ「んーむー」

たった数秒が 長い時k

<……………

ノックの音は止み 足音が遠ざかっていったのを確認した

リヴィ「ふう… すまない ナナ」

塞いでいた口から手を離れた

緊張が切れ 床に座り込む

ナナ「ぷはー いいのいいのー」

リヴィ（一時はどうなるかと思っただが…

これが夢であってほしい…）」

ナナ「それで 何があったの？」

リヴィ「ああ 実は…」

ここで口が止まってしまう

リヴィイ(待てよ… 起こった出来事を話してしまつたら またあの  
ような状況に…)

のっぺらぼうのことを話すと こんな顔かと再確認させられてし  
まう

そう考えてしまい 言葉が詰まる

ナナ「んー？」

リヴィイ「…すまない 訳あつて話せない……」

ナナ「…もしかして リヴィイちゃんが逃げてきた理由って……」

リヴィイ「!!」ビクツ

背筋が強張るのがわかる

腕が震えるのを全身で感じる

頭から血が下がっていく

足が動かそうにも 硬直したように動かない

リヴィイ(あ… ダメだ… もう…)

意識が 思考が 身体が 諦めかけた

ナナ「アリサさんとユノちゃんの試食会に巻き込まれそうになつた  
からとか？」

リヴィイ「……え？」

ナナ「いやあー あの2人ね お料理があんまり上手じゃなくて  
毎回誰かが倒れてるらしくって」

人の事を言える立場ではない

ナナ「隊長は被害者を増やそうとしてムリヤリ食べさせるらしい  
よー

んで 隊長も興味本位で食べて 一緒に倒れちゃうの」

リヴィイ「あ ああ そうだ

その試食会から逃げてきたんだ…」

ナナ「隊長が言うには『ラーヴァアナとマガツキユウビを混ぜたよう  
な味』だって」

リヴィイ「そうか…」

とりあえず アリサとユノの試食会から逃げたということにした  
リヴィイ

しかし 目先の問題は解決したが 肝心のつぺらぼうは現状どうしようもない

リヴィ(…ただ あれが見間違いでなく事実だとしたら 今頃騒ぎになつてる筈……)

くコンコン

リヴィ「!!」グイッ

ナナ「んむっ んー」

ノックが聞こえた途端 またも咄嗟にナナの腕を引き寄せ 口を塞ぐ

ジュリウス「ナナ いるか？」

次の任務のミーティングが始まるぞ

リヴィ「…ジュリウスか

重ね重ねすまない」パツ

ジュリウスだとわかると 口を塞いでいた手を話す

ナナ「ふいー はいはーい」

リヴィ(…だが 油断は禁物だ)

ドアを開けた先には ジュリウスしかいない

当然 異変はない

ジュリウス「…む リヴィ

顔色が優れないようだが」

リヴィ「…何でもない いや…

少し 頭痛が…」

仮病をつかうのは少々心苦しいと思いつつ 頭痛がすることにした

ジュリウス「そうか… 今日とは自室で療養するとい

あとで隊長に申しておく」

ナナ「じゃあ 私が部屋まで送ってあげるー!」

リヴィ「ああ… すまない…」

ジュリウス「ナナ あまり遅くならないように」

ナナ「はいはーい」

ジュリウスが反対の方向へ歩いていくのを見たあとに ナナと一



あの時の恐怖が脳裏に浮かび上がる

しかし また卒倒しそうになるも 気力でなんとか堪えた

シエル「隊長から リヴィさんが目覚めたら伝えたいことがあると  
…」

4416 「入るお」ヌツ

いきなり断りもなく入ってくる4416

顔はのっぺらぼうではなく いつもの何ら変わらない顔である

リヴィ「……なんだ？」

4416 「これを見てくれ コイツをどう思う？」

そう言つて 文字が書かれたプラカードを見せた

プラカードには

『ドツキリ大成功！』

と書かれていた

4416 「どや？ビツクリした？」

あの迫真の演技 何度も練習した甲斐があったというものよ

ギル「ドツキリ……？どういうことだ……？」

4416 「ほれ こののっぺらお面の完成度の高さ！

2人分作るの 骨が折れたよ」

シエル「えつと…… 話が見えてこないのですが……」

リヴィ「……」スツ

そつと立ち上がり 4416の前へ歩み寄る

リヴィ「……っ！」（無言の腹パン）

4416 「ギラフアツ」ボゴオ

重い音と共に拳が腹にめり込んだ

そしてそのまま倒れ 動かなくなる

リヴィ「……勝手ながら 今日1日は休ませてもらう……」ツカツカ

倒れた4416を無視し 病室を出た

それと入れ替わるようにロミオとナナ ジュリウスの3人が入っ  
てきた

ロミオ「な なんか怖い顔して出てったんだけど……」

ナナ「隊長 これも作戦通りなの？」

ギル「おい… お前らは何か知ってるのか？」

ジュリウス「知っているというよりかは 加担しているといった方が正しいな」

シエル「あの… 隊長がさつきから動かないんですが……」

4 4 1 6 「」

4 4 1 6 「またコイツに助けられたぜ」スツ

そう言って懐から 拳の痕がついた真空パックのハンバーグを取り出した

ギル「またって 以前にもあったのか？」

4 4 1 6 「いや？」

ギル「おい」

シエル「隊長 リヴィイが倒れた原因について知っていることがあれば……」

4 4 1 6 「うん 話すよ

というか元から話すつもりだし」

4 4 1 6 は一連の出来事だけでなく それに至る経緯も話した

ギル「……どこから突っ込めばいいのか……」

4 4 1 6 「ちなみに自分でもビビるくらいに計画通りに進んだからなあ」

ロミオ「エレベーターに逃げ込むのも？」

4 4 1 6 「もち」

ナナ「私の部屋に入ってくるのも？」

4 4 1 6 「Yes」

ジュリウス「リヴィイに殴られるのも」

4 4 1 6 「計画通り（震え声）」

シエル「声が震えていますよ」

4 4 1 6 「殴られたのも計算の内

何故かって？」



誰もそんなことは聞いていない

4416 「そう！ハンバーグは

パンチが重要だからね」

＼デエエエエン／

4416 「ハンバアアアアアグ!!」

ナナ「？」

4416 「しかしまあ どないしようか」

ギル「そりや怖い思いをした上に 笑い者にされたも同然の扱い…

怒るのも当然だ」

ナナ「やっぱりちやんと謝るしかないよね…」

ロミオ「せめて何かお詫びとかもした方がいいよな」

どうやって謝るか 如何にしてお詫びをすべきか

まともな提案が出るよりも前に

ジュリウス「隊長を好き放題にできるというのはどうだろう」

4416 「フアツ!？」

とんでもない提案が出される

シエル「好きにさせるといふと 新バレットの共同開発 動物とのふれあい あんなことやこんなことを…」

4416 「いやいやちよと待てちよと待て！」

ギル「ハハツ そいつはいい

身をもつて味合わせるのが1番だな」

ナナ「ほえー 大食い競争 こんなこととかねー」

ロミオ「好き放題 ねえ…」

ジュリウス「一緒にTOKIOを目指す共に手を取り合うのも悪くない

隊長 リヴィの件は任せた」

4416 「任されるのはともかく 丸投げは非情じゃないスか!？」

なんで自分1人で…」

ギル「事の発端はあんただろう？」

だったら責任は隊長にある ただそれだけだ」

ロミオ「さあさあ 俺達の用は済んだし」

ナナ「そろそろ自由にしてもいいよね？」

4416 「さりげなく逃げるな共犯者めえ！」

シエル「隊長 男ならしつかり責任を取りましょう！」

リヴィイを傷物にしたのは君なんですから」

4416 「誤解されるような言い方やめて！」

局長に八つ裂きにされる！」

なんやかんやで 1人でリヴィイに謝ることが決定してしまった

---

「リヴィイの部屋」

リヴィイ「……………」

ベッドの上で縮こまるリヴィイ

僅かに身体が震えている

＜スミマセーン アケテクダサーイ

リヴィイ「…何の用だ？」

＜アヤマリニ キマシタ

リヴィイ「…………開けないと言ったら？」

＜メシドキマデマチマース

リヴィイ「……………」

無言でドアのロックを解除する

その際に 予め拳に力を入れておく

開口一番 謝罪でなければもう1度殴ると心に決めたと同時に

ドアが開いた

4416 「誠に申し訳ありませんでした」

リヴィイ「……………」

謝罪の声は聞こえるが 姿が見えない

4416 「この度 お詫びと申すには心許ないですが 自分<sup>わたくし</sup>めを御

自由にしていただいて構いません」

声のする方向 下を見ると 額を地面につけて土下座をしていた

リヴィイ「そ そうやって また私を怖がせる気だろう…」

顔を見せてないということは そうなんだろう…」

4416 「……………」

リヴィ「……………」

4 4 1 6 「許じてくださいいいいい!!」

お”願”い”じ”ま”ず”う”う”!”」

突然顔を上げたかと思えば 涙で濡れた顔で許しを乞うてきた

リヴィ「うるさい」バキッ

4 4 1 6 「ぬわーっ!!」

リヴィ「…とにかく 反省していることはわかった

わかったから顔を拭いてくれ」

そう言つてハンカチを差し出す

4 4 1 6 「スマンね… すまないねえ…」ゴシゴシ

リヴィ「それで その… 自由にするとするのは…?」

4 4 1 6 「うん つまり『許してください!何でもしますから!』つてこと」

リヴィ「何でも?」

4 4 1 6 「うん」

リヴィ「…本当に好きにしてもいいのか?」

4 4 1 6 「もちろんさあ

ドナ○ドはお喋りがだあい好きn」

リヴィ「なら 1つ訊かせてほしい…」

不安気な眼差しでこちらを見つめる

リヴィ「なぜ 私にあんなことを…?」

4 4 1 6 「ドツキリを仕掛けた理由?それはだな…」

リヴィ「……………」

4 4 1 6 「特にない」

リヴィ「!?!」

4 4 1 6 「強いて言うなら 第一のターゲットがリヴィだったってこと」

リヴィ「…ということは 他のターゲットにも仕掛けるつもりだったのか?」

4 4 1 6 「さあ?」

リヴィ「……言ってる事が滅茶苦茶だ」

4 4 1 6 「いやね 途中までは単にリヴィを怖がせるだけだったんよ

でも 隊長さんの提案でドッキリ化してしまったという」

元凶は4 4 1 6だが ドッキリはジュリウスの仕業という謎の展

開

リヴィ「…質問を変える

なぜ 私を怖がらせようと…？」

4 4 1 6 「それはだな…」

4 4 1 6 「もっと仲間を頼ってほしいから」

リヴィ「！」

4 4 1 6 「ほら 恐怖を覚えれば他人に頼るかなく みたいな

ナナの部屋に逃げ込んだのは ナナに頼ったようなモンだし」

リヴィ「…：そうか そういうことか」

4 4 1 6 「献身的なのは別にええよ

袖口直したりとか袖口繕ったりとか あと袖口なんかも」

袖口ばかりである

4 4 1 6 「ただね その行動がどうも 皆に嫌われたくないから

やってる という風に捉えられなくもないんよ

別にちよつと粗相した程度で距離とったりはせんよ」

無駄に真剣な表情で諭す

リヴィ「…嫌われたくないから…：か…：」

そういう風に考えてるつもりは無かったが…」

4 4 1 6 「旅は道連れ 死なば諸共

地獄の沙汰も金次第イイ」

真面目かと思えばふざけ倒し その上最後のは意味が全く違う

4 4 1 6 「自分なんて余程のことがない限り あちこちに迷惑かけてしもてるからなあ

今回のドッキリ事件もそうだし」

リヴィ「…1ついいか？」

4 4 1 6 「いいぞ。」

リヴィ「頼つてほしいのなら 何もわざわざ回りくどいことをする必要はあったのか？」

直接言えばいいだけだろう」

4 4 1 6 「んなこと正面切つて言えるワケないじゃん

ほら『皆を頼つてもいいか？』って聞くようなモン」

リヴィ「…それもそうだな」

4 4 1 6 「そんなワケでだ

もーつと自分に頼つてもいいのよ?」

甲高い声で迎え入れるポーズをする様は 紛うことなき変態である

リヴィ「…フフツ」

4 4 1 6 「さあ どんな望みも叶えてやろう

今の自分は 阿修羅すら凌駕する存在だ!」

リヴィ「そうだな… では……」

翌日

「ラウンジ」

4 4 1 6 「つみです」

キグルミ「……」パタパタ

リヴィ「こんなに圧倒的な差をつけられるとはな

囲碁で勝負を挑むも あっさりと負けた4 4 1 6

4 4 1 6 「いやまあ 自分 囲碁は得意じゃないですしいく?」

だから負けるのは必然的ですか?」

リヴィ「だったらなぜ 自分から勝負をふっかけたんだ」

4 4 1 6 「キグルミならルールすら知らないだろうと思て」

リヴィ「……」

キグルミ「……」スツ

キグルミは一枚の厚い紙を取り出した

4 4 1 6 「ん?表彰状?なにになに……」

全国囲碁大会 準優勝： 準優勝!？」

キグルミ「……………」キラン

さらに 銀色のトロフィーも取り出す

4416 「え… トロフィー…?」

全国チェス王決定戦 準優勝： これも!？」

キグルミ「……………」ピカー

さらには黄金に輝く盾も

4416 「盾まで… どうせ準優勝だろ…」

将棋同好会本部主催 全国大会優勝： 優勝!？」

キグルミ「……………」グツ

自慢げにガッツポーズをする

4416 「お前は羽○善治か何かか!

ボードゲーム強えな思ったら!」

リヴィ「フフ…」

4416 「…よし じゃあその強さは認めてやらんでもない

だが 自分にも譲れないものはある…」

やたらと上から目線である

4416 「それは! 五目並べだ! これだけは簡単に負けん!

散々悩ませた拳句に負けてやる!」

負ける前提なのか

リヴィ「…隊長 何か食べたい物はないか?」

4416 「ん? んじゃあ コーヒーとぱり○こ」

リヴィ「他にはないか?」

キグルミ「……………」パタパタ

4416 「みたらし団子を所望するってさ」

リヴィ「わかった すぐに持ってこよう」タツタツタツ

4416 「ゆつくりでいいぞ

って もう行っちゃった」

キグルミ「……………」

4416 「よおしキグルミ 始めようじゃないk」

ナナ「たーいちよー 昨日はちゃんと仲直りできた?」

絶妙なタイミングで間に入ってきたナナ

4416 「うん できなかったら ああやって喋ってないぬら」

ナナ 「それもそうだね」

4416 「しかも あ好きにさせるとは言ったものの 内容がリ  
ヴイラしいというか…」

ナナ 「ほほう？その話 くわしく…」

4416 「んー 言ってもいいモンなのかね… まいっか

その内容ってのは…」

ナナ 「うんうんっ」

『もっと私を頼ってほしい』

— 終 —

## グボログボロ神属代表 魚淵ドログ

### 「訓練室」

4 4 1 6 「ついに… 遂に完成してしもた…」

室内で掲げている神機は 黄金に輝いている

4 4 1 6 「なんというか 達成感よりも 何とも言えん悲壮感が…」

黄金魚鱗扇

黄金食砲

黄金龍大甲

こんなの作ってどうする

4 4 1 6 「…これからどうしようか」

試し斬りに行くか 保管庫に誇らしげに飾るか はたまたこれを使つてもう1セット分の素材を取りに行くか

4 4 1 6 「…ま 試し斬りかな」

そう言い 神機を軽く振り回した

ウオオッ！

4 4 1 6 「ん？」

神機を振り回すと同時に 声が聞こえた

4 4 1 6 「……………」ブンブン

多少 強めに振ってみる

ウギヤアアア！！

やはり 声が聞こえる

4 4 1 6 「……………」ガンガン

今度は 刀身を床に打ち付ける

イタイイタイイタイ！！ モウヤメロオ！

4 4 1 6 「…思いつきり喋ってるなあ」

神機「さつきから何すんねん！」

4 4 1 6 「いやあ まさか神機が喋るワケねえよなあ と思つて」



神機「ワイかて好きで喋つとるワケやないねん！」

てか これどないなつとん!？」

4416「や 自分にきかれても…」

神機「…っか お前さん 見たことあんで！」

あん時のふざけ倒しまくつたヤツやん！」

4416「え？」

神機「覚えとらんかあ？」

夢ん中に出てきた 黄金の…」

4416「ああ あの時の金 グボログボロ黄金 魚か

ゴールド鰐山だつたっけ？」

ドログ「なんやねん その芸名みたいな名前は！」

ちやうちやう！魚淵ドログや！」

4416「あー そんな名前だつたかー

惜しかったなー」

ドログ「どこがや！」

一文字も合つとらんやんけ！」

4416「いや「ド」だけ合ってるぞ」

ドログ「んな揚げ足取りはええねん！」

4416「すまんな

んで なんで自分の神機に憑依しとるんだ？」

ドログ「そんなん コツチがききたいわ

てか これ作るために グボロ黄金 またワイらを狩つたんか!？」

4416「いんや 何故か高純度金が1個しか必要無かつたんだな

これが」

ドログ「ああ そうなんや…

んなら ええわ」

4416（いいのか）

ドログ「そんで どないすりやええんや…」

4416「そうだなあ コンビ名をどうするか」

ドログ「漫才の話やないねん！」

仮に組んだとしてもお前さん 腹話術や思われんで!？」

4416 「そうか そうだな

んじや 二重人格という設定で…」

ドログ 「それ腹話術と んな変わらんやん!

てか コンビ組むん前提で話進めんなや!」

4416 「えっ!?ダメ!」

ドログ 「むしろなんでOKや思ってたんねん!」

4416 「だって 的確にツツコミ入れてくれるじゃん

これを生かさない手はないっしょ」

ドログ 「…とにかく!コンビとかは組まへんからな!」

4416 「はいはい」

ドログ 「…で 話戻すんやけど どうやったら戻れるんや?」

4416 「だから んな事きかれたって 自分もわからんよ」

ドログ 「はあ… よりにもよって コイツと…」

せめて もうちよい静かなヤツのがよかったわ」

4416 「穏やかじゃないですか?」

ドログ 「せや

自覚あるんかいな」

4416 「まあ いきなり神機が喋りだしたら 穏やかも何もない

わな」

ドログ 「それもそやな」

4416 「……………」

ドログ 「……………」

両者共に沈黙するが そんな状態が長く続くはずもなく

4416 「へくん けい!」ガキヨン

ドログ 「おわあっ!」

神機を剣形態から銃形態へ切り替えた

4416 「変形は問題なし」

ドログ 「いきなり何や!」

せめて一声かけえや!」

4416 「変形しました」

ドログ 「いや 今言うなや!」

4 4 1 6 「ア〜ンド ファイアー！」ボウ

ドログ「わあっ！火い噴いた！火い噴いた！」

4 4 1 6 「お前らも火は噴くじゃん」

ドログ「あ ああ そやったな…」

つて だから先に言え 言うたやろ！」

4 4 1 6 「次は氷の放射を噴くぞ」

ドログ「だから今更言うな…つて ああ 普通に言うんかい」

4 4 1 6 「ファイアー！」ヒュオン

ドログ「いや 氷やのにファイアーて どういうこつちや!？」

4 4 1 6 『『ファイア』には『撃て』つて意味もあるんだぞ」

ドログ「ああ そうなんや…」

お前さん 物知りやなあ」

4 4 1 6 「んじゃ次は 雷だ

『いかづち』よ！『かみなり』じゃないわ！」

ドログ「おう なんや いきなりキモい声出しおつて…」

4 4 1 6 「フリーズ！」バリバリツ

ドログ「そこファイアちゃうんかいな!？」

なんでフリーズなんや!？」

4 4 1 6 「落雷とフリーズが合わさり 最強にみえる」

ドログ「なんのこつちや!？」

4 4 1 6 「からの神倒力 神キラー！」キュオン

ドログ「油断してたらこれや！

いきなりはやめーや！」

4 4 1 6 「さて 射撃に関しては問題無しだな

まあ んな使わんけど」

ドログ「じゃあ なんて試したんや」

4 4 1 6 「オイオイ 絶対に使わないつて事がない以上 確認しと

かないといかんでしょ」

ドログ「はあ そこだけはしつかりしとるんやな」

4 4 1 6 「んじゃ 次は装甲だ

へ〜んけい！からのて〜んかい！」ガキヨムキン

ドログ「ん？なんやこれ」

4416「これで敵の攻撃を防ぐ事ができるのだ

：なんで知らないんだ？」

ドログ「いや 見たことないし」

4416「ああ そうか

金魚は攻撃する前にやられるからな」

ドログ「せや

しかし 便利やなあ」

4416「ところがそうもいかないんだな

銃形態だとガードできなかつたり 耐える力が無いと吹っ飛ばされたり」

ドログ「はえー」

4416「あと メテオがガードできない」

ドログ「メテオ？」

4416「そ メテオつつーバレットがあるんだけど

凄まじい威力と範囲を持つ爆発に仕立てあげるバレットの事で」

ドログ「ほう」

4416「範囲があまりにも広すぎて 味方も巻き込みまうという欠点があるんよ」

ドログ「なんやそれ…」

4416「あと 強すぎて 被害が逆に増えるつつーことで 基本的に使用は禁止されてるな」

ドログ「なんちゅーモン作つとんのや…」

4416「爆発を組み込んだ弾が落ちてくる様と 着弾地点のクレーターから メテオと名付けられたそうな」

ドログ「：お前さん それ使ったことあるん？」

4416「実はある」

ドログ「はあ!？」

4416「といつても Mサイズの爆発だから 本場メテオと比べると 2ランクダウンしてる」

ドログ「だからといってなあ…」

4 4 1 6 「しやーない

ラーヴァナ  
赤い彗星 苦手なんぞな」

ドログ「せやったら 仲間に協力してもらったらええやんか」

4 4 1 6 「協力してもらったよ

誤射姫ことカノンに」

ドログ「？」

4 4 1 6 「そう だいたいあんな感じで…」

---

4 4 1 6 「カノンよ

このバレット使ってくれ」

カノン「あっ はい！わかりました！」

4 4 1 6 「合図をしたら 撃ってくれ」

カノン「？ ……了解しました！」

4 4 1 6 「ああ ついでに…」

4 4 1 6 「てえええー!!」ドーン

カノン「は はい！」ドーン

ラーヴァナくオギヤアアアア

4 4 1 6 「カノン！今だ！」

カノン「え!?!えーっと

ぱ パワーをメテオに！」

4 4 1 6 「いいですとも！」

ボゴーン

4 4 1 6 「ぬわーっ!!」

ラーヴァナくアビヤアアアア

---

4 4 1 6 「…って具合に」

ドログ「たったそんだけのために!?!

何考えとんねん！」

4 4 1 6 「いいじゃん 別に」

ドログ「良くないわ！」

4 4 1 6 「さて 確認も済んだことだし 早速試し斬りに行くぞー  
！」

ドログ「人の話聞けや！」

4 4 1 6 「え？人？」

どこに人間がいるんだ？」

ドログ「んなしよーもないことはええねん！」

4 4 1 6 「レッツゴー」

ドログ「だーかーらー！」

——20分後

「神機保管室」

4 4 1 6 「ダメした」

ドログ「あんなグダグダな戦い 初めて見たで」

4 4 1 6 「師<sup>ウロツオロス</sup>範のあの回転 どうにかなんないかな

出が速いし範囲広いしで 見てから回避もガードも余裕じゃない」

ドログ「それ以前に お前さん踏まれすぎやろ！」

「どんだけ近付くねん！」

4 4 1 6 「B Aが斬鉄だからね

仕方ないね」

ドログ「せやからて もうちよい距離あけえや

斬鉄だか近鉄だか知らんけど」

4 4 1 6 「自分の辞書に『後退』の二文字は無い！」

ドログ「お おう…」

4 4 1 6 「距離をあける時は ちゃんと敵に背を向けて走るぞ」

ドログ「後ろ向きで移動せえへんだけかい！」

4 4 1 6 「コケたら危ないジャン」

ドログ「敵に背エ向ける方が危ないわ！」

リツカ「：ねえ さつきから1人で喋ってるけど どうしたの？」

4416 「ん？このジパング竜田と コントしてるんだけど」

ドログ「だからなんで芸名みたいな名前やねん！」

魚淵ドログや言うとするやろ！」

4416 「コントは否定しないのな」

ドログ「コントでもないわ！」

4416 「相変わらず キレのあるツツコミ

やつぱり自分たち いいコンビになれるジャン」

ドログ「なるかアホ！」

リツカ「えーつと：： 少なくとも私には 君1人の声しか聞こえな

いんだけど」

4416 「うっそお」

リツカ「そのジパング竜田というのは」

ドログ「魚淵ドログやー!!」

4416 「魚淵ドログだつてさ」

リツカ「：その魚淵ドログというのは 君の神機のこと？」

4416 「イエース

ある日のこと 神機使いが神機を掲げると 神機が喋るよう  
になつていた」

リツカ「んー なるほどねえ」

ドログ「ところで この嬢ちゃんは誰や？」

4416 「よくぞ聞いてくれました！」

神機のことなら彼女にお任せ！

その名も 楠リツカちゃん！」

ドログ「なんで んなハイテンションなんや」

4416 「かわいいジャン」

ドログ「はあ ワイには人間なんて 皆同じに見えるからなあ」

4416 「逆もまた然り」

ドログ「否定でけへんなあ」

リツカ「何の話をしてるのは分かんないけど：

君の神機が人格を形成したのは たぶん…」

4 4 1 6 「『喚起』の能力によって知能を持った ってところ？」

リツカ「そういうこと」

4 4 1 6 「んー でもその可能性は低いなー」

リツカ「どうして？」

4 4 1 6 「実はな コイツ夢中で会ったことがあるんよ

金魚の姿で」

ドログ「あれは悪夢やったわ…」

4 4 1 6 「そいつ曰く『他の神機使いの夢の中にも出てる』

『夢の中に入れる能力を持っている』ってワケ」

リツカ「これはまた 不思議な…」

でも ちよつと面白そうだね♪」

ドログ「ワイら乱獲撲滅運動の為にやっとするんや！

あちこち行って同じこと言うワイの身にもなってくれや！」

4 4 1 6 「まあ『人格を作った』というより『神機に憑依した』という方がしつくりくるな」

リツカ「例を見ない 新たなパターンだね

もとより人格を持つこと自体 極稀なんだけど」

4 4 1 6 「でも 憑依されるにしても 心当たりはないんだよなあ

金魚も最近ほとんど狩ってないし」

ドログ「そーいやこの前 でかい艦の上をフラフラくつと歩いとつたら 急に意識が無くなったんや」

4 4 1 6 「それっていつ頃？」

ドログ「いやさすがに時間わかるわけないやん

あー でも近くに赤い人型のアラガミがおったなあ」

4 4 1 6 「赤い人型のアラガミというと 神機兵だな

んで 艦の上か」

ドログ「なんや ワイを見た覚えでもあるんか？」

4 4 1 6 「あー 三日前にジャマになりそうな金魚を狙撃した覚えが」

ドログ「お前さんの仕業かい！」



4 4 1 6 「神機兵を相手にしながらも 素材はちゃんと回収したつた」

リツカ「つまり 捕喰した際にそのアラガミの人格が転移したってことになるのかな」

4 4 1 6 「かもしれないね」

ドログ「ちよい待ちいや

そやったら なんで今まで記憶も意識もなかったんや?」

4 4 1 6 「んー なぜ遅れて人格が表面化したか…

なんでだろ」

リツカ「アラガミには まだまだ未知の部分がたくさんあるからね  
今考えても 正しい答えは見つからないかな」

4 4 1 6 「んーむ ま 一旦パーツを換装してから考えるお

いつものハンマーでおね」

ドログ「え? それ ワイ大丈夫なん?」

4 4 1 6 「さあ?」

ドログ「さあ!」

リツカ「いつものというと 激重ハンマーかな?」

4 4 1 6 「Yes」

ドログ「いや待てやああ!!」

カーンカーンカーン

4 4 1 6 「聞こえるか? 金閣ニシキゴイー」

リツカ「今は休眠状態だから 聞こえないんじゃないかな」

4 4 1 6 「そか んじゃ 部屋でのんびりするズラ」

リツカ「何かあったら報告するから

じゃあね」

4 4 1 6 「スピードワゴンはクールに去るぜ…

ハンバアアアーグ!!」スタコラサツサ

「創痕の防壁」

4 4 1 6 「激重ハンマーで神殺は浪漫

これ 重要」

カレル「叩く前も後も 隙がデカいのはどうなんだ」

4 4 1 6 「効率を求めるのはナンセンスッ！」

シユン「声でけえ」

4 4 1 6 「あ でもスキルは防御捨てて攻撃に特化してるから

一撃のダメージは激重すら」

ジーナ「お陰で あまり発散できなかったのだけど…」

4 4 1 6 「スママセン」

カレル「…まあ お前がいなけりや ここまで早く倒せることはなかった

その点は評価してる」

シユン「もつと素直になりやあいいのに」

カレル「何か言ったか…？」ギロツ

シユン「何もく」

ジーナ「またくだらないことでケンカしちやって」

カレル「喧嘩じゃねえ」

4 4 1 6 「せやな」

シユン「ところでさ お前 アラガミ相手してる途中でなんか呟いてたけどよ

なんて言ってたんだ？」

4 4 1 6 「えーっと 確か…」

『正義の鉄槌で 断ち切る！』だったな」

シユン「…断ち切る？」

4 4 1 6 「そ 断ち切る」

シユン「ハンマーで切るって おかしくね？」

4 4 1 6 「うん

ダメだったよ」

シユン「当たり前だ」

カレル「…そろそろ戻るぞ」

ジーナ「そうねえ 美味しい物でも食べないと 気が晴れないわねえ」

4 4 1 6 「んだらば 自分の秘蔵のレトルトカレーでも…」

「神機保管室」

4 4 1 6 「リツカちゃんやー」

リツカ「やあ おかえり」

4 4 1 6 「ちよつと聞いとくれ

例のインゴット鳥谷なんだけどサ」

リツカ「喋る神機のこと？」

4 4 1 6 「イエス

そやつが一言も喋らなくてサ」

リツカ「んー 一言も？」

4 4 1 6 「だいたいはキレのあるツツコミが入るんだけど

何度かボケたのに 反応しなくてサ」

リツカ「なるほどねえ」

4 4 1 6 「やつぱ パーツ変えたのがマズかったんかね？」

リツカ「だったら元に戻してみる？」

4 4 1 6 「レッツ トライ」

4 4 1 6 「聞こえるかー？ 大判ヒレカツー」

ドログ「いつになったら名前覚えんねん！

原型留めてへんやないか！」

4 4 1 6 「おー 安心と安定のツツコミ

あと『お』だけはあってるぞ」

ドログ「だから んな揚げ足取りはええって言うとるやろ！」

4 4 1 6 「揚げ足じゃない ヒレカツだ」

ドログ「そういう意味やないねん！」

リツカ「えっと 元に戻った…のかな？」

4 4 1 6 「戻った戻った」

やっぱツツコミがないと」

ドログ「お前さんには言いたいことが山ほどあんで！

まずなあ ワイのk」

4 4 1 6 「しかし 黄金じゃないと喋れないって どういうことだろ」

リツカ「考えられる可能性としては コアが適したパーツを媒体に声を発しているか

もしくは パーツそのものに人格が憑依しているかの2つかな」

4 4 1 6 「ほほう」

ドログ「無視すんなやー！」

リツカ「でも 仮に仕組みがわかったとしても…

何に役立てられるかなあ」

4 4 1 6 「んー 神機もアラガミみたいなものとかなんとかだから

アラガミとのコミュニケーションがとれたりとか？」

リツカ「なるほどね…！」

アラガミと触れ合える…！いいかもしれない！」

4 4 1 6 「…：…こういうパターンって 決まって『主人公補正』が為せる技で

実用化はともかく普及は無理だわな」メタア

リツカ「夢がないね」

4 4 1 6 「ややこしい設定増やしたくもないし」メタア

ドログ「…：…」

4 4 1 6 「ま それはともかくだ

コイツの声が聞こえるスピーカー的なのを作ってちょよ」

リツカ「んく さすがにその注文はキビシイかな」

4 4 1 6 「そこはまあ『喚起』でパパツと物にすればいいだけだし」

リツカ「簡単に言うね」

4 4 1 6 「そりゃ 前例ありますから」

リツカ「それもそっか

それじゃ テキトーに作ってみるよ」

4416 「頼みます」

ドログ「…もう 言うだけムダやな……」

——四日後

「ラウンジ」

4416 「おうああああ!!」

ビン装填中にこっちくんなあああ!!」

エミール「む！仲間のピンチ！

ここで生命の粉塵を使わず どこで使うと言うのだ！」カ

チカチ

エリナ「ちよつと待ってよ！先輩を助けるのは私なんだから！」カ

チカチ

コウタ「……………」(無言の閃光玉)

4416 「ふう なんとか致命傷で済んだ」

コウタ「致命傷でダメじゃん」

エミール「皆を鼓舞する唄を奏でる！」

エリナ「今のうちに砥石を使つところつと」

4416 「強撃ビンを調合するぬら」

コウタ「なんで誰も攻撃しないんだよ！」

4416 「そろそろ捕獲可能になるハズだが…

エミール どうだ？」

エミール「向こうはまだ闘志が感じられる

敵ながら天晴だ！」

エリナ「そんなことはいいから頭叩いてよ！

ずっと笛吹いてばかりで ちつとも攻撃してないじゃない

！」

コウタ「そういうエリナも ガードしてばかりで全然攻撃してない  
じゃん」

4416 「と 溜め3外してばかりのコウタが申しております」  
コウタ「仕方ないだろ！」

そういうお前だつてすぐ瀕死になるクセに！」

4416 「被ダメはともかく 与ダメは断トツなんですすがそれは」  
コウタ「ぐっ…！」

エミール「む！逃げる気か！

敵前逃亡など 騎士にあるまじき愚行!!」

エリナ「別に騎士じゃないし」

4416 「あー うん 当たらん 届かん」

コウタ「はあ… 結構グダグダなあ」

4416 「そりゃ 3rdだからね

最近のと比べりゃ 派手には動けないし」

エリナ「逃げられちゃったかあ

久々だから操作が慣れないや」

エミール「例え僕は どんな逆境に置かれていても

決して諦めはしない！」

コウタ「凍土なのにホットドリンク忘れてくるて…」

4416 「これ ダークライのしわざです」

ちくわ大明神「やはりそうでしたか！」

コウタ「誰だ今の」

4416 「おいおい そこは『あつしがしたんじや ないでゲスよ  
』て返さないと」

エミール「持ち物を忘れたのは 確認を怠った僕の責任！

出撃前の確認は基本中の基本であるというのに…！」

4416 「ところでキバおつて ベリオロス あんなにタフかったっけ？」

コウタ「さあな」

4人で和気あいあいと 某ハンティングゲームをしていた  
リツカ「あつ いたいた」

4416 「ムッ リツカちゃん

何の用… というより まさかアレが出来たりして？」  
リツカ「そのまさかだよ

神機に予期していない機能をつけるのは さすがに骨が折れたよ」

4 4 1 6 「いやはや ご苦労様

無茶な注文に応えてくれて」

リツカ「気にしないで

むしろ楽しくて 寝る間も惜しんでたくらいだから」

4 4 1 6 「ほほう んじゃ後は自分の能力次第…

リツカちゃんのを努力をムダにするワケにはいかぬというもの

…!」

コウタ「…さつきから 何の話してるんだ？」

4 4 1 6 「とある日に

急に神機が

喋り出す

誰も聞こえず

もつたいなくね？」

コウタ「わからん」

4 4 1 6 「そうかな」ズア

エリナ「喋るって 神機が？」

エミール「これは面白い!まさか神機と会話ができるとは!

僕ですら ポラーシユターの僅かな動きを感じ取るの

が精一杯だというのに!」

4 4 1 6 「もちろん 幻聴とかじゃないぞ

幻聴だったらネタになんないし」メタア

リツカ「神機の整備は既に終えてるから 今からでも行けるけどどうする?」

4 4 1 6 「モチロン 行くに決まってるサ」

コウタ「え ちよつと ベリオロス コイツどうs」

4 4 1 6 「ちなみに一緒にオトモする?

『YES』か『GO』かでこたえて」

エリナ「もちろん行く!」

エミール「僕もお供しよう!」

コウタ「地味に拒否権が無え！」

―通常難易度11 『朽ちた高樓』―  
「嘆きの平原」

4416 「さあ リベンジだ」

ウロヴオロス<ウワ マタキタ

4416 「さてここでショートコント

『目』

コウタ「なんだいきなり」

4416 「なーなーフィツシユ竹中さんよ

ウロヴオロス

師範ウロヴオロスつてな 大抵のことは許してもらえるのが傲慢なんだつてさ」

ドログ「だから魚淵ドログやつちゅーねん

しかし なんで許してもらえるんや？」

4416 「簡単なことサ 師範は複眼ジャン？」

つまり『おおめ』に見てもらえるって寸法よ」

ドログ「なんやそれ！人当たりがいいとかやないんかい！」

4416 「まあ 目を付けられることはないかなー」

ドログ「逆にあんな巨体に目え付けられる度胸があるかつちゅー話や」

4416 「師範を初めて見ると だいたい目玉が飛ぶだろうしな」

ドログ「そりやそうやろ

あんな前にして 目え据える方がオカシイわ」

4416 「あ あとな 師範は怒ると目の色を変えるんだけどさ」

ドログ「物理的にか？」

4416 「どっちも んでな

怒ると目を光らせるんだけど なんでかわかる？」

ドログ「さあ…？ 人間が相手やからちゃう？」

4416 「あのビームとか もうフアンタジーの方向でしょアレ」

ドログ「そっちの『目を光らせる』かい！」



4 4 1 6 「初めて見た時は目が奪われたよ」

ドログ「…まあ ビームとかは男のロマンって よく聞くっちゃあ聞くけど」

4 4 1 6 「視界も奪われたから その直後にあぼーん よ

目があ…！目がああ！つて具合に」

ドログ「目も当てられへんぐらいに情けないやん」

4 4 1 6 「ヒドイ目にあつたよ…アレは」

コウタ「…お前の声しか聞こえないから 何が何だかさっぱり」

エリナ「うん 私も先輩の声しか聞こえない」

エミール「僕にははつきりと聞こえる！

アラガミを相手に 我々人類と共に戦うという決意と覚

悟が！」

4 4 1 6 「やっぱすぐには聞こえないか

というより 何気にコントに付き合ってくれるのな」

ドログ「どうせ無視しても勝手に進めるやろうし 適当に合わせただけや

ところで アイツどうしたんや」

4 4 1 6 「ん？」

ウロヴオロス<メwwwwメガww ヒイイwwww

4 4 1 6 「めっちゃウケてる

師範は目ネタに弱いと…」

ドログ「というか 聞こえてたんやな」

4 4 1 6 「やっぱりコンビを… そうだな…

『16金』なんてコンビ名はどうだ？」

ドログ「なんやそのみみっちい名前は！

微妙すぎてどうツツコめばええねん！」

4 4 1 6 「んじゃあ『ゴールデン・ワイ』は？」

ドログ「お前さんの要素どこ行った!?

てかコンビは組まん言うたやろ！」

4 4 1 6 「ちえー だったらトリオで我慢してやるよー」

ドログ「2人がイヤな訳やないねん！

なんでお笑いの方に持ってこうとするんや!」

コウタ「:なあ そろそろ行った方がいいんじゃないや」

4416 「えー いいよ」

エミール「さあ! 燦然と輝くその闘志を!

僕に見せてくれ!」

エリナ「先輩に負けないように頑張るよ オスカー」

4416 「天! 空!」

ドログ「ごつつう飛んどるー!!」

背中届いとるがな!」

エミール「僕を忘れないでほしいな!」

コウタ「いきなりどうした」

エミール「む? どういうわけか 自然と声に出ていたようだ」

4416 「さすがに金魚剣じゃ あまりダメーシ入んないか

よし! エリナ アレを渡してくれ!」

エリナ「アレって 濃縮アラガミバレット?」

4416 「いや 首領パッチソード

出撃前に持たせたじゃん」

エリナ「ええ!?! そんなの持ってないよ!」

4416 「持たせたハズなんだがなあ

んじゃあ 何持ってる?」

エリナ「ネギならあるけど:」

4416 「おお! 首領パッチソードあるじゃねえか!」

エリナ(これ 首領パッチソードなんだ:)

4416 「よっしゃ! これがありやコツチのモンだぜ!」

ドログ「: : : : : んぞ

ツッコまんぞー!」

4416 「ぬわーっ!!」

コウタ「そりゃやられるに決まってる」

エミール「くっ… なかなかにしぶとい…！」

だが それもここまでだ！」

4416 「頭にドリル 右手にファイアの本

これでおっけーね」

ウロヴオロス<ダガムイミダ（^U^）

4416 「ぬわーっ!!」

ドログ「どうやって装備したんや」

コウタ「それ以前に どこから調達したんだ」

4416 「よし 終わった」

エリナ「ふう」

エミール「ハハハハ！これが僕らの力だ！」

コウタ「意外となんとかなるもんだな」

ドログ「はああ こんな倒すとか お前さん達スゴいなあ」

エミール「確かに 1人で挑むには厳しいが 仲間と力を合わせれば不可能は無い！」

4416 「SSS+の為だけに ソロで頑張る4416です」

エリナ「先輩 ムチャはしないでね？」

コウタ「さて 長居は無用だ

そろそろ帰るか」

ドログ「せやな」

4416 「あ そういえば コイツの声聞こえる？」

ドログ「そういや ワイの声を聞こえるようにするんが目的やったな」

コウタ「そういえばそうだったな」

エリナ「今のところは聞こえ… ん？」

エミール「僕には聞こえているとも！

強大なアラガミを前に屈しなかった その心意気を称え

r

ドログ「どや？聞こえてるか？」

コウタ「…聞こえるなあ」

エリナ「ホントに喋ってる…」

4416「おー よし これで正式にコンビが組めるな」

ドログ「お前さんただけ漫才やりたいねん！」

4416「えー ピンがええの？」

ドログ「ツツコミがイヤな訳やないんや！」

コウタ「なんで関西弁なんだ…？」

エリナ「しかもキレのあるツツコミ…」

「神機保管庫」

リツカ「お疲れさま どうだった？」

4416「ちゃんと皆にも聞こえるようになったぞ

これで忘年会のネタにも困らないぞ」

ドログ「ワイをパーティーグッズか何かと勘違いしてへんか!？」

4416「パーティーグッズ!そういうのもあるのか」

ドログ「だああ!余計なこと言わん方がよかった!」

リツカ「おー ホントに喋ってるね」

4416「腹話術とかじゃあないぞ

そうだとネタにならないからな」メタア

リツカ「まさか本当に物にしちゃうとはね」

4416「でも 皆に聞こえる前にコントしたせいで 実質練習み

たいなモンになってしもた」

ドログ「あのデカブツにはウケてたけどな」

4416「もっかいやる？」

ドログ「やらん」

4416「ショートコント『目』」

ドログ「やらん言うたやろ!」

4416「そんな目くじら立てんでも」

ドログ「サラツとやんな!」

リツカ「フッフ 君たち 良いコンビになれるよ」

4416「リツカちゃんからのお墨付き」

見る目あるねえ」ワツホイ

ドログ「無理矢理繋げてもワイはやらんで！」

4 4 1 6 「ええー 困るよそれ！」

コント出来ると思つて ブラッドのメンバーに招待状送つちやつたよ！」

ドログ「何で勝手なことやってんねん！」

4 4 1 6 「まあ ウソだけど」

ドログ「嘘なんかい！」

4 4 1 6 「しかしまあ このツツコミを活かさないのはネタ抜きで惜しい」

ドログ「ワイかてこんなナリやけど れっきとした生き物や

お前さんの都合に合わせる義理はないんや」

4 4 1 6 「そうか… 自分勝手ですまん」

ドログ「お おう… 素直に謝られると なんかこしょばいな…」

4 4 1 6 「親しき中にも礼儀ありつて言うだろ？」

これからは相棒的な『コンビ』として 仲良くやっついていこうぞよ」

ドログ「うーん… まあ その程度やったらかまへんで

よろしゅうな」

4 4 1 6 「ついでに」

ドログ「漫才はやらへんからな」

4 4 1 6 「(・ω・)」

## 喰べる！GE お料理ナビ

——某日 14:30

「ラウンジ」

エリナ「ねえ ムツミちゃん

お弁当のおかずって 何が良いのかな？」

ムツミ「お弁当のおかず？」

無難に玉子焼きとか ミートボールがいいんじゃないかなあ」

エリナ「うーん： 普通のでいいのかなあ：」

ムツミ「急にどうしたの？ お弁当を作らなきゃいけないの？」

エリナ「うん そうなんだけど： その：」

ムツミ「：もしかして ブラッドの隊長さんのため？」ニヤニヤ

エリナ「えっ!?!ち 違うよ！

いや 違わないけど違うの！えーっと：！」

ムツミ「隠したってダメダメ」

顔に書いてあるんだもん♪」

エリナ「ええーっ： そんなに顔に出てた：？」

ムツミ「顔に出なくてもバレバレだよ」

エリナ「うう：」

ムツミ「それで なんでお弁当を作るの？」

エリナ「うん： この前 先輩から 来週の休日に一緒に 聖域の畑の様子を見に行かないかって誘われて」

ムツミ「ふんふん」

エリナ「その： 話を詳しく聞いてみたら 私と先輩の2人だけで 行くらしくて：」

ムツミ「おおう」

エリナ「これって： もしかしなくてもデートだよね!?!」

ムツミ「2人つきりとなると： デート以外考えられないね」

エリナ「でも先輩だと ホントに畑の様子を見ただけで終わりそう  
で…」

ムツミ「それでお弁当を作って 是が非でもデートにしようって算  
段というワケなのね」

エリナ「：よくそんな言葉知ってるね」

ムツミ「お弁当作りは奥が深いからね！

私も協力するよ！」

エリナ「ありがとね ムツミちゃん」

ムツミ「まずは お弁当のおかずをリストアップしてみよう！」

エリナ「そうね： まずはさっきの玉子焼きとミートボールに」

ムツミ「タコさんウインナーなんかもいいかなあ」

エリナ「野菜も必要よね： ミニトマトやブロッコリーとか」

ムツミ「きんぴらごぼうという手もあるよ！」

エリナ「きんぴら：？聞いた事はあるような…」

ムツミ「あとはほうれん草の煮浸しや カボチャの煮付けも 彩り

のバランスに一役買うからオススメだね」

エリナ「なるほど 見た目も重要と：」

ムツミ「他にも ちよつと手間はかかるけど 筑前煮もいいかも」

エリナ「ちくぜんに：？」

ムツミ「極東の伝統的： な料理だよ！」

エリナ「さっきの間は何？」

ムツミ「ところでご飯はどうするの？」

エリナ「強引に話題変えたね」

ムツミ「さすがに白米だけだと味気ないかも」

エリナ「うーん： でも 混ぜご飯だと手間がかかるし：」

ムツミ「ふっふっふ そこで佃煮の でばんですよ」

エリナ「つくだに？」

ムツミ「具材を甘辛く煮込んだ料理で ご飯との相性もバツチリ！

ふりかけみたいなものだよ」

エリナ「うくん： ドリアみたいな感じ？」

ムツミ「ちよつと違うかなあ」

エリナ「でも ご飯と合うものかあ」

たまに梅干しがのってるのを見るけど アレってどうなん  
だろ？」

ムツミ「梅干しは好みが別れるかな」

ちなみに隊長さんは 梅干し単品を食べる派だよ」

エリナ「先輩は大丈夫なんだ」

私は1度食べたことあるけど アレは好きになれないか  
なあ……」

ムツミ「とつても酸っぱいからね」

私はハチミツ漬けの梅干しなら食べられるよ」

エリナ「そんなのもあるんだ…… 後で食べてみよ」

ムツミ「それはさておき 他の候補は——」

エリナ「やっぱり見た目を考えると——」

ワイワイガヤガヤ（約2名）

エリナ「ん…… いろんな候補が出たのはいいけど」

ムツミ「多すぎてまとめ切れないね……」

エリナ「もしかするとこの中に 先輩の嫌いな物もあるかもだし」

ムツミ「むう…… こうなったらリサーチするまで！」

エリナ「リサーチって…… どうするの？」

ムツミ「簡単なことだよ」

私がさり気なく訊くだけ！」

エリナ「それだと 何か企んでるのかバレそうな気が……」

ムツミ「ふっふっふ…… 私は皆のご飯をここで作ってるんだよ？」

「ご飯を食べに来た隊長さんに ご飯の話題を振るだけ！」

エリナ「なるほど…… 確かにそれなら怪しまれないね」

ムツミ「ではまた後日 ここで落ち合いましょう……！」

エリナ「……なんかスパイみたい」

キグルミ「…………！」ガタッ

エリナ「うわあっ！び ビックリしたあ……！」



…というか ずっとそこにいたの？」

キグルミ「……………」コクン

エリナ「…………じゃあ あなたは何も聞いていない いいね？」

キグルミ「……………」コクン

——同日 19:20

4416 「ハラヘツタ」

シユン「よお！お前もメシか？」

4416 「んだ」

タツミ「隣空いてるぞ」

ムツミ「今日もお疲れさま」

4416 「つべー タツミとムツミちゃんが1字しか違わねえ所為で紛らわしい

マジ つべー」メタア

シユン「おおー ホントだ

お前ら兄妹だったりすんのか？」

タツミ「そんなワケないだろお」

ムツミ「あはは… それで隊長さんは何が食べたい？」

4416 「そうだな… 疲れ気味だから サツパリしたもので

ムツミ「はい 少々お待ちを」

タツミ「あんたが疲れ気味って珍しいなあ

なんか強いヤツとでも相手してたのか？」

シユン「おう まだまだ実力不足ってところかあ？」

4416 「かもなあ ムダに手こずらせやがってなあ」

シユン「ふうくん」ニヤニヤ

4416 「あの犬」

シユン「犬!？」

タツミ「…アラガミを相手にしてたんじゃないのか？」

4416 「まつさかあ ゴッドイーターじゃあるまいし」

シユン「じゃあ お前は何だよ!？」

タツミ「いや待て 確かあんたはアラガミのことをあだ名か何かで呼んでたな」

それで犬というと… ガルムかマルドウークのどっちかな？」

4416 「ノンノン ルビが振られてないから犬は犬だぞ」メタア  
タツミ「マジで犬と闘ってたのか…」

シユン「相変わらず ワケわかんねー…」

4416 「ところで タツミとシユンがいるってことは 他の3人もいるのか？」

タツミ「ああ ブレンダンは用事済ませてから行くって行ってたから もうすぐ来るんじゃないか」

シユン「ジーナは相変わらずアラガミ相手にブツ放しに行ったな

カレルは知らねえ」

4416 「ほーん」

ブレンダン「待たせたな」

タツミ「おっと 噂をすれば」

4416 「やあやあ ブレンダン」

ブレンダン「隊長は今日も変わらず 平常運転…には見えないな」

シユン「分かるのかよ…」

ブレンダン「大方 犬でも相手していたのだろう？」

シユン「マジで何で分かるんだよ!？」

4416 「\すげえ／」

ブレンダン「いや さっきの会話を聞いていただけだ」

タツミ「だよなあ」

4416 「盗み聞きとは お主もワルよのおく」

ブレンダン「そうか？」

ムツミ「お待たせしましたく

鮭の昆布茶漬けと ナスの田楽味噌和えです」

4416 「ナスは嫌いな”の”で”ず”!!」

と言いたいところだけど 最近ナスが食えることに気付いたから頂くよ」

タツミ「旨そうだなあ」

ブレンダン「そうだな：俺にも同じ物を」

ムツミ「はくい」

シユン「ナスが嫌いって 子供かよ」

4 4 1 6 「まあ さすがに煮てベチヨベチヨなナスは厳しいけど

焼きナスや炒めたナスはいけるようになった」

ムツミ「そういえば隊長さんは 好き嫌いは多い方？」

4 4 1 6 「多いっちゃあ多いなあ

トマトにカブに キノコ全般 あとはカリフラワーや白菜も

苦手だな」

シユン「野菜嫌いとか ますます子供かよw」

ブレンダン「キノコは野菜ではない」

4 4 1 6 「肉や魚は一部除いてウエルカム

根菜も基本的に歓迎なり」

タツミ「好きな味とかはどうなんだ？」

4 4 1 6 「好きな味かあ：旨けりや何でも食うからそういうのは

気にしないな

逆に酸っぱいものや甘すぎるのはノーサンキュー」

ムツミ「え？前に梅干しを食べてたような：」

4 4 1 6 「梅干しとポン酢は何故かいけるんよ」

タツミ「変わった趣向してるなあ」

4 4 1 6 「いやあゝ それほどでも」

タツミ「褒めてねえよ：」

ブレンダン「：俺は梅干しを好きにはなれないな

あの強烈な酸味がどうにも：」

ムツミ「梅干しといえば お弁当によく入ってたりするよね」

4 4 1 6 「そうだなあ でも弁当の梅干しはちと苦手だな

ムダにしよっぱいがあるし 米に味が侵食するし」

タツミ「そうそう！梅干しが染み出たご飯！

アレ 気になるよなあ」

ムツミ「もし お弁当にどんなおかすが入っていたら嬉しい？」

4 4 1 6 「ウーッン やはり定番は玉子焼きだけど

個人的には揚げ物かな」

シユン「いやいや ミートボールだろお

それに最近じゃあ ハンバーグやコロツケなんかも入ってたりするぞ」

ブレンダン「シユンの方がよっぽど子供っぽいな」

シユン「あんだとお！」

タツミ「俺はやっぱり ヒバリちゃんの作った弁当なら 大歓迎だなあ！」

4 4 1 6 「イナゴの佃煮でも？」

タツミ「もちろん！」

4 4 1 6 「ミラノ風ドリアでも？」

タツミ「当たり前だ！」

4 4 1 6 「がやうるのどうがらぎ柘けでも？」

タツミ「全部受け入れr 何だって？」

4 4 1 6 「がやうるのどうがらぎ柘け」

タツミ「何それ」

4 4 1 6 「わかる人にはわかる」

タツミ「まあ 何か分からないけど ヒバリちゃんが作ったものなら無問題！」

ムツミ「ブレンダンさんの分 お待たせしました」

ブレンダン「ああ ありがとう ムツミ

俺は そうだな… アスパラのベーコン巻きがいいか

4 4 1 6 「いいね アスパラベーコン」

ムツミ「私はポテトサラダがいいかなあ」

4 4 1 6 「ポテトサラダかあ

コーンのシャキシャキとかがええよなあ」

シユン「おいちよつと待て

お前 ポテサラにコーン入れるのかよ？」

4 4 1 6 「え？何か問題でも？」

シユン「大アリだ！コーンなんて入れる必要ねえだろ！」

4416「…ほほう これはちよつと避けられない戦いになりますねえ……」

タツミ「2人とも落ち着け」

対立する度に張り合ってたらキリがないだろ」

ブレンダン「そうだ これは単なる個人の好みの問題」

他人に強要すべき事ではない」

シユン「……わかったよ」

ただし ポテサラにコーンは認めたワケじゃねえからな」

4416「では自分も ポテサラにコーンは認めることで妥協しよう」

シユン「妥協になってねえ……」

——翌日 16:40

ムツミ「昨日 聞き出した内容をまとめると——」カクカクシカジカ

エリナ「なるほど おかずの幅はそれほど狭くはないね」

ムツミ「でも お弁当に揚げ物はちよつと……」

エリナ「揚げ物つて エビフライとか唐揚げよね」

確かに お弁当のおかずとしては重い気が……」

ムツミ「エビフライはまだいいけどねえ」

エリナ「うーん…… やっぱりまだ情報が少ないかなあ」

ムツミ「もう少し詳しく訊いてみる？」

エリナ「うん お願いするね」

あと 私の方でも何か役に立つ情報がないか 調べてみるね」

ムツミ「ついでに 他に隊長さんに訊いておきたいことつてある？」

エリナ「え？えーつと…… じゃあ 和食か洋食 どっちが好きか  
でいいかな」

ムツミ「はい」

エリナ「先輩って 大体のものは食べるから 何が好きなのかイマイチ分からなくて…」

ムツミ「うん そうだね」

私が作った料理も 嫌いなもの以外は食べてくれるし」

エリナ「先週 ナナさんが作った得体の知れないお菓子も 青ざめつつも食べてたし」

ムツミ「この前出したほっけの塩焼きも 皮はもちろん 骨まで食べてたよ」

エリナ「ほ 骨まで…」

ムツミ「隊長さん曰く『すり潰すように食べばいい』って」

エリナ「うう〜… だとしても口の中で骨が刺さりそう…」

ムツミ「うんうん 骨でチクツとなるのはいやだよねえ〜」

エリナ「…そういうえば先輩は 昨日 何を食べたの？」

ムツミ「昨日は鮭の昆布茶漬けと ナスの田楽味噌和えを出したよ」

エリナ「和食かあ」

ムツミ「なんでも ナスは嫌いだったけど 今は食べられるのかなとか」

エリナ「今までナスが嫌いだったのね…」

ムツミ「鮭の皮はもちろん ナスのヘタも平らげてたね」

エリナ「もうそれ 食器しか残らないじゃん…」

ムツミ『『なんだこれ…』って言いながら食べてたのは 強く印象に残ってるよ〜」

エリナ「うん… だいたい想像できる…」

——同日 19:50

4416 「アイム ハングリー」

リンドウ「ようー 隊長さん

どうだ 一緒に吞まねえか？」

4416 「お断りしますです」

ムツミ「今日も1日お疲れさま」

今日は何にする？」

4416 「そうだなあ　じゃあ豚肉を使ったもので」

ムツミ「は〜い」

リンドウ「豚肉つつ〜と　生姜焼きだな！」

4416 「いいツスね〜　生姜焼き」

リンドウ「でも俺はやっぱり牛肉かなあ

最近　牛のニンニクバター焼きにハマっててさあ〜

4416 「ああ〜　想像しただけでヨダレが〜」

リンドウ「そりやあもう匂いかいただけで食欲全開ってもんよ

箸とビールが止まらねえ〜」

4416 「もうすっかりオツサンになってるじゃないですか」

リンドウ「ハハハ：　まあ　実際オツサンだしなあ」

4416 「飯は食っても　歳は食いたくないもんですな」

リンドウ「だなあ」

アリサ「食わず嫌いはダメですよ　リンドウさん」

リンドウ「よう　アリサ」

4416 「どーも　アリサ」

アリサ「ええ　こんばんは」

4416 「アリサも飯か？」

アリサ「そうですよ

” 誰かが” 放ったらかしにした書類を片付けていたので

予定よりも遅くなっちゃいましたけど」

リンドウ「うぐつ」

4416 「ほーん」

ムツミ「お待ちどおさま〜　豚肉の生姜焼きです」

4416 「k t k r！　ライス大盛り！　ライス大盛りで！」

ムツミ「そう来ると思って　すでに用意してるよ〜」

4416 「OK！　じゃあ後は頂くのみ！」

リンドウ「おっほ　いい食いつぶりだなあ」

アリサ「見てるこつちも食欲が湧く：　には絵面がちよつと……」

リンドウ「まるでハムスターみたいになってら」

4416「ハムツ ハフハフ、ハフツ！」

ムツミ「アリサさんは何が食べたい？」

アリサ「そうですねえ… ミートパスタをお願いします」

ムツミ「はくい」

4416「モグモグウマウマ

パスタは腹持ちいいし アレンジしやすいので けっこう便利だよなあ」

リンドウ「だなあ ペペロンチーノとか旨いよなあ」

ムツミ「麺類は世界中の料理に使われてるからね」

ところで 皆さんは和食か洋食 どっちが好き

？」

4416「んゝ 自分はどっちも好きだけど…

ぶっちゃけ中華のが好きだな」

リンドウ「俺は和食かなあ

まあ 俺もどっちでもいいんだけどな」

アリサ「私は洋食ですね

和食は馴染みが薄いのでなんとも…」

ムツミ「綺麗に分かれたよゝ これはどうなるかなゝ？」

4416「三 國 志」

リンドウ「中華繋がりか？」

4416「そんなところ」

ムツミ「隊長さんはよく和食を食べるから 中華好きなのはちよつと意外かも」

4416「中華料理旨いじゃん

ラーメンに始まり 餃子やシューマイ 麻婆豆腐に青椒肉絲」

リンドウ「小籠包やチャーハンもいいよなあ」

4416「まあ 和食は和食の良さが 洋食は洋食の良さがあるつてもんよ」

リンドウ「だな 十人十色ってヤツだ」

4416「一部 なんでこれを食おうと思ったんだ つてのもある



けど」

アリサ「例えば？」

4 4 1 6 「有名どころではタコかな

極東では寿司ネタになるぐらい一般的だったけど 他では『悪魔の魚』って呼ばれてたとか」

アリサ「た タコ…？」

4 4 1 6 「こんなの」カキカキ

アリサ「…ホントになんでこんなのを食べようと思ったんですかね」

リンドウ「タコわさ旨いぞ」

酒のつまみに引っ張りダコになるぐらいに旨いっ」

4 4 1 6 「タコだけに」

アリサ「リンドウさんは何にでも酒に繋げようとしていますね…」

リンドウ「旨けりやいいだろお」

アリサ「いいですけど 程々にしてくださいよ」

ムツミ「ミートパスタ お待たせしました」

アリサ「ありがとうございます ムツミちゃん」

4 4 1 6 「ウーロン茶くらはい」

ムツミ「はい」

リンドウ「お茶までこだわり持ってるのか」

4 4 1 6 「いや特に

ただ 飯の後のウーロン茶はウマいってぐらいで」

リンドウ「ほーん」

4 4 1 6 「ぶつちやけ お茶に関しては ブレンド茶以外は大体飲める

緑茶と紅茶 どちらもおk」

アリサ「ブレンドのお茶は苦手なのですか？」

4 4 1 6 「うむ 十〇茶や爽〇美茶 飲んでみたんだけど『なにこれ』としか言いようがなかった…」

ムツミ「紅茶といえば エミールさんの淹れる紅茶はすごくおいしいよね」

4416 「そうだなあ

クツキーとタツグ組んで 胃袋掴みにきやがる程だわさ」

アリサ「私もご馳走になったことがあります

香りが素晴らしくて 匂いだけで美味しいと感じたのは初めてでした」

リンドウ「へえ〜 そんなに美味しいのか〜」

4416 「なんか より美味しくする方法を試してるとか何とか」

アリサ「いったい何でしょうか…？ 気になりますね」

4416 「まあ エミールのことだし ちよつとしたジंकウスか何かだろうけど

それでも美味しいことには変わりない」

ムツミ「隊長さん けつこう信頼してるんだね〜」

4416 「そりやな 濃縮渡してくれるし 誤射も少ないしで

意外と優秀だからな」

ムツミ「信頼ってそういう…」

リンドウ「俺はどうなんだ？な？」

4416 「誤射がヒドイ」

リンドウ「」

——翌日 15:20

ムツミ「更なる情報を仕入れてきたよ〜」

エリナ「情報屋じやあるまいし…」

ムツミ「昨日はこんなことがあって〜——」

エリナ「なるほど お茶にも好みがあったのね」

ムツミ「ご飯の後はウーロン茶がいーらしいよ」

エリナ「ウーロン茶ね」

ムツミ「それと 和食か洋食かなんだけど まさかの中華派だったよ〜」

エリナ「うえ〜… そう来るの〜…？」

ムツミ「でも 特にこだわりはないらしいから 大丈夫じゃないか

なあ〜」

エリナ「だといいけど…」

せつかくだから 1番いいのを食べてもらいたいし…」

ムツミ「うんうん わかるよ〜」

エリナ「あ それでね 私の方でも調べてみたんだけど

先輩にピツタリの『のり弁』がいいかなと思って」

ムツミ「ほほう のり弁！」

エリナ「揚げ物を食べさせてあげたいけど 何がいいかな〜 と探

してたら見つけてね」

ムツミ「いいね〜 たしかに味も具材もレパートリーが多くて ア

レンジもしやすい！」

まさにピツタリ！」

エリナ「それで さっきのムツミちゃんの話しを聞いて 食後のデ

ザートもいいかな〜 って思ったんだけど」

ムツミ「そうだね〜 時間をおいても美味しい物なんかがいいん

じやないかなあ」

エリナ「なるほどね…」

じゃあ これについても後で調べてみるね」

ムツミ「私も隊長さんに それとなく訊いておくよ〜」

エリナ「ところでのり弁って 何を入れた方がいいの？」

ムツミ「一般的には白身魚のフライとちくわの天ぷらかな？」

エリナ「えっと… それ以外に」

ムツミ「んー… そこはエリナさんの入れたい物でいいんじゃない

かなあ

お弁当はそういうものだから」

エリナ「そう言われても どれがいいか悩むなあ…」

ムツミ「大丈夫だいじょーぶ」

私の料理を美味しく食べて エリナさんの料理を美味しく

食べないハズがないよ〜」

エリナ「…うん そうだよね

美味しく食べてもらえるように努力して方がいいよね」

ムツミ「その意気だよ！」

エリナ「とはいっても 選択肢が多いという意味で やっぱり悩んじゃう」

ムツミ「んー じゃあ いくつか候補を作ってみて 自信のあるものにした方がいいよ」

食べ合わせや見た目 おかずの配置なんかに参考になりやすいかも」

エリナ「なるほどねえ 確かに1度作ってみるのが良さそうね」

ムツミ「おかずの作り方が聞きたかったから いつでもきいていいよ」

コツやポイントさえ掴めば 誰でも美味しい料理が作れるよ」

エリナ「うん 何度もありがとね ムツミちゃん」

——同日 17:10

4416 「もう5時かあ

小腹空いたなあ」

ナナ「やつほー たいちよー」

4416 「やつほ^^」

ムツミ「今日は早いねえ

何かあったの？」

4416 「何かあったというより 何もしてない

今日は1度も出撃しとらんのだ」

ムツミ「どうして？」

4416 「神機のメンテ

クロム鮎川と競合してないかとか 神機に悪影響を及ぼしてないかとかで」

ナナ「あーっ もしかして前に言った 喋る神機のことー？」

4416 「そうそれ

とにかく暇で暇で」

ナナ「だったらいい物があるよー」

4 4 1 6 「どうせロクな物じゃないのはわかってるけど…」

なに?」

ナナ「へへーん ナンクルナイザーを改良して 味の変化に特化させた物だよー」

4 4 1 6 「いい加減懲りろし」

ムツミ「またリツカさんに怒られるよお?」

ナナ「まあ さすがにハズレの味は入ってないよ

好き嫌いまでは考えてないけど」

4 4 1 6 「ほーん

んで どう変わったんだ?」

ナナ「まず 味をぎゅつと詰め込むために 回復成分をまるまる取り除いたところだねー」

完全にお菓子として楽しめるようにねー」

4 4 1 6 「菓の形をしたお菓子…」

ヨーグ○ットとかの類かな」

ナナ「そして ハズレの味はなくして 色んな味を詰め込んだんだー」

味わったことのない味に出会えるかも?」

4 4 1 6 「んじゃ 早速1粒」パクッ

ナナ「どう? 何味だった?」

4 4 1 6 「まあ 待て

これは… 肉…の焼き加減という名の風味からして…」

ナナ「うんうんっ」

4 4 1 6 「……………」

ナナ「?」

4 4 1 6 「…………ドネルケバブ?」

ナナ「……………」

4 4 1 6 「?」

ナナ「じゃあ次は私の番ねー」

4 4 1 6 「おー」

ムツミ(今のやりとりはなんだったんだろう…)

ナナ「むむっ これは…!」

4 4 1 6 「お?」

ナナ「ナツツ…にも似た独特な風味からして…」

4 4 1 6 「うむ」

ナナ「……………」

4 4 1 6 「?」

ナナ「…………ピスタチオ?」

4 4 1 6 「……………」

ナナ「?」

4 4 1 6 「よし ワンモア」

ナナ「おっけー」

ムツミ(なんだろう コレ…)

4 4 1 6 「これは えーつと… リンゴ?

それにヨーグルトにコーヒ…」

ナナ「あつ それはカレーの隠し味だね」

4 4 1 6 「カレー無しで カレーの隠し味とはいったい」

ナナ「細かいことは気にしないー!

私の方は… ソーダ味のこんにやくゼリー味かな?」

4 4 1 6 「細かいなオイ」

ナナ「細かいことは」

4 4 1 6 「気にしない」

ナナ「そういうことー」

4 4 1 6 「まあ 茶番はこのくらいにして…

ムツミや メシはまだかのお?」

ムツミ「あらやだあ 昨日食べたじゃないー」

4 4 1 6 「毎日食わせろし

んで ボケは置いといて なんか手軽につまめるものある?」

ムツミ「うくん ドーナツならあるよー

砂糖をまぶしたリングドーナツ」

4 4 1 6 「ほほう…?じゃあそれで」

ナナ「私もわたしもー！」

ムツミ「はーい」

4 4 1 6 「あ ドリンクはアイスコーヒーで

砂糖無し牛乳多め 塩ひとつまみ 豆はブレンド以外なら何でもの深煎り」

ナナ「細かいね

私はアツプルティー！甘いのでー！」

ムツミ「はいはーい まずドーナツから」

4 4 1 6 「ふーむ 見た目は至って普通のドーナツ

まずは1口……」

ナナ「モグモグ……

んんん♪あまーい♪」

4 4 1 6 「ハンバアアアアーグ!!」

ナナ「口の中に広がる甘味…… 砂糖とドーナツの二段攻撃ー！」

4 4 1 6 「冷めていてもなお劣ることのない甘さ……

油の量を極力減らし 酸化を可能な限り防いでいる……！」

ムツミ「よくわかったね」

ハイ アツプルティーとコーヒー お待たせ」

ナナ「待ってましたー！」

ああー おいしい物を食べるってしあわせ」

4 4 1 6 「んんんっ ドーナツの甘味がコーヒーの苦味を強く感じさせるっ

右と左が正反対でありながら相性抜群であるのと同じように甘味と苦味もまた 互いを引き立てるのに一役買う」

ナナ「あー コーヒー飲んで甘い物食べるといのはよく聞くねー

でも私はそういうの ちょっと苦手かな」

4 4 1 6 「んー そういうのはブラックコーヒーが一番なんだろうけど

酸味苦手な自分は牛乳だばーじゃないとなあ」

ムツミ「隊長さん ブラックコーヒー苦手なんだ」

4 4 1 6 「何度か挑戦したけど全敗

二度と飲むまいと思いつつも ふとやっぱりいけるじやないかなと思ひ」

ムツミ「それでまた負けると…」

4416「まあ 胃が痛くなるから ブラックは飲めなくても問題ない

紅茶はドストレートでもいけるんだがな」

ナナ「コーヒー牛乳なら私も飲めるよー」

ムツミ「お菓子と飲み物の組み合わせによっては とても美味しいものもあるよね」

4416「ポテチとコーラとか

まあ 自分はいつだってコーヒーだけど」

ムツミ「隊長さんはお菓子を食べてる姿をあまり見ないけど

どんなお菓子が好きなの？」

4416「んー 甘すぎないもので サクサクしたものかなー

クツキーしかり スティック菓子しかり」

ナナ「私はチョコレート！」

4416「チョコか… チョコも甘すぎないのがいいな

甘いのは喉がやられるぬら」

ムツミ「私は飴玉かな」

イチゴやリンゴとかの果物の味がいいな」

ナナ「私もアメは好きー！」

4416「飴はハツカ飴が好物です」

ナナ「えー？あのスーサーするのー？

アレ甘くないから苦手ー」

ムツミ「私も…」

4416「よく味わってみたらほんのり甘いぞお

慣れると更なる爽快感が欲しくなる…！」

ナナ「ホントにー？」

4416「うん

2粒同時に食ったりとかな」

ムツミ「うわあー 想像しただけで辛そう…」



4416 「グフフ 今ちよーどハツカ飴があるのだよ

突き抜ける冷感 嫌という程味わわせてやr」

ギル「何をしようとしてるんだ…」

4416 「被害者一名 追加入りマース」

ギル「勝手に増やすな」

ムツミ「ギルさん 今日もお疲れさま」

ナナ「お疲れ」

ムツミ「ギルさんも早いねー

何もなかったの？」

ギル「いや 隊長の神機のメンテナンスに付き合ってた

まさか本当に喋るとはな…」

4416 「もーつと褒めるがよいぞ！」

ギル「しかしあの神機 なぜ関西弁なんだ？」

4416 「さあ？」

風の噂では 普通に喋らせるのもインパクトがないからと  
りあえず関西弁にしたとか」メタア

ナナ「たしか 黄金のグボロ・グボロだったよねー

神機になる前から話せたんだっけ？」

ギル「あらゆる偶然が重なって起こった奇跡なのか

あるいは隊長の血の力による必然的な出来事なのか…」

4416 「ネタ不足とツツコミ不足による救済措置」メタア

ナナ「まあまあそんなことより ギルもドーナツ食べるー？」

4416 「ハツカ飴もあるぞ！」

ギル「ドーナツだけいただく」

ムツミ「飲み物はある？」

ギル「ああ ムツミに任せる」

4416 「そうそう 最近スケボー始めたんだけどさ トリックが  
なかなか上手いかなくなってな

基礎的なトリックすら出来ずにちよつと挫折してたりする」

ナナ「いつも板みたいなの持ってると思ってたら あれスケボー  
だったの？」

4416「うん」

ギル「隊長は運動神経は悪くないハズだが：

そもそもやり方が間違ってるという可能性は？」

4416「合ってると思うんだけど 一向に成功しないんだよなあ  
超加速」

ギル「…超加速？」

ナナ「傾斜に差し掛かる直前にボードを呼び寄せて乗る加速方法  
だったっけ？」

4416「それぞれ

壁加速 ポセイドンは割りと出来るのになあ」

ナナ「もしかして坂の角度が足りないとか？」

4416「あー かもしれない」

ギル「…俺の知ってるスケボーと違う……」

ムツミ（スケボーじゃなくてヌケボーだからね…）

一方そのころ……

「エミールの部屋」

エミール「この僕に頼みがある？」

エリナ「うん イヤなら別にいいけど」

エミール「何を言う この僕が断るとでも？」

助けの手を差し伸べるのは 騎士として当然の義務！

エリナ「そういうのいいから

…それで 紅茶の入れ方なんだけど」

エミール「む？さてはエリナも あの伝統技法に興味があると…」

エリナ「何でもいいいから アンタがやつてるっていう美味しい紅茶  
の入れ方を教えてほしいんだけど…」

エミール「無論 拒む理由などない！

むしろ この技法を広めようかと思案していたほどだ！

エリナ「じゃあ手短によろしく」

エミール「うむ いいだろう」

だが 言葉で説明するより 実際に見てもらった方が幾分か判りやすいだろう」

エリナ「……………」

エミール「まずは紅茶の入れ方の基本 これは変える必要はないより美味しくする方法は 湯を注ぐ時にある言葉を唱えるだけだ」

エリナ「言葉？」

エミール「そう！極東では『言霊』なる事象が存在する！

言葉の持つ力 これを紅茶に注ぐという訳だ！」

エリナ「コトダメねえ…」

詳しいことはいいから その唱える言葉を教えて」

エミール「うむ 何も難しいものではない

これもまた 極東に伝わる呪文だ」

エリナ「一応 メモっとこ」

エミール「聞き逃しても いくらでも復唱してあげよう

唱える言葉は…」

エリナ「……………」

エミール「『おいしくな〜れ♪おいしくな〜れ♪』」

エリナ「……………え？」

エミール「『おいしくな〜れ♪おいしくな〜れ♪』」

エリナ「いや 聞き逃したわけじゃないから…」

エミール「む そうか

どうだ しかと耳に刻み込んでくれたかな？」

エリナ「……………こんなので美味しくなるの？」

というか ちよつと引いた…」

エミール「僕も最初は半信半疑だったが 試したところ 心なしかより美味しく感じたのだ！」

ポイントは 飲んでもらう人の笑顔を思いながら唱えることだ！」

エリナ「うわあ…」

まあいいや 帰ろ」

エミール「真心をこめる… 人との触れ合いに重要なおもてなしの精神…！」

心も温まる魔法の言葉！それが 僕の目指す更なる騎士道への鍵！」

「エリナの部屋」

エリナ「…えつと 飲んでもらう人の笑顔を 想像しながら唱える  
と……」

エリナ「……………」

エリナ「お おいしくなくれ おいしくなくれ…」

エリナ「……………うう／＼／」

——翌日 13:30

「ラウンジ」

ジュリウス「——それは巨大なヒキガエルのような姿

しかし ただ大きいという訳ではないことを その化け物が持っている槍を見るだけで理解するだろう」

4416 「ムンビ来ちゃったよ」

ジュリウス「血の滴る槍を 原型を留めていない死体から引き抜いたかと思うと 探索者のいるこちらを向いた

顔—— そこには目も口も無く 無数の触手のような物が蠢いていた」

カノン「そ それって本当に生き物なんですか…!？」

ジュリウス「こちらを視認したと発覚するのに 特別目を見張る必要はなかった

なぜなら 槍を高々と掲げて 怖気が走る唸り声をあげたからだ」

リヴィ「……………」

ハルオミ「おっそろしいな」

ジユリウス「この世に想像もし得ない 気味の悪い怪物が目の前にいる…」

そんな状況に遭遇した全員はSANチエツクだ」

4416 「ちよつと待つて SAN値21しかないんだけど」

リヴィ「初期値はいくつだ？」

4416 「25」

ハルオミ「あと1で不定の狂気か？」

ジユリウス「時間を考えるところなるな

成功で1 失敗で1d6の減少だ」

4416 「どうあがいても発狂」

カノン「私《精神分析》持ってますので 安心して発狂して下さい！」

ハルオミ「カノンちゃんも発狂したら どうしようもないけどな」

4416 「ええい ままよ！」「13」

リヴィ「運良く成功か？ でも発狂は免れない」

ジユリウス「では 不定の狂気の種類を決める

1d10を振ってくれ」

4416 「何が出るかな 何が出るかな」[8]

8つてーと 『心因反応』？」

リヴィ「精神分裂病がそれにあたるな

主な症状は幻覚 幻聴 異常行動等だ」

4416 「うーん なるほどなるほど」

カノン「では私も… それっ！」[6]

成功ですっ」

ハルオミ「そういえばカノンちゃんのSANの初期値は80だったな

んで 減っても現時点で78… 多いな」

リヴィ「次は私だ」[85]

うっ… 失敗だ…」

ハルオミ「俺はどうなるかな〜と」[4]

おっと成功だ」

4416 「ハルさんの現SAN値 32ぐらいじゃなかったスカ？」

ハルオミ「神は言っている…」

ここで発狂する運命ではないと」

リヴィ「減少値は…」[5]

あつ……」

ジュリウス「SAN値が5以上減ったか

一時的狂気を決める 1d10振ってくれ」

リヴィ「流石にこれ以上 状況を悪化させる訳にはいかないが…」

[9]

ジュリウス「9は：『異食症』だな」

4416 「じゃあ ムンビを異様に食いたがるってことで

ムツミ「——と これが昨日手に入れた情報だよ」

エリナ「なるほどね」

ムツミ「情報はもう揃ったも同然！

あとは時間との勝負だよ！」

エリナ「うん ちゃんとおかずもある程度は選定したし

あとは実際に作って どれをお弁当に入れるか決めるだけ」

ムツミ「それで 何を作るの？」

エリナ「リストに書くぐらい多いけど ざっとこんな感じ」

ムツミ「うわぁ 多いー」

エリナ「1度決めたからには 退くわけにはいかないっ

それでも思わないと 自信作なんて作れないと思うし」

ムツミ「その心意気… しかと受け取ったぞよ！」

エリナ「…どうしたの ムツミちゃん？」

ムツミ「さっそく戦に参るでござる！

料理は戦い！いざ出陣！」

エリナ「…いったい何に感化されたの？」

愛ゆえに

愛する人に

愛されたいために

腕を上げ

腕を振るい

腕によりを掛ける

そう 全ては

4416「鉄血メイスはどこだあ〜！上の写真立てに飾っていただろお!？」

あつ クーラー付けないで！止まれの標識置いてないから！  
リヴィ「ああ あのカエル… 美味しそうだ…」

そうだ カエルは鶏肉のような味がするんだ…」

ハルオミ「これはヒドイ」

カノン「ある意味これもSANチェックものですね」

ジュリウス「では」

カノン「しませんっ！」

——ピクニックの日 11:20

「エリナの部屋」

エリナ「…よし 出来る事は全部した…」

あとは結果次第…」

エリナ「忘れ物は無いよね…？」

何度も確認したけど 見落としがあるかもしれない…」

エリナ「……………」

エリナ「あつ！お箸が無い！

あ あぶないところだった〜」

エリナ「他にも忘れ物 無いかな…？」

エリナ「……………」

——道中すつ飛ばして

同日 12:25

「聖域内耕作地 野菜エリア」

4 4 1 6 「んー いい色だー

全然わかんねえけど」

エリナ「このトマト いい感じに育ってるねー」

4 4 1 6 「一方カボチャは全然育たないなあ

まだまだ青い」

エリナ「ナスとキュウリはそろそろ食べ頃かな〜」

4 4 1 6 「ネギとニラやべえ

雑草にしか見えん」

エリナ「ちよつと詰めすぎた感じかなあ

色もちよつと薄い気がするし」

4 4 1 6 「間隔を気持ち広めにと… メモメモつと

エリナ「…ホントに様子見に来ただけなの？」

4 4 1 6 「んー 半分は見に来ただけ

もう半分はデートのな」

エリナ「…もう はつきり言っちゃって」

4 4 1 6 「いかんのか？」

エリナ「別にいいけど…」

4 4 1 6 「いいのか(困惑)」

エリナ「そこは否定されるところなの？」

4 4 1 6 「ノリというかなんというか」



「聖域内耕作地 小屋」

4 4 1 6 「——と まあこんなモンかな」

エリナ「お疲れさま」

4 4 1 6 「そんな疲れてないけど まあ あんがと」

エリナ「それで 帰りはどのくらいになるの？」

4 4 1 6 「割と余裕取ったから 早くても1時間後かな」

エリナ「……あのね 先輩……」

4 4 1 6 「うん？」

エリナ「お弁当作ってきたんだけど… よかったら食べる…？」

4 4 1 6 「………」

エリナ「べ 別にいらならいらならいいい けど…

その…」

4 4 1 6 「ちがう」

エリナ「ええ？」

4 4 1 6 「さっきのセリフ『食べる』を『たべりゆ』に変えてワン

モア」

エリナ「ええ……」

4 4 1 6 「ワンモアーツ！」

エリナ「わ わかったから！」

4 4 1 6 「はい」

エリナ「えつと… お弁当作ってきたんだけど…

た たべりゆ…？」

4 4 1 6 「たべりゆうううううう!!」

エリナ「はい 先輩のお弁当っ」

4 4 1 6 「んんっ のり弁とは分かっておるのお」

エリナ「飲み物にウーロン茶をたくさん入れてきたから 遠慮しないでね？」

4 4 1 6 「ええじゃないか！ええじゃないか！」

エリナ「ふふっ♪じゃあ いただきますっ」

4 4 1 6 「全力でいたただかせてもらう」

エリナ「この為に 頑張つて練習したんだけど どうかな？」

4 4 1 6 「旨いッツツ!!魚のフライのサクツとした歯応えッ!

弁当だというのに 衰えることなき食感はいったい:!?」

エリナ「ふふん ヒミツ♪」

4 4 1 6 「守りが堅い!つと ここでちくわの天ぷらに移った!

さあ 容赦なく食らいつきます!」

エリナ「なんだか実況みたい」

4 4 1 6 「んっ これはスゴイ!フライとは対照的に弾力のある歯

応え!

良いちくわを最大限に活かしている!」

エリナ「でしょー?」

4 4 1 6 「さあ ここは一旦下がります

箸休めにゴボウの金平に目を付ける!」

エリナ「こんなに美味しく食べてくれるなんて

頑張つて作った甲斐があるかも」

4 4 1 6 「おっと!ここでまさかの白米!

スタジアム弁当箱の白い悪魔!ライス!」

エリナ(∴でも なんでこんな実況風に解説するんだろう?)

4 4 1 6 「ふいー ごちそうさん」

エリナ「はい お粗末さまー

食後のデザートもあるけど どうする?」

4 4 1 6 「ほう?何ぞ何ぞ?」

エリナ「ちよつぴり苦ーい アイスサンド!

といつても 苦いのは先輩の分だけだけ」

4 4 1 6 「いいぞいいぞ!早速いただき!」

エリナ「はいはいー

あつ 紅茶もあるけどいる?」

4 4 1 6 「うんうん いるいる」

エリナ「はい」

4 4 1 6 「んんっ しっとり冷たく ほのかに苦い」

ここで紅茶をグビツと… うまあい！」テレーツテレー

エリナ「良かったあゝ」

紅茶も美味しく入れられたか不安だったけど その心配はないみたいね」

4 4 1 6 「飯にハマやらかしても だいたいの物は旨いと感じるから 大丈夫だいじょーぶ」

エリナ「もうっ 1番美味しいのを振る舞いたいのゝ」

4 4 1 6 「ンなるほどっ」

エリナ「…好きな人と美味しい物を食べるって いいね」

4 4 1 6 「セヤナー」

エリナ「また今度 こういう機会があつたら お弁当作るね♪」

4 4 1 6 「いいぞ。」

エリナ「でも たまには先輩の作ったものも食べてみたいかな…？」

4 4 1 6 「大半が辛いものになるけど それでいいなら」

エリナ「…えっと せめて私の好みぐらいは知ってほしいかな…」

4 4 1 6 「おや 失礼」

エリナ「ところで 私の好物って知ってたっけ？」

4 4 1 6 「……………」

知ってるよ」

エリナ「今の間はなに？」

4 4 1 6 「スミマセン 知りません」

エリナ「もうっ」

4 4 1 6 「フォツフォツフォツ」

エリナ「笑ってごまかさなのっ」

4 4 1 6 「サーセン」

4 4 1 6 「んふう 腹が幸せで満たされた」

エリナ「そう?よかった♪」

4 4 1 6 「いやしかし ワガママだとは自覚しているが 少々甘いものを口にしたいのう

エリナのアイスサンド 半分でもいいからちよーだい」

エリナ「ゴメン もう食べちゃった」

4 4 1 6 「Oh」

エリナ「私の分はそこまで多くなかったからね」

4 4 1 6 「ぬーん まあ仕方ないか」

エリナ「……そうかな?」

4 4 1 6 「うん?」

エリナ「ホントに 甘いものがないのかな?」

4 4 1 6 「…… (アイデアロール ファンブル 「9 6」)

サツパリわからん」

エリナ「…1つだけ 確認できる方法があるよ」

4 4 1 6 「うーん?」

「…キス……しよ……?」

## 神罰者

——某日 深夜

『……………』

「…何者だ!？」

『……………』

「腕輪が無いようだが、この関係者でもなさそうだな…」

『……………』

「何者だ 答えろ! 場合によっちゃ 実力行使もやむを得ないぞ…!」

『……………私は神罰者』

『神に抗う者を 制裁する』

——13:30

〔所長室〕

サカキ「やあ 急に呼び出してすまないね」

4416「ええ まったく」モグモグ

シエル「隊長 せめて昼食はこの後にしましょう

カレーパンを頬張っている場合じゃありません」

4416「えー 空腹には勝てぬよ」

サカキ「いやいや 私は別に構わないよ

重要な事ではあるけど 気を張りつめすぎるのも 良くないからね」

リンドウ「俺にもちよつと分けてくんね?」

4416「イヤじゃー! イヤじゃー!!」

コウタ「ウルサイ」

タツミ「相変わらず元気だなー」

アリサ「全くです

せめてある程度の緊張感も持つてほしいものです」

サカキ「さて 君達を呼び出したのは…

おおよそ検討がついていると思う」

シエル「神機使いのみを狙った 謎の傷害事件…」

サカキ「その通りだ」

タツミ「各地の神機使いが 神罰者と名乗るヤツから被害を受け たっというアレか」

サカキ「ああ 各地を転々と移動する 正体不明の人物

そして残念ながら ここ極東支部でもついに 被害者が出て しまった…」

リンドウ「十中八九 神罰者の仕業と考えてもいい

ヤツは決まって右胸を狙う

そして今回も例外じゃなかった」

4416「はいはい質問

模倣犯や愉快犯の線は？」

サカキ「それは考えにくい と言わざるを得ない

そもそも神機使いにダメージを与えられる物は限られる」

コウタ「神機か アラガミか…」

サカキ「そう しかも各地の被害者の目撃によると 相手の腕輪が 無い点 拠点内で襲われた点 この2つが一致する

腕輪の件はともかく 一般人なら普通は入れない場所で 件の神罰者の真似をするのは厳しいだろう」

アリサ「そして 神機使いでもないとすると 残る可能性はアラガミ…ですね」

リンドウ「ただ 情報不足な上 侵入経路も判らん

だけどもあ アラガミなら何を仕出かしても不思議じゃないけどな」

サカキ「人間並みの知能を持ったアラガミが 罰を下す…

そう考えるのが自然 いや 大いに有り得る話だ」

4416「んで その神罰者は今もここに潜んどるんスか？」

サカキ「今までの行動からすると 数日間潜伏しつつ 数人に罰を

下してから移動する

「そうだとすれば 1人目の被害者が出てからなら まだ猶予はある」

リンドウ「そしてだ ソイツをなるべく捕まえたいワケなんだが… 攻撃手段は不明 活動時間もバラバラ オマケに容姿もハッキリしないときたモンだ」

サカキ「唯一判明している事は 灰色のローブを纏ったような姿という事だけだ

「この状況で捕獲するというのは酷だとわかつてはいるが… 君達に頼る他は無い……」

4416 「はいはい また質問

被害にあつてしもた人は生きてるんスか？」

サカキ「運良く一命を取り留めた者もいれば 運悪く死亡してしまつた者もいる…

「今回は前者だが 現在は意識不明で いつ目を覚ますのかも判らない……」

タツミ「…で 俺達が呼ばれた理由ってそれだけ？」

サカキ「いや 本題はこれからだ

君達を呼んだのは その神罰者の捕獲に専念してもらいたい本音を言うと 皆で捕まえたいところだけど 本業を疎かにしてはいけないからね」

リンドウ「もちろん 神機も無しに捕まえろなんて言わない

ソーマ博士作 この道具を使つてもらおう」

コウタ「…ピストル？」

リンドウ「ただのピストルじゃねえぞー

コイツはアラガミを縛るつっ—目的で作られた 捕縛網を撃ち出す道具だ」

サカキ「撃ち出された網は オラクル細胞に接触すると吸着する という性質を持っている

非常に強靱で 引っ張った程度ではまず破れない」

リンドウ「ただ まだ試作段階だからな

まだまだ小さいから 小型のアラガミぐらいがいいとこだ」  
サカキ「相手は人間とほぼ変わらない大きさで聞いている

この銃でも申し分ないだろう」

リンドウ「ヤツがアラガミなら こいつは有効なはずだ」

4416「その上リベレーターにそっくりだ」

シエル「どう見ても似てません」

タツミ「アラガミ捕まえるってんなら ピistolサイズよりもっと  
大きいのでいいんじゃないの？」

サカキ「この捕縛銃は もともと一般での自衛を目的とした携行銃  
として開発しているんだ

スタングレネードと併用する事で 射撃に慣れていない人で  
も撃てるよう 改良を重ねているのだが…」

リンドウ「スタグレ共々 普及まではまだまだといったところだ

なにせ費用が高いからなあ」

4416（マグネシウム めっちゃ余ってるんだけどなあ）

タツミ（廃棄された閃光弾とか拾ってる と どんどん溜まるよな）

4416（それな）

リンドウ「さて 捕縛銃は二丁携行してもらおう

今ならカッコいいホルスター付きだぜ」

アリサ「ただの革製のホルスターにしか見えませんが…」

リンドウ「西部劇みたいでカッコいいだろ？」

シエル「この銃 サイトがありませんね

命中率向上のため オープンサイトを追加した方がいいかと」

4416「レーザーサイトでいいんでね？」

シエル「普及・量産を考えるとコストが高すぎます

スコープ等はハンドガンには向いていないので やはりオー  
プンサイトを…」

サカキ「まだ試作段階だから 照準器は装備していないんだ

弾の方が実用レベルになるまでは 撃つだけの機能しか備え  
ていなくてね」

4416「やっぱりリベレーターじゃないか」



リンドウ「ま 何度か試射してるから問題なく使えるぞ

あとは射撃の腕次第ってとこだ」

サカキ「おつと言い忘れるところだった

神罰者の捕獲に専念してもらおうことはついさつき言ったね？

その為 君達はしばらくの間 出撃は控えてもらいたい」

リンドウ「一応 オペレーター達とかには既に伝えてある

後で他のヤツらにも知らせておく サカキ支部長が」

サカキ「それと できるだけ単独で行動してもらいたい

神罰者は 1人で行動している所を狙うようだね」

リンドウ「逆に他の皆には常に複数で居てもらおうって寸法だ

これだけでコツチを狙う可能性が高まるだろうな」

4416「なるほど把握」

シエル「失敗は許されませんね…」

コウタ「まあ 俺達なら成功するって」

アリサ「これはコウタが物の見事に逃がしてしまう結果になりますね」

タツミ「フラグを回収するハメになるんだな」

サカキ「くれぐれも気をつけてほしい」

「ラウンジ」

4416「はぁー 単独かぁー

ボケ役だけがいても 何もおこらない

ツツコミ役がほしい」

扇子「H A H A H A！ オレがいるじゃないか マーフィー！」

4416「誰がマーフィーだ

てか 扇子が喋ったぞ オイ」

扇子「オイオイ 忘れたのかい？」

4416「喋るうちわなら覚えてるけど 扇子に変えて以来見てないな

燃え尽きたんだろうか」

扇子「Oh 冗談キツイぜ マーフィー！」

4416 「だから誰がマーフィーだってんだ

というよりお前 ツツコミ役ほしいって言ったんだからツツコミ役に回れし」

扇子「Hey それならイイぜ！オレとお前の仲だからな！ マーフィー！」

4416 「初対面や」

扇子「ツツコミってアレだろ？Summerに開催されるコミケの事だろ？ マーフィー」

4416 「それは夏コミ」

扇子「Really? じゃあ SUMOUでの手を突き出す技の事かい？ マーフィー」

4416 「それはツツパリでござす」

扇子「Oh だったら全身緑色で 魔貫光殺砲を使うキャラクターかい？ マーフィー」

4416 「それはピツコロだ 何を寝言を言っている！」

扇子「Sorry つまるところSquidだな！ マーフィー！」

4416 「それはくコ：ミ」

扇子「HAAAAA! 最高だぜ マーフィー！」

4416 「自分はマーフィーではない」

扇子「OKOK 一旦落ち着こうぜ マーフィー」

4416 「アイムノットマーフィー」

扇子「小耳に挟んだ程度だが 神罰者とかいうCrazy野郎をとっ捕まえようとしてるんだろ？」

「だったらオレに最高でCoolな考えがあるぜ！ マーフィー！」

4416 「なにその饒舌な外国人みたいな喋り方」

扇子「要はヤツは 1人の時に狙うというタマ無し野郎だ

つまり だだっ広い場所で無防備に突っ立ってりやあ 格好の餌食ってモンよ！ マーフィー！」

4 4 1 6 「神罰者は女の子かもしれんぞ」

扇子「はてしかし そう都合良く広い部屋なんてあるもんかい？  
マーフィー」

4 4 1 6 「そう思うだろ？ ドリー」

なんとここには ヴァジュラも丸々入っちゃう部屋があるんだぜ！」

扇子「なんだって!? それはホントかい!? マーフィー！」

4 4 1 6 「自分が一度だってウソをついた事があるかい？ ドリー」

答えはカンタン！訓練場さ！」

扇子「なるほど Training room！」

確かにそこならヴァジュラも容易く収まっちゃうな！ マー  
フィー！」

4 4 1 6 「だけど 訓練場で待ち伏せはデメリットもあるのさ

なんだと思う？ ドリー」

扇子「Demeritかい？」

広い部屋なんだから ヤツに攻撃されても避けやすいだろう  
？ マーフィー」

4 4 1 6 「そうだ 避けやすいのさ

つまり キャプチャー・ガンが避けられる可能性もあるって事  
さ ドリー」

扇子「なんと！ソイツは盲点だったぜ！ マーフィー！」

4 4 1 6 「広い部屋はかえって不都合

しかし狭い場所だと ヤツに攻撃された時が怖い

これは詰んだか？ ドリー」

扇子「いや まだ諦めるには早いぜ マーフィー」

4 4 1 6 「なに？この状況でも入れる保険でもあるのかい？ ド  
リー」

扇子「いやいや 保険なんて必要ないさ

狭い場所でAmbushすりゃいいのさ マーフィー」

4 4 1 6 「オイオイ 話を聞いてなかったのかい ドリー  
狭い所だと避けていくって言ったろう？」

扇子「マーフィーよ キミはどこに何があるか 誰よりも詳しい場所があるじゃないか」

4416 「んー？ どういう事だい？ ドリー」

扇子「わからないかい？ キミの部屋だよ マーフィー」

4416 「なんと！確かに自分の部屋なら位置関係を把握しやすい！

灯台もと暗しとはよく言ったものだな！ ドリー！」

扇子「マイルームなら ちよつとしたトラップを仕掛けてもNo problem！」

まさに独壇場ってワケだ！ マーフィー！」

4416 「流石だぜ！」

そうと決まれば早速 部屋に向かうとするぜ ドリー！」

扇子「おうともよ！ マーフィー！」

ムツミ「1人でなんか喋ってるけど… 何なんだろう…？」

ジーナ「あまり見ちゃダメよ」

「4416の部屋」

4416 「さて 部屋の現状を整理していこう

ベッドの上にはガラクタが多数 シェルフには比較的キレイなガラクタ

本棚にはマンガに小説 ラノベとか娯楽物ばかりの書籍」

扇子「このClose tには 沢山の衣類やクマの着ぐるみがあるようだな

変わった物を持っているな マーフィー」

4416 「食料用の段ボール箱の中は メツチャ綺麗に収納されている

それとは対照的に 雑品箱は極めて適当」

扇子「空き箱もいくつかあるな マーフィー」

4416 「ふむ なるほど

どこかの蛇みたいに段ボールに隠れてもいいけど この部屋に来ないと無意味だしな」

扇子「Ambushのために隠れるハズが 来ないためにAmbushできない」

隠れ損になっちゃうな マーフィー」

4416 「それに 仮に来たとしても視界は限られる

向こうがいきなり攻撃しない保証もない

どうしたものか」

扇子「いつそ箱を被って移動しようぜ

ヤツを見かけたら ただの箱にCamouflageすればいいのさ マーフィー」

4416 「それで騙されるのは単なるマヌケだけだ

ま そのマヌケが少ないとは限らんけど」

扇子「オイオイ だったらどうすればいいんだ？ マーフィー」

4416 「んで 罫を作ろうにも 作れそうなのは…

黒板消しトラップや鳴子みたいなのか作れん」

扇子「HHHHA！ アナログなTrapとは原始的だな！ マーフィー！」

4416 「そりやデジタルなのは作れんよ

リツカちゃんに頼んでもいいけど」

扇子「OKOK 原始人マーフィーにAdviceをやろう

要はヤツをここに誘い出して不意を突けりやいいワケだ」

4416 「せや

ただのカカシでも置くの？」

扇子「No もっと単純さ マーフィー

誘導と不意打ち この要素を成立させるには——」

——二日後 19:55

4416 「なんか昨日 コウタのところに神罰者が来たっぽいんで 案の定逃がしてしまってた」 モンヤモンヤ

扇子「アサルト使いなのに外すとはな!

いや 使い慣れたものとは違うからこそ 外してしまったのか? マーフィー」

4416 「どーなんだろう

ま それは置いというて 自分のところに神罰者来ないかな」

扇子「安心しな! オレの作戦は成功するぜ! マーフィー!」

4416 「だといいけど

ま 自分の技術も関係するし なるべく成功させてやるさ」

扇子「その意気だ マーフィー!」

4416 「……しかし 来るまで暇だなあ

なんか手軽に暇を潰せるもの…… 10面ダイスが2つある

10面でも丁半はできるな よし」

扇子「丁半つつと 2つのサイコロの目の合計が奇数か偶数かを当てる 極東のGambleだったか? マーフィー」

4416 「ボケろよ」

扇子「Oh Sorry! Chinaの料理だな? マーフィー」

4416 「それは炒飯アルヨ」

扇子「What? じゃあ 極東で使われていたというLanternのことかい? マーフィー」

4416 「それは提灯なり」

扇子「Oh だったらTelephoneやネットで物を買うことだな? マーフィー」

4416 「それはなんと! 通販! 通販となっております!」

扇子「Hum… わかったぜ!

イカサマをした とあるTeamのトップの事だな! マーフィー!」

4416 「10面全部 大槻班長じゃないか!

通るかこんなモン!」

扇子「HHHHH! やっぱり最高だぜ マーフィー!」

4416 「うむ ツツコミも悪くないものだ」

扇子「ところで マーフィー」

4 4 1 6 「うん？」

扇子「部屋の出入口にいるヤツは知り合いかい？ マーフィー」

4 4 1 6 「……………誰？」チラツ

扇子「Diceを取り出したあたりから居たぜ マーフィー」

4 4 1 6 「少なくとも 高ランクの闇魔術を使いそうな魔術師みたいな姿は知らないなあ

ましてや顔が見えない程のローブを着てるヤツなんて見たことない」

扇子「となると アイツが神罰者だな マーフィー」

4 4 1 6 「そうだな よし

捕獲大作戦といきますか」スツ

神罰者「……………」

4 4 1 6 「あんたがエイムズか？」

神罰者「……………」

4 4 1 6 「あんたがエイムズか？」

扇子「オレはドリーだぜ マーフィー」

4 4 1 6 「お前じゃない

あんたがエイムズか？」

神罰者「……………私は神罰者」

4 4 1 6 「オイオイオイ ノってくれよ

せっかく指向性マイクまで構えてたのに」ポイツ

神罰者「神に抗う者を 制裁する」

4 4 1 6 「つと この鉄砲が目に入らないかい？

変な動きを見せたら アンタが制裁を受けるハメになっちまうぜ？」カチャ

扇子「制裁（意味深）だな！

アラガミ相手にそんな展開にもってこうつてのかい？ マーフィー」

4 4 1 6 「ヤメロオ！ それはノーサンキューだ！」

神罰者「……反逆の代償は 高く付く」ブオン

4 4 1 6 「ぬわーっつ!!」

扇子「マーファイイイ!!」

4 4 1 6 「…と まだ生きている!

貴様の行動は予測済みやで!」

扇子「アナログ式対策 No. 1!

プロテクター!」

4 4 1 6 「予め右胸ポケットにあずきバーを仕込んでいたのさ!

まさかここまで硬いとは思わなかったがな!」

扇子「ヤツの得物は どうやら鋭利なオラクル弾のようだな!

霧散して消えるあたり 証拠が残らねえのも納得つてモンよ

! マーファイー!」

4 4 1 6 「そこだ! ドーン!」バシユツ

神罰者「…: 神に歯向かう者に裁きを」ヒョイツ

4 4 1 6 「かなり身軽だなオイ」

扇子「まだ1発残ってるぜ マーファイー!」

4 4 1 6 「これ外したら終わりだけど」

神罰者「…: 神の前では 人間など無力」ガシツ

4 4 1 6 「ジーザス! 両腕掴まれたでヤンス!」

扇子「マーファイーイイイ!!」

4 4 1 6 「ふぬぬのの…!」

アカーーン! 力強い!」グググ

神罰者「現世からの追放… 死を以て贖罪を…:」

ネチヨツ

神罰者「…:…?」

4 4 1 6 「…:…:」

扇子「…:…:」

シエル「…:命中…:させました」in ダンボール

神罰者「…:…:」ネチヨリ

4 4 1 6 「ふうううう 死ぬかと思った」



扇子「まさに危機一髪だったな マーフィー！」

神罰者「…人間風情が 神を縛ることなど……」ネチヨネチヨ

シエル「それはどうでしょう」ペイツ

神罰者「……!!」ビリビリネチヨネチヨ

4416「よし やつと離してくれた

うわーはー 痕がうつすら残ってら」

扇子「ホールドトラップ！」

動きを縛った後でホールドさせる なんと訳の分からない

手順だな！ マーフィー！」

シエル「では 私はサカキ支部長へ報告に行きます」

4416「おk 見張りはマカセロ」

神罰者「……」ビリネチヨビリネチヨ

扇子「――誘導と不意打ち この要素を成立させるには……」

4416「うんうん」

扇子「2人いりやあいのさ！マーフィー！」

4416「……え？」

扇子「どうしたんだい？ マーフィー」

お子様ランチを頼んだらFlagが刺さってなかった みた  
いな顔をして」

4416「いや… 2人？」

扇子「そうさ2人だよ マーフィー」

片方は堂々として もう片方はHide

そうすりや成立する上 1人だと錯覚させられる！」

4416「…あ そうか なるほど

1人で行動しなきゃいけないという前提のせいで思いつかな  
かったのら」

扇子「オイオイ しっかりしてくれよ マーフィー」

4416「うん まあ 確かにそれで誘導と不意打ちは問題ないけ

ど

いつ来るかもわからんのに　ずっと隠れてもらおうわけにはい  
かないじゃん」

扇子「マーフィーが隠れるという選択肢は無いのかい？」

4416「自分はほら　じつとしてられんし」

扇子「H A H A H A！　その通りだな！

しかし　まだまだだな　マーフィーよ」

4416「どゆこと？」

扇子「まだまだ前提に囚われているって事さ　マーフィー」

4416「まだ前提に？　うーん…

狭い場所じゃないといけないってのか？」

扇子「N o　答えを言ってもいいが　マーフィーのためにはならな  
いからH i n tをやろう

マーフィーは　神機が使えないせいで　ある物を見落として  
いるのさ」

4416「んー？　わからんなー

も1個ヒント」

扇子「O K　もう1つのH i n t　それは…

マーフィー達をはじめ神機使い達は　神機だけでアラガミを  
倒してるわけじゃないってところだな」

4416「神機だけじゃなく　ねー

…アイテムか？」

扇子「E x c e l l e n t！　I t e mさ！

それらは神機がなくとも使えるだろう？　マーフィー」

4416「なるほど確かに

とはいっても　使えるものは限られるけどなあ」

扇子「H u m…　ではマーフィーが思う　使えるI t e mを挙げて  
みてくれ」

4416「えーっと　トラップ3種にスタングレネードぐらいじゃ  
ね？」

扇子「まったく　視野が狭いな　マーフィー」

4 4 1 6 「他になにがあるってんだ？」

扇子「おびき寄せせるのにピッタリのシロモノがあるだろう？ マーフィー」

4 4 1 6 「そんなのあったっけ？」

扇子「挑発フェロモンだよ マーフィー」

4 4 1 6 「挑発……？」

扇子「ん？ 知らないのかい？ マーフィー」

4 4 1 6 「……あーなんかそんなのあったなあ

1度も使ったことないからすっかり忘れてた」

扇子「…やれやれ オレがいないとどうなってた事やら

先が思いやられるよ マーフィー」

4 4 1 6 「スマヌ

…となると 挑発の逆の方は 隠れる側に使わせるとええかな」

扇子「おつ マーフィーにしては鋭いな

そうさ 両者を合わせれば 隠れている方は O u t o f

眼中ってワケさ」

4 4 1 6 「その言葉古くね？」

扇子「要点をまとめると マーフィーは挑発フェロモンを H i d e 側は偽装フェロモンを使えばいいってワケさ」

4 4 1 6 「把握 これで骨組みは出来たな

あとは如何にしてヤツを捕まえるか」

扇子「相手の能力は U n k n o w n

何をしてくるかもわからない

対策すら思いつかないかい？ マーフィー」

4 4 1 6 「いや 神機は使えなくともアイテムは使えるワケだ

なんか被ダメ抑えるのもあった気がするから それを使えば  
なんとか」

扇子「上出来だ マーフィー」

4 4 1 6 「あと 右胸に攻撃するってのもわかっているから その部分のポケットに硬いものを入れておこう

なんか良いのないかなー？」ガサゴソ

扇子「Well: ポケットサイズのプロテクター:

そんな都合の良い物なんてあるのかい？ マーフィー」

4416「あつたら良いなって程度の認識で」

扇子「OK これで防御面の方は少しは大丈夫だろう

次は攻撃面 マーフィーが囷になるワケだが 出来ればマー  
フィーが捕らえる方が望ましい

しかし 相手は身軽かもしれないぜ？ マーフィー」

4416「カウンターを狙う:のはキツイかな

外したら終わりみたいなモンだし」

扇子「少なくとも ヤツが元気な内は当てにくいだろうな マー  
フィー

動きを制限させるのも難しいな」

4416「うーん: ホールド仕掛ける?」

扇子「引つ掛かってくれればいいんだがな

ヤツは少なくとも 人の言葉を喋る程度の知能はあるからな  
マーフィー」

4416「お前の方は喋ってるという時点で知能どうこう以前の間  
題だな」

扇子「H A H A H A! それは言わない約束だぜ! マーフィー  
!」

4416「んー しかし どうしようか」

扇子「一種の賭けになるが 煽ってみるってのはどうだい? マー  
フィー」

4416「ええ: それ攻撃が激化しない?」

扇子「だから賭けだと言ったろう? マーフィー  
知能だけでなく感情も持っているなら 冷静さを欠くと思う  
んだが」

4416「うん まあ頭はあまり回らなくなるかもな」

扇子「動きがSimpleになったり あわよくば掴みかかってく  
るなんて事もあるだろう

その時がChanceだと思うぜ マーフィー」

4416 「掴まれたらおしまいですよん」

扇子「NONONO! 確かにピンチではあるが 同時にヤツも動けなくなるってワケさ! マーフィー!」

取っ組み合いの後ろで Ambush側がBang!と1発入っちまえばOK!」

4416 「うーん 危険な賭けだなあ

念のため何とかかんとか剤で体力も増やしとくか」

扇子「さあ ここまでくれば 後はActorとして誰を選ぶかだ Actressでも構わないぜ? マーフィー」

4416 「そうだなあ 隠れるのが上手そうなのは…

英才教育受けてたっぽいシエルかな」

扇子「シエルというと あの銀髪のGrammar girlだな!

狭い所で隠れるとちと息苦しくなりそうだが マーフィーが選ぶなら反対しないぜ!」

4416 「後で事情を説明してだ…

流石に今すぐ決行ってのも急すぎるし 二日後ぐらいでいいか」

扇子「念のためにSimulationして 作戦に穴がないか確かめる必要もあるしな!

だが忘れちゃいけない 準備中にヤツが来るかもしれねえぜ

マーフィー」

4416 「その点のご都合主義でカバーできるし 問題ない」メ  
タア

扇子「身も蓋もねえなあ! マーフィー!」

4416 「——というのが 今回の作戦だったというわけだ」

扇子「いきなりどうしたんだい? マーフィー」

4 4 1 6 「いや ただの独り言だ

気にするな！」

扇子「…？ まあ マーフィーがそういうなら」

4 4 1 6 「さてさて 引き取りまで暇だし 先に神罰者がどんなのか詳しく見てみるとしますかな」

扇子「オイオイ それで逃がしたりでもしたらどうするつもりだい？ マーフィー」

4 4 1 6 「大丈夫だいじょーぶ 顔見るだけだから」ペラッ

神罰者「……………」

4 4 1 6 「…………んー 誰だ？」

少なくとも見た事はない顔だね」

扇子「網が効いてるなら アラガミだということは間違いないんだろ？ マーフィー

知り合いのアラガミでもいるのかい？」

4 4 1 6 「いや 交友関係のあるアラガミなんて シマガツオ龍しかおらんよ」

扇子「いったい誰だい？ そのシマブクロ悠ってのは？ マーフィー」

4 4 1 6 「自分の神機に憑依した金魚だよ」

扇子「まあ それは置いといてだ

この神罰者とやら 野郎かと思ったらCuteな女の子じゃないか マーフィー」

4 4 1 6 「せやな」

神罰者「……………」

4 4 1 6 「1つ訊きたいことがあるんだけどいいか？」

扇子「何だい？ マーフィー」

4 4 1 6 「お前じゃない

で N o と言っても質問するけど いいか？」

扇子「それは確認をとる意味あるのかい？ マーフィー」

4 4 1 6 「念のためだよ 念のため

ホントに1つだけだから さな」

神罰者「……………」

4 4 1 6 「あんたがエイムズか？」

扇子「オイオイオイ！マーフィーよお！

そんな事よりも他に訊くべき事があるだろう!」

4 4 1 6 「ジョーク ジョーク ジャック

で…… 何を訊こうとしたんだっけ？」

扇子「しっかりしてくれよ マーフィー!」

4 4 1 6 「とととつ 思い出したのだ

なにゆえ神機使いを狙っていたのでござりまするか？」

神罰者「……………」

扇子「へへっ どうやらビビツちまって声も出ないようだな マー

フィー」

4 4 1 6 「どつちかつてーと 引いてると思われ」

神罰者「……私は 神罰者」

4 4 1 6 「おっ」

神罰者「…神に牙を剥く者に 罰を与える

……それが 私の使命」

4 4 1 6 「えー そう言われてもなあ

アラガミ倒さな 自分ら死ぬし」

神罰者「……頂点にいるべきは神 神こそが全て

…自然の摂理 それに反逆しているのは 他ならぬ人間

……」

4 4 1 6 「んー… でもやつぱり向こうも襲ってくる以上 テキヤ

ん？

敵だから仕方なく戦うじゃん？」

神罰者「…神の力を人が手にする…… それもまた摂理から外れて

いる…

人間は本来 神に仇なす存在などではない……」

4 4 1 6 「さて この紙コップの中のサイコロの和は 丁か半か

？」

扇子「オレは丁に賭けるぜ！ マーフィー!」

神罰者「……………」

4416 「結果発表おおおお!!」

8, 4の丁! 流石だな ドリー!」

扇子「へへっ 当たり前だろ マーフィー!」

サカキ「おやおや 思ったよりも緊迫している状況ではなかったみたいだね」

4416 「あ どーも」

サカキ「まさかここまで早く捕獲出来るとは思わなかったよ

嬉しい誤算だ」

ソーマ「流石だな」

4416 「んー まあ ドリーとシエルがいなかったら捕まえられなかったかもだし 鴨出汗

自分だけで捕まえたワケではナイジェリア」

扇子「キャプチャー・ガンも忘れちゃいけないぜ! マーフィー」

ソーマ「網の効果は… 問題ないみたいだな

やはりコイツはアラガミか」

4416 「あ 思ったんすけど この網って神機使いにはくつつかないんすか?」

サカキ「いい質問だ

もちろん そういった事故が起こらないよう 神機使いには

吸着しない仕様となっている」

ソーマ「神罰者捕獲の協力 感謝する

事後処理・調査は俺達が請け負う」

4416 「あいさー

んで 自分は手柄をたてたワケですしい なんか褒賞とかあないですかねえ?」

扇子「いやしいぜ マーフィー」

サカキ「ハツハハハ そうだね…

後日 ちよっとしたパーティーでも開くでしょう」

4416 「オーケイ レッツパーティー!」

やったぜ ドリー!」



扇子「…ああ そうだな マーフィー」

4 4 1 6 「ん？ どうした？」

なんか歯切れが悪いけど」

扇子「……………」

4 4 1 6 「オイオイ ドリー

隠し事は無しだつて約束したろ？ してないけど」

扇子「…やはり マーフィーには隠せねえや」

4 4 1 6 「お前を秘密をきいたつて 自分は笑いやしねえぜ ド

リー」

扇子「……………マーフィーよ」

4 4 1 6 「うん」

扇子「実は 神罰者を捕まえる為だけに オレはここにいるんだ…

マーフィー…

そして ヤツを捕獲した以上 オレがここにいる意味は無く  
なっちまったんだ」

4 4 1 6 「え… それつてまさか…」

扇子「ああ マーフィーとはお別れだ」

4 4 1 6 「そんな… 何もいなくなるこたあないだろ！

意味なんか無くとも いてはならない理由も無いハズだ！

だから…」

扇子「いや… それがオレの課せられた運命…

逆らうことは出来ないんだ マーフィー」

4 4 1 6 「待て… 待ってくれ…

自分たちはまだ会つてから三日目じゃないか！」

扇子「マーフィーと過ごした時間…

オレは決して忘れはしないぜ」

4 4 1 6 「ドリーとはまだやりたい事が沢山あるんだ！

相棒として 仲間として！ドリーはかけがえのない大切な仲

間の1人だ！」

扇子「…マーフィーにはまだ仲間が沢山いる

オレ1人いなくなつたところで あまり変わらないさ」

4416 「ドリーがいなきや生きてられないとは言わないが！  
仲間を失う辛さ！これだけはもう味わいたくないんだ！」

扇子「……マーフィー」

4416 「だから… だから！」

扇子「…Adios マーフィー」

4416 「ドリーイイイイ!!」

ソーマ「…止めなくていいのか アレ」

サカキ「一人芝居とはいえ ジャマしてはいけないだろう？」

扇子「サイコーの名演技だったぜ！ マーフィー！」

4416 「演じた自分自身が泣きそうな程だったな ドリー」

——三日後

「ラウンジ」

4416 「」

神罰者「……………」

ソーマ「訳あって 管理という名目で極東支部に——」

4416 「瑠璃!? なぜ瑠璃がここに!?!」

逃げ出したのか!? 自力で脱出を!?!」

ジュリウス「(無言の腹パン)」

4416 「瑠…璃……………」

ジュリウス「彼女は瑠璃ではない」

ソーマ「……………」

神罰者「……………」

4416 「1人目の4416がやられたようだな

だがヤツは四天王の中でも最弱…」

ソーマ「…茶番はいい」

4416 「あ はい」

ソーマ「少なくともコイツとは対話・意思疎通が可能なことが判明  
した

野放しにするよりここで繋ぎ止めておくというのが サカキのおっさんの考えだ」

ジュリウス「…しかし 我々神機使いに危害を加えた事実は消えな  
い

その点も考慮してでの判断で？」

ソーマ「…さあな

まあ サカキのおっさんのことだ

それなりの理由があるんだろう…」

4416 「おい アイス食わねえか？」

おまいが割ったあずきバー」

神罰者「……………」

4416 「あずきバーはいらないと？」

神罰者「……………」

4416 「じゃあ このカレーパンでどうだ？」

特別にとっておきのをやるぞ」

神罰者「……………」

4416 「んー？ もしかするとドリンクを所望するとな？」

じゃあ このドールのコーヒーをば」

神罰者「……………」

4416 「えー… 食い物はいらない？」

では 特別な瑞雲をやろう」

神罰者「……………」

4416 「へんじがない

ただのしかばねのようだ」

神罰者「……………」

4416 「ん？」

神罰者「…名前が ほしい……」

4416 「名前？」

ソーマ「ああ… ここに連れてきた理由の一つとして コイツに名前をくれてやるといのがあってな

サカキのおっさんは 皆が自由につけていいと」

ジユリウス「なるほど… しかし 俺はこういう事には疎いからな  
…

隊長は何か案はあるか？」

4416 「さつき『罰 神様 名前』でググってみたら ネメシスが  
ヒットしたお」

ジユリウス「ネメシス…」

4416 (『あんたがエイムズか？』って言いそびれたけど まあい  
いか)

神罰者「……………」

4416 「ネメシスから二文字取って『ネメ』か『メシ』か『シス』  
『ネス』も可」

神罰者「……………ネメ」

4416 「オツケ 今日からお前はネメだ！

よろ色即是空」

ソーマ「…本人が決めたなら それでいいか」

ネメ「…私はネメ

罰の執行を担っていた者……………」

4416 「色即是空…」スィー

ユリウス「ヒカリアレ！」

4416 「ぬわーっつ!!」

ジユリウス「誰だ今のは」

ネメ「……………私の使命は更新された

罪深き人間の最期を見届ける…」

ソーマ「…その『罪深き人間』の中でも 特別変わったのが目の前  
にいるヤツだ

せいぜい噛み付かれないよう 気をつけることだ」

ユリウス「ヤミヘカエレ！」

4416 「ラー油！」

ジユリウス「NKT…」

ソーマ「……………このオツサンは誰だ」

ユリウス「ユリウス・ベルモンドだ

よろ色即是空」

4416 「2人目の4416を倒したようだな…

言っておくが自分は五人衆の中でも3番目に強い」

ネメ「…人間は どこからともなく現れる

そして 死しても刹那 復活する…」

ソーマ「いや… コイツらがおかしいだけだ…」

— STAFF —

PRODUCER

IGA

(中略)

AND YOU!

.

— The END —